

特215

845

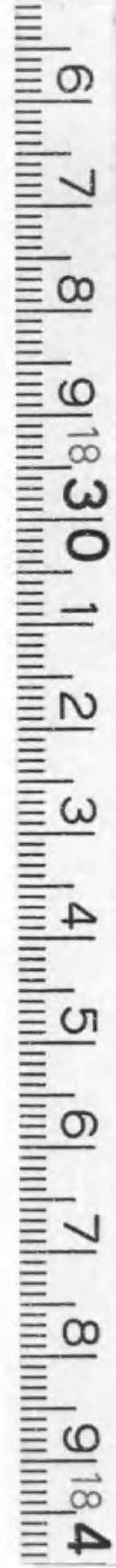
版書科教・庫文波岩

1

古 事 記

訂校友成田幸

店書波岩



始



260

特215  
845



古 事 記

幸田成友校訂



岩波書店



## 古事記序

臣安萬侶言す。夫れ混元既に凝りて、氣象未だ效れず、名も無く爲も無し、誰かその形を知らむ。然して乾坤初めて分れて、參神造化の首を作し、陰陽斯に開けて、二靈群品の祖たり。所以に幽顯に出入して、日月目を洗ふに彰はれ、海水に浮沈して、神祇身を滌くに呈る。故太素の杳冥なる、本教に因りて而して土を孕み島を産みしの時を識り、元始の綿邈たる、先聖に頼りて而して神を生み人を立てしのを察す。寔に知る鏡を懸け珠を吐きて、而して百王相續き、劍を喫ひ蛇を切りて、以て萬神蕃息することを。安河に議りて天下を平げ、小瀆に論ひて國土を清めき。是を以て番仁岐命、初めて高千嶺に降り、神倭天皇、秋津島に經歷したまふや、化熊穴を出でて、天劍高倉に獲、生尾徑を遮り、大鳥吉野に導く。御を列ねて賊を攘ひ、歌を聞きて仇を伏す。即ち夢に覺りて神祇を敬ふ、所以に賢后と稱せらる、烟を望みて黎元を撫す、今に於て聖帝と傳ふ。境を定め邦を開きて、近淡海に制し、姓を正し氏を撰して、遠飛鳥に勅す。步驟各異に、文質同じからずと雖も、古を稽へて以て風猷を既に頽れたるに繩し、今を照して以て典教を絶えんと欲するに補はずといふこと無し。飛鳥清原大宮に大八洲を御せる天皇の御世に暨ひて、潜龍元を體し、洊雷期に應ず。夢歌を聞きて業を纂がむことを想ひ夜水に投りて基を承けむことを

4 知る。然れども天時未だ臻らざりしかば、南山に蟬蛻し、人事共に治くして、東國に虎歩したまひき。皇輿忽ち駕して、山川を凌渡し、六師雷震し、三軍電逝す。杖矛威を擧げて、猛士烟起し、絳旗兵を耀かして、凶徒瓦解す。未だ浹辰を移さずして、氣沓自ら清まりぬ。乃ち牛を放ち馬を息へ、愷悌して華夏に歸り、旌を卷き戈を戟め、御詠して都邑に停まりたまふ。歳大梁に次し、月夾鐘に踵り、清原大宮にして、昇りて天位に即きたまふ。道は軒后に軼ぎ、德は周王に跨ゆ。乾符を握つて六合を摠べ、天統を得て八荒を包ぬ。二氣の正しきに乗じ、五行の序を齊ふ、神理を設けて以て俗を獎め、英風を敷きて以て國を弘めたまふ。重加智海浩瀚として、上古を潭探し、心鏡煒煌として、先代を明觀す。是に於て天皇之を詔したまはく、朕聞く諸家の賚たる所の帝紀及び本辭既に正實に違ひ、多く虚偽を加ふと。今の時に當つて、その失を改めずば、未だ幾年を経ずして、その旨滅びんと欲す。斯れ乃ち邦家の經緯、王化の鴻基なり。故惟帝紀を撰録し、舊辭を討覈して、偽を削り實を定め、後葉に流へむと欲すとのたまふ。時に舍人有り、姓は稗田、名は阿禮、年はれ廿八。人と爲り聰明にして、目に度れば口に誦み、耳に拂れば心に勅す。即ち阿禮に勅語して、帝皇の日繼及び先代の舊辭を誦み習はしむ。然れども運移り世異にして、未だその事を行ひたまはざりき。伏して惟ふに皇帝陛下、一を得て光宅し、三に通じて亭育したまふ。紫宸に御して德は馬蹄の極まるところに被り、玄扈に坐して化は船頭の逮ふところを照したまふ。日浮びて暉を重ね、雲散りて烟に非ず。柯を連ね穂を并はすの瑞、史書することを絶たず、烽を列ね譯を重ねるの貢、府空しき月無し。名は文命よりも高く、德は天乙に冠れりと謂つべ

古

事

記

し。焉に於て舊辭の誤り忤へるを惜み、先紀の謬り錯れるを正さむとして、和銅四年九月十八日を以て、臣安萬侶に詔して、稗田阿禮が誦む所の勅語の舊辭を撰録して、以て獻上せしむてへり。

古 謹みて詔旨に隨ひ、子細に採り摭ふ。然るに上古の時、言意并に朴にして、文を敷き句を構ふること、字に於て即ち難し。已に訓に因りて述ぶれば、詞心に逮ばず。全く音を以て連ぬれば、事の趣更に長し。是を以て今或は一句の中、音訓を交へ用ひ、或は一事の内、全く訓を以て録す。即ち辭理見え匡きは、注を以て明にし、意況解し易きは更に注せず。亦姓の目下に於て、玖沙河と謂ひ、名の帶の字に於て多羅斯と謂ふ。かくの如きの類は本に隨つて改めず。大抵記す所は、天地の開闢より始めて、以て小治田の御世に訖ふ。天御中主神より以下、日子波限建鸕草葺不合尊より以前を上卷と爲し、神倭伊波禮毘古天皇より以下、品陀の御世より以前を中卷と爲し、大雀、皇帝より以下、小治田の大宮より以前を下卷と爲す。并せて三卷を録し、謹みて以て獻上す。臣安萬侶、誠惶誠恐、頓首頓首。

和銅五年正月二十八日

正五位上勳五等太朝臣安萬侶 謹上

古事記 上卷

天地のはじめの時、高天、原に成りませる神の名は、天之御中主神。次に高御産巢日神。次に神産巢日神。この三柱の神は、みな獨神成りまして、身を隠したまひき。

次に國稚く、浮脂の如くにして、水母なす漂へる時に、葦牙の如萌え騰る物に因りて成りませる神の名は、宇麻志阿斯訶備比古遲神。次に天之常立神。この二柱の神も獨神成りまして、身を隠したまひき。

上の件、五柱の神は別天神。

次に成りませる神の名は、國之常立神。次に豐雲野神。この二柱の神も、獨神成りまして、身を隠したまひき。次に成りませる神の名は、宇比地邇神。次に妹須比智邇神。次に角杵神。次に妹活杵神二柱。次に意富斗能地神。次に妹大斗乃辨神。次に添母陀坑神。次に妹阿夜訶志古泥神。次に伊邪那岐神。次に妹伊邪那美神。

上の件、國之常立神より下、伊邪那美神まで、并せて神世七代とまをす。「上の二柱は、獨神各一代とまをす。次に雙ひます十神は、各二神を合せて一代とまをす。」

ここに天神諸の命を以ちて、伊邪那岐、命伊邪那美、命二柱の神に、この漂へる國をつくり固め成

せと詔りこちて、天、沼矛を賜ひて、ことよさしたまひき。故二柱の神、天、浮橋に立たして、その沼矛を指し下して攪きたまへば、鹽をろこをろに攪きなして、引き上げたまふ時に、その牙のさきより滴る鹽、積りて島と成る。これ澁能基呂島なり。その島に天降りまして、天之御柱を見立て、八尋殿を見立てたまひき。

ここにその妹伊邪那美、命に、汝が身は如何に成れると問ひたまへば、吾が身は成り成りて、成り合はざるところ一處ありとまをしたまひき。ここに伊邪那岐、命詔りたまひつらく、我が身は成り成りて、成り餘れるところ一處あり、かれこの吾が身の成り餘れる處を、汝が身の成り合はざる處に刺し塞ぎて、國生み成さむと思ふは奈何にとのりたまへば、伊邪那美、命しか善けむとまをしたまひき。ここに伊邪那岐、命、然らば吾と汝とこの天の御柱を行き廻りあひて、美斗能麻具波比せなどのりたまひき。かくいひ契りて、乃ち汝は右より廻り逢へ、我は左より廻り逢はむとのりたまひ、契り竟へて廻ります時に、伊邪那美、命先づあな美哉男をとのりたまひ、後に伊邪那岐、命あな美哉をとめをとのりたまひき。各のりたまひ竟へて後に、その妹に女人を言先立ちてふさはずとのりたまひき。然れども隱處におこして、子水蛭子を生みまひき。この子は葦船に入

れて流しすてつ。次に淡島を生みたまひき。是も子の數には入らず。ここに二柱の神譲りたまひつらく、今吾が生めりし子ふさはず、猶天の神の御許所に白すべしとのりたまひて、即ち共にまる上りて、天の神のみことを請ひたまひき。ここに天の神のみこと以ちて、布斗麻逸に卜へてのりたまひつらく、女をこと先立ちしに因りてふさはず、亦還り降りて改め言

へとのりたまひき。かれ乃ち反り降りまして、更にかの天の御柱を先の如往き廻りたまひき。ここに伊邪那岐、命、先づあな美哉をとめをとのりたまひ、後に妹伊邪那美、命、あな美哉をとめをとのりたまひき。かくのりたまひ竟へて、御合ひまして、子淡道之穗之狭別、島を生みたまひき。次に伊豫の二名、島を生みたまひき。この島は身一つにして面四つあり、面毎に名あり。かれ伊豫國を愛比賣といひ、讚岐國を飯依比古と謂ひ、粟國を、大宜都比賣と謂ひ、土左國を建依別といふ。次に隱岐の三子、島を生みたまふ。またの名は天之忍許呂別。次に筑紫、島を生みたまふ。この島も身一つにして面四つあり、面毎に名有り。かれ筑紫國を白日別と謂ひ、豊國を豐日別と謂ひ、肥國を建日向日豐久士比泥別といひ、熊曾國を建日別と謂ふ。次に伊岐、島を生みたまふ。またの名は天比登都杜といふ。次に津島を生みたまふ。またの名は天之狭手依比賣と謂ふ。次に佐度、島を生みたまふ。次に大倭豊秋津島を生みたまふ。またの名は天、御虛空豊秋津根別といふ。かれこの

八島を先づ生みませる國なるに因りて、大八島國と謂ふ。さて後還りました時に、吉備、兒島を生みたまふ。またの名は建日方別といふ。次に小豆島を生みたまふ。またの名は大野手比賣といふ。次に大島を生みたまふ。またの名は太多麻流別といふ。次に女島を生みたまふ。またの名は天一根といふ。次に知訶、島を生みたまふ。またの名は天之忍男といふ。次に兩兒、島を生みたまふ。またの名は天兩屋といふ。〔吉備、兒島より天兩屋、島まで并せて六島〕。

既に國を生み竟へて、更に神を生みます。かれ生みませる神の名は、大事忍男神。次に石土郎古神を生みまし、次に石巢比賣神を生みまし、次に大戸日別神を生みまし、次に天之吹男神を生みまし、次に大屋毘古神を生みまし、次に風木津別之忍男神を生みまし、次に海の神名は大綿津見神を生みまし、次に水戸の神名は速秋津日子神を生みまし、次に妹速秋津比賣神を生みまし。

〔大事忍男神より秋津比賣神まで并せて十神〕。

この速秋津日子速秋津比賣二柱の神、河海によりて持別けて生みませる神の名は、沫那藝神。次に沫那美神。次に類那藝神。次に類那美神。次に天之水分神。次に國之水分神。次に天之久比奢母智神。次に國之久比奢母智神。

〔沫那藝神より國之久比奢母智神まで并せて八神〕。

次に風神名は志那都比古神を生みまし、次に木神名は久久能智神を生みまし、次に山神名は大山津見神を生みまし、次に野神名は鹿屋野比賣神を生みまし。またの名は野相神とまをす。

〔志那津比古神より野相神まで并せて四神〕。

この大山津見神野相神二神、山野によりて持別けて生みませる神の名は、天之狹土神。次に國之狹土神。次に天之狹霧神。次に國之狹霧神。次に天之闇戸神。次に國之闇戸神。次に大戸惑子神。次に大戸惑女神。

〔天之狹土神より大戸惑女神まで并せて八神〕。

次に生みませる神の名は、鳥之石楠船神、またの名は天鳥船といふ。次に大宜都比賣神を生みまし、次に火之夜速男神を生みまし。またの名を火之炫毘古神といひ、またの名を火之迦具土神といふ。この子を生みまますによりて、美蕃登やかえて病臥せり。たぐりに生りませる神の名は金山毘古神。次に金山毘賣神。次に尿に成りませる神の名は、波瀾夜須毘古神。次に波瀾夜須毘賣神。次に尿に成りませる神の名は彌都波能賣神。次に和久産巢日神。この神の子を豊宇氣毘賣神といふ。かれ伊邪那美神は、火神を生みませるに因りて、遂に神避りましぬ。

〔天鳥船より豊宇氣毘賣神まで并せて八神〕。

凡て伊邪那岐伊邪那美二神共に生みませる島壹拾肆島、神參拾伍神。〔こは伊邪那美神未だ神避りまさざりし前に生みましつ。唯意能基呂島は生みませるならず、また蛭子と淡島とも子の例に入らず。〕

かれここに伊邪那岐命詔りたまはく、愛しき我が汝妹の命や、子の一木に易へつるかもとのりたまひて、御枕方に匍匐ひ、御足方に匍匐ひて、哭きたまふ時に、御涙に成りませる神は、香山の敵尾の木のもとにます、名は泣澤女神。かれその神避りましし伊邪那美神は、出雲國と伯伎國との堺比婆之山に葬しまつりき。ここに伊邪那岐命御佩せる十拳劔を抜きて、その子迦具土神の頸を斬りたまふ。ここにその御刀の前に著ける血、湯津石村に走りつきて成りませる神の名は、石折神。次に根折神。次に石筒之男神。次に御刀の本に著ける血、湯津石村に走りつきて

成りませる神の名は、速速日神。次に速速日神。次に建御雷之男神。またの名は建布都神、またの名は豊布都神。次に御刀の手上に集る血、手俣より漏出て成りませる神の名は、閼添加美神。次に閼御津羽神。

〔上の件、石拆神より下、閼御津羽神まで、并せて八神は、御刀に因りて生りませる神なり。〕殺さえましし迦具土神の頭に成りませる神の名は、正鹿山津見神。次に胸に成りませる神の名は、淤麻山津見神。次に腹に成りませる神の名は、奥山津見神。次に陰に成りませる神の名は、關山津見神。次に左の手に成りませる神の名は、志藝山津見神。次に右の手に成りませる神の名は、羽山津美神。次に左の足に成りませる神の名は、原山津見神。次に右の足に成りませる神の名は、戸山津見神。

古 事 記

〔正鹿山津美神より戸山津見神まで并せて八神〕。

かれ斬りたまへる刀の名は、天之尾羽張といひ、またの名を伊都之尾羽張といふ。ここにその妹伊邪那美命を相見まくおもほして、黄泉國に追ひ往てまじき。すなはち殿騰戸より出で向へます時に、伊邪那岐命語らひたまはく、愛しき我が汝妹の命、吾汝と作れりし國、未だ作り竟へずあれば、還りまされと詔りたまひき。ここに伊邪那美命の白したまはく、悔しきかも、速く來まされ。吾は黄泉戸喫しつ。然れども愛しき我が汝兄の命、入り來ませる事恐れれば還へりなむを。まづ具に黄泉神と論はむ。我をな視たまひそ。かく白して、その殿内に還り入りませるほど、いと久しくて待ちかねたまひき。かれ左の御髻に刺させる湯津爪櫛の男柱一箇取

り取きて、一ッ火燭して入り見ます時に、蛆たかれとろろぎて、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には拆雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、并せて八くさの雷神成り居りき。

ここに伊邪那岐命見畏みて逃げ還りたまはく、その妹伊邪那美命吾に辱見せたまひつとまをしまひて、やがて豫母都志許賣を遣はして追はしき。かれ伊邪那岐命黒御鬘を投げ棄てたまひしかば、乃ち蒲生子生りき。こを撫ひ食む間に逃げ行てますを、猶追ひしかば、亦その右の御髻に刺せる湯津爪櫛を引き闕きて投げ棄てたまへば、乃ち笋生りき。こを抜き食む間に、逃げ行てまじき。また後にはかの八くさの雷神に、千五百の黄泉軍を副へて追はしめき。かれ御佩させる十拳劔を抜きて、後手に振きつつ逃げ來ませるを、猶追ひて黄泉比良坂の坂本に到る時に、その坂本なる桃子を三つとりて待ち撃ちたまひしかば、悉に逃げ返りき。ここに伊邪那岐命桃子に

告りたまはく、汝吾を助けしがごと、葦原中國に有らゆる現しき青人草の、苦き瀬に落ちて、苦まむ時に助けてよと告りたまひて、意富加牟豆美命といふ名を賜ひき。

最後にその妹伊邪那美命身自ら追ひ來まじき。すなはち千引石をその黄泉比良坂に引き塞へて、その石の中に置いて、各對き立たたして、ことごとを度す時に、伊邪那美命言したまはく、愛しき我が汝兄の命。かくしたまはば、汝の國の人草、一日に千頭絞り殺さむとまをしたまひき。ここに伊邪那岐命詔りたまはく、愛しき、我が汝妹の命、汝然したまはば、吾はや一日に千五百箇屋立ててむとのりたまひき。こを以て一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人も生るる。



かれその伊邪那美命を黄泉津大神とまをす。またかの追ひしきしによりて、道敷大神ともいへり。またその黄泉坂に塞やれし石は、道反大神ともまをし、塞坐黄泉戸大神ともまをす。かれその謂ゆる黄泉比良坂は、今出雲國の伊賦夜坂ともいふ。

是を以て伊邪那岐大神の詔りたまはく、吾はいな醜め醜めき穢き國に到りて在りけり。かれ吾は御身の禊せなとのりまひて、竺紫の日向の橋、小門の阿波岐原にいであまして、禊ぎ祓ひたまひき。かれ投げ棄つる御杖に成りませる神の名は、衝立船戸神。次に投げ棄つる御帯に成りませる神の名は、道之長乳齒神。次に投げ棄つる御裳に成りませる神の名は、時置師神。次に投げ棄つる御衣に成りませる神の名は、和豆良比能宇斯能神。次に投げ棄つる御襪に成りませる神の名は、道保神。次に投げ棄つる御冠に成りませる神の名は、飽咋之宇斯能神。次に投げ棄つる左の御手の手纏に成りませる神の名は、奥珠神。次に奥津那藝佐昆古神。次に奥津甲斐辨羅神。次に投げ棄つる右の御手の手纏に成りませる神の名は、邊珠神。次に邊津那藝佐昆古神。次に邊津甲斐辨羅神。

右の件、船戸神より下、邊津甲斐辨羅神まで、十二神は、身に著ける物を脱ぎうてたまひしに因りて、生りませる神なり。

ここに上瀨は瀨速し、下瀨は瀨弱しと詔りごちたまひて、初て中瀨に降り瀨きて、滌ぎたまふ時に、成りませる神の名は、八十禍津日神。次に大禍津日神。この二神は、かの穢き繁き國に到りましたし時の、汚垢によりて成りませる神なり。次にその禍を直さむとして成りませる神の名は、

神直毘神。次に大直毘神。次に伊豆能賣神。次に水底に滌ぎたまふ時に成りませる神の名は、底津綿津見神。次に底筒之男命。中に滌ぎたまふ時に成りませる神の名は、中津綿津見神。次に中筒之男命。水の上に滌ぎたまふ時に成りませる神の名は、上津綿津見神。次に上筒之男命。この三柱の綿津見神は、阿曇連等が祖神ともち齋く神なり。かれ阿曇連等は、この綿津見神の子宇都志日金拆命の子孫なり。その底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命三柱の神は、墨江の三前大神なり。

ここに左の御目を洗ひたまふ時に成りませる神の名は、天照大御神。次に右の御目を洗ひたまふ時に成りませる神の名は、月讀命。次に御鼻を洗ひたまふ時に成りませる神の名は、建速須佐之男命。

卷

右の件、八十禍津日神より下、速須佐之男命まで、十四柱の神は、御身を滌ぎたまふに因りて生れませる神なり。

この時伊邪那岐命大く歡ばして詔りたまはく、吾は子生み生みて、生みの終に、三柱の貴子得たりと詔りたまひて、やがてその御頸珠の玉の緒もゆらに取り揺かして、天照大御神に賜ひて詔りたまはく、汝が命は高天原を知らせと、ことよさして賜ひき。かれその御頸珠の名を、御倉板舉之神とまをす。次に月讀命に詔りたまはく、汝が命は夜之食國を知らせと、ことよさしたまひき。次に建速須佐之男命に詔りたまはく、汝が命は海原を知らせと、ことよさしたまひき。かれ各よさし賜へる命のまにまに知らしめす中に、速須佐之男命、よさしたまへる國を知らさず

15

て、八拳須心前に至るまで、啼きいさちき。その泣きまたふ状は、青山を枯山なす泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき。是を以て悪ぶる神の音なひ、狹難なす皆涌き、萬物の妖悉に發りき。かれ伊邪那岐、大御神、速須佐之男、命に詔りたまはく、何とかも、汝はことよさせる國を治らさずて、哭きいさちるとのりたまへば、白したまはく、僕は妣の國根之堅洲國に罷らむとおもふが故に哭くとまをしたまひき。ここに伊邪那岐、大御神大く忿らして、然らば汝この國にはな住みそと詔りたまひて、乃ち神逐ひに逐ひたまひき。かれその伊邪那岐、大神は淡海の多賀になまします。

かれここに速須佐之男、命の言したまはく、然らば天照大御神にまをして罷りなむとまをしたまひて、乃ち天にまのります時に、山川悉に動み、國土皆震りき。ここに天照大御神聞き驚かして、我が汝兄の命の上り來ます由は、必ず善しき心ならじ。我が國を奪はむとおもほすにこそと詔りたまひて、即ち御髪を解き、御髻に纏かして、左右の御髻にも、御鬘にも、左右の御手にも、みな八尺の勾聰の五百津の御統の珠を纏き持たして、背には千入の鞆を負ひ、五百入の鞆を付け、また稜威の竹柄を取り佩はして、弓腹振り立てて、堅庭は向股に踏みなつみ、沫雪なす賑散して、稜威の男建踏み建びて、待ち問ひたまはく、など上り來ませると問ひたまひき。ここに速須佐之男、命白したまはく、僕は邪き心無し。唯大御神の命もちて、僕が哭きいさちる事をききたまひし故に、白しつらく、僕は妣の國に往らむとおもひて哭くとまをししかば、大御神、汝はこの國にはな住みそと詔りたまひて、神逐ひ逐ひ賜ふ故に、罷りなむとする状をまをさむとおもひてこそ

まのりつれ。異き心無しとまをしたまへば、天照大御神、然らば汝の心の清明きことは如何にして知らましとのりたまひき。ここに速須佐之男、命、各誓ひて、子生まなとまをしたまふ。かれここに各天、安、河を中に置きて誓ふ時に、天照大御神先づ建速須佐之男、命の佩かせる十拳劔を乞ひ度して、三段に打折りて、ぬなともゆらに、天之眞名井に振り濺ぎて、さ齧みに齧みて、吹き棄つる氣吹の狭霧に成りませる神の御名は、多紀理毘賣、命、またの御名は奥津島比賣、命とまをす。次に市寸島比賣、命、またの御名は狹依毘賣、命とまをす。次に多岐都比賣、命(三柱)。速須佐之男、命、天照大御神の左の御髻に纏かせる八尺の勾聰の五百津の御統の珠を乞ひ度して、ぬなともゆらに、天之眞名井に振り濺ぎて、さ齧みに齧みて、吹き棄つる氣吹の狭霧に成りませる神の御名は、正勝吾勝勝速日天之忍穗耳、命。また右の御髻に纏かせる珠を乞ひ度して、さ齧みに齧みて、吹き棄つる氣吹の狭霧に成りませる神の御名は、天之普卑能命。また御鬘に纏かせる珠を乞ひ度して、さ齧みに齧みて、吹き棄つる氣吹の狭霧に成りませる神の御名は、天津日子根、命。また左の御手に纏かせる珠を乞ひ度して、さ齧みに齧みて、吹き棄つる氣吹の狭霧に成りませる神の御名は、熊野久須毘、命。(并せて五柱)。ここに天照大御神、速須佐之男、命に告りたまはく、この後に生れませる五柱の男子は、物實我が物に因りて成りませり。かれ自ら吾が子なり。先に生れませる三柱の女子は、物實汝の物に因りて成りませり。かれ乃ち汝の子なり。かく詔り別けたまひき。

かれその先に生まれませる神、多紀理毘賣命は、宵形之奥津宮にます。次に市寸島比賣命は、宵形之中津宮にます。次に田寸津比賣命は、宵形之邊津宮にます。この三柱の神は、宵形の君等がもち齋く三前の大神なり。

かれこの後に生まれませる五柱の子の中に、天、善比命の子建比良鳥命、(こは出雲國造、志國造、上菟上國造、下菟上國造、伊自牟國造、津島縣直、遠江國造等の祖なり。)次に天津日子根命は、(凡川内國造、額田部湯坐連、茨木國造、倭田中直、山代國造、馬來田國造、道尻岐閉國造、周芳國造、倭滝知造、高市縣主、蒲生稻寸、三枝部造等の祖なり)

ここに速須佐之男命天照大御神に白したまはく、我が心清明き故に、我が生めりし子手弱女を得つ、これに因りて言さば、自ら我勝ちぬといひて、勝さびに天照大御神の營田の畔離ち溝埋め、またその大嘗聞しめ殿に尿まり散らしき。かれ然すれども、天照大御神は咎めずて告りたまはく、尿なすは、酔ひて吐き散らすこそ、我が汝兄の命かく爲つらめ。また田の畔離ち溝埋むるは、地を惜らしこそ、我が汝兄の命かく爲つらめと、詔り直したまへども、なほその悪しき態止まずて轉あり。天照大御神忌服屋にましくて、神御衣織らしめたまふ時に、その服屋の頂を穿ちて、天、斑馬を逆剃ぎに剃ぎて墮し入るる時に、天、衣織女見驚きて、稜に陰を衝きて死にき。かれここに天照大御神見畏みて、天、石屋戸を閉てて刺し隠りましき。すなはち高天原皆暗く、葦原、中、國悉に闇し。これに因りて、常夜住く。ここに宵の神の聲は、狹窺なす皆涌き、萬の妖

悉に發りき。是を以て八百萬の神天、安、河原に神集ひて、高御齋日神の子思金神に思はしめて、常世の長鳴鳥を集へて鳴かして、天安、河の河原の天、堅石を取り、天、金山の鏡を取りて、鍛入天津麻羅を求きて、伊斯許理度賣命に科せて、鏡を作らしめ、玉祖命に科せて八尺の勾聽の五百津の御統の珠を作らしめて、天、兒屋命布刀玉命を召びて、天、香山の眞男鹿の肩を内抜きに抜きて、天、香山の天、波波迦を取りて、占合まかなはしめて、天、香山の五百津眞賢木を根掘にこじて、上枝に八尺の勾聽の五百津の御統の玉を取り著け。中枝に八咫鏡を繋げ、下枝に白和幣青和幣を取り垂て、この種種の物は、布刀玉命太御幣と取り持たして、天、兒屋命太祝詞言齋ぎ白して、天、手刀男、神戸の掖に隠り立たして、天、宇受賣命、天、香山の天之日影を手次に繋けて、天之眞拆を疊として、天、香山の小竹葉を手草に結びて、天之石屋戸に覆禰伏せて踏みとどろこし、神懸りして、管乳を掛き出で、裳緒を陰に押し垂れき。かれ高天原動りて八百萬の神共に咲ひき。

ここに天照大御神怪しとおもほして、天、石屋戸を細に開きて、内より告りたまへるは、吾が隠りますに因りて、天、原自ら闇く、葦原、中、國も皆闇けむと思ふを、何どて天、宇受賣は樂し、又八百萬の神諸咲ふそとのり給ひき。即ち天、宇受賣、汝が命に勝りて貴き神在すが故に、あらき樂ふと白しき。かく言す間に、天、兒屋命布刀玉命かの鏡を指し出でて、天照大御神に見せまつる時に、天照大御神逾奇しと思はして、稍戸より出でて臨みます時に、かの隠り立てる天、手刀男、神その御手を取りて引き出だしまつりき。即ち布刀玉命尻久米繩をその御後方に控き度して、ここ

より内にな還り入りましそとまをしき。かれ天照大御神出でませる時に、高天原も葦原中國も自ら照り明りき。ここに八百萬の神共に議りて、速須佐之男命に千座置戸を負ふせ、また鬘を切り、手足の爪をも抜かしめて、神逐ひ逐ひき。

古

又食物を大氣津比賣神に乞ひたまひき。ここに大氣都比賣、鼻口また尻より、種種の味物を取り出でて、種種作り具へて進る時に、速須佐之男命、その態を立ち伺ひて、穢汚きもの奉るとおもほして、乃ちその大宜津比賣神を殺したまひき。かれ殺さえたまへる神の身に生れる物は、頭に蠶生り、二つの目に稻種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麥生り、尻に大豆生りき。かれここに神産巢日御祖命、これを取らしめて、種と成したまひき。

記

かれ避道えて、出雲國の肥河上なる鳥髪地に降りましき。この時しも、箸その河より流れ下りき。ここに須佐之男命、その河上に人ありけりとおもほして、求ぎ上り往でまししかば、老夫と老女と二人在りて、童女を中に置きて泣くなり。汝たちは誰ぞと問ひたまへば、その老夫は國神大山津見神の子なり。僕が名は足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田比賣とまをす。また汝の哭、故は何ぞと問ひたまへば、我が女はもとより八稚女ありき。ここに高志の八俣大蛇なも、年毎に来て喫ふなる。今それ來ぬべき時なるが故に泣くとまをす。その形は如何さまにかと問ひたまへば、それが目は酸醬なして、身一つに頭八つ尾八つあり、またその身に蘿また檜櫛生ひ、その長谿八谷峽八尾を度りて、その腹を見れば、悉に常血爛れたりとまをす。かれ速須佐之男命その老夫に、これ汝の女ならば、吾に尋らむやと詔りたまふに、恐れれど御名を知らず

とまをせば、吾は天照大御神の兄なり。かれ今天より降りましつと答へたまひき。ここに足名椎手名椎神、然まさば恐し、奉らむとまをしき。

上

かれ速須佐之男命、乃ちその童女を湯津爪櫛に取り成して、御誓に刺さして、その足名椎、手名椎神に告りたまはく、汝等八鹽折の酒を醸み、また垣を作り廻し、その垣に入つの門を作り、門毎に入つの假腹を結び、その假腹毎に酒船を置きて、船毎にその八鹽折の酒を盛りて待ちてよとのりたまひき。かれ告りたまへるままにして、かく設け備へて待つ時に、かの八俣大蛇信に言ひしがごと來つ。乃ち船毎に己頭を垂れて、その酒を飲みき。ここに飲み酔ひて留り伏し寝たり。すなはち速須佐之男命、その御佩かせる十拳劔を抜きて、その蛇を切り散りたまひしかば、肥河血に變りて流れき。かれその中の尾を切りたまふ時、御刀の刃抜けき。怪しと思ほして、御刀の前もちて刺し刺きて見そなはししかば、つむがりの大刀あり。かれこの大刀を取らして、異

き物ぞと思ほして、天照大御神に白し上げたまひき。こは草薙大刀なり。かれ是を以てその速須佐之男命、宮造るべき地を出雲國に求きたまひき。ここに須賀の地に到りまして詔りたまはく、吾此地に來まして、我が御心清淨しと詔りたまひて、其地になも宮作りてまし／＼ける。かれ其地をば今に須賀とぞいふ。この大神初め須賀宮作らしし時に、其地より雲立ち騰りき。かれ御歌よみしたまふ。その歌は、

八雲起つ、出雲八重垣、夫妻隱みに、八重垣作る、  
その八重垣を。

ここにかの足名稚神を喚して、汝は我が宮の首たれと告りたまひ、また名を稻田宮主須賀之八耳神と負ふせたまひき。

かれその櫛名田比賣をもて、隱處に起して、生みませる神の名を、八島士奴美神といふ。また大山津見神の女名は神大市比賣に娶ひて、子大年神、次に宇迦之御魂神を生みましき(二柱)。

兄八島士奴美神、大山津見神の女、名は木花知流比賣に娶ひて生みませる子、布波能母遲久奴須奴神。この神遊迦美神の女、名は日河比賣に娶ひて生みませる子、深淵之水夜禮花神。この

神天之都度間知泥神に娶ひて生みませる子、淤美豆奴神。この神布怒豆怒神の女、名は布帝耳神に娶ひて生みませる子、天之冬衣神、この神刺國大神の女、名は刺國若比賣に娶ひて生み

ませる子、大國主神。またの名は大穴牟遲神とまをす、またの名は葦原色許男神とまをす、またの名は八千矛神とまをす、またの名は宇都志國玉神とまをす。并せて名五つあり。

かれこの大國主神の兄弟八十神ましき。然れども皆國は大國主神に避りまつりき。避りまつりし所以は、その八十神各、稻羽之八上比賣を婚はむの心ありて共に稻羽に行きける時に、大穴牟

遲神に借を負はせ、從者として率て往きき。ここに氣多之前に到りける時に、裸なる菟伏せり。八十神その菟に謂ひけらく、汝爲むは、この海鹽を浴み、風の吹くに當りて、高山の尾上に伏し

てよといふ。かれその菟八十神の教ふるままにして伏しき。ここにその鹽の乾くまに、その身の皮悉に風に吹き拆かえしからに、痛みて泣き伏せれば、最後に來ませる大穴牟遲神、その

菟を見て、何ぞも汝泣き伏せるととひたまふに、菟言さく、僕遊岐島にありて、この地に度ら

まくほりつれども、度らむ因なかりし故に、海の鰐を欺きて言ひけらく、吾汝と族の多き少きを競べてむ。かれ汝は、その族の在りの悉率て來て、この島より氣多前まで、皆列み伏し度れ。

吾その上を踏みて走りつつ讀み度らむ。ここに吾が族と孰多きといふことを知らむ。かく言ひしかば、欺かえて列み伏せりし時に、吾その上を踏みて讀み度り來て、今地に下りむとする時に、

吾汝は我に欺かえつと言ひ竟れば、即ち最端に伏せる鰐我を捕へて、悉に我が衣服を剝ぎき。これに因りて泣き思ひしかば、先だちて行でまし八十神の命もちて、海鹽を浴みて、風に當り伏せれと誨へたまひき。かれ教のごとせしかば、我身悉に傷えつとまをす。ここに大穴牟遲神、

その菟に教へたまはく、今急くこの水門に往きて、水もて汝が身を洗ひて、即ちその水門の蒲黃を取りて、敷き散して、その上に頼い轉びてば、汝が身本の膚のごと、必ず差えなむものぞと教へたまひき。かれ教のごとせしかば、その身本の如くになりき。これ稻羽之素菟といふものなり。今に菟神となもいふ。かれその菟大穴牟遲神に白さく、この八十神は必ず八上比賣を得た

まはじ。借を負ひたまへども、汝が命ぞ獲たまひなむとまをしき。ここに八上比賣八十神に答へけらく、吾は汝たちの言は聞かじ、大穴牟遲神に嫁はなといふ。かれここに八十神怒りて、大穴牟遲神を殺さむとあひ謀りて、伯伎國の山本に至りていひけるは、この山に赤猪あるなり、かれ我ども追ひ下りなば、汝待ち取れ。若待ち取らずば、必ず汝を殺さむといひて、猪に似たる大石を火もて焼きて、轉し落しき。かれ追ひ下り、取る時に、その石に焼き著かえて死せたまひき。ここにその御祖命哭き思ひて、天にまる上りて、神降集日

之命に請したまふ時に、乃ち蜺貝比賣と蛤貝比賣とを遣せて、作り活さしめたまふ。かれ蜺貝比賣きさげ焦して、蛤貝比賣水を持ちて、母の乳汁と塗りしかば、麗しき壯夫になりて出であるきき。

ここに八十神見てまた欺きて、山に率て入りて、大樹を切り伏せ、矢を茹め、その木に打ち立て、その中に入らしめて、即ちその冰目矢を打ち離ちて拷殺しき。かれまたその御祖命哭きつつ求げば、見得て、即ちその木を拆きて、取り出で活して、その子に告りたまはく、汝ここにあらば、遂に八十神に滅さえなむとのりたまひて、乃ち木國の大屋毘古神の御所に速し遣りたまひき。

御祖命子に告りたまはく、須佐能男命のまします根國にまゐりてよ、必ずその大神識り

たまひなむとのりたまふ。かれ詔命のまゝに須佐之男命の御所にまゐりしかば、その女須勢理毘賣出で見て、目合して婚ひまして、還り入りてその父に、いと麗しき神まゐ來ましつとまをしまひき。かれその大神出で見て、こは葦原色許男と謂ふ神ぞとのりたまひて、やがて喚び入れて、その蛇の室に寝しめたまひき。ここにその妻須勢理毘賣命、蛇のひれをその夫に授けてのりたまはく、その蛇昨はむとせば、このひれを三たび擧りて打ち撥ひたまへとのりたまふ。かれ教のごしたまひしかば、蛇自ら靜りし故に、平く寝て出でたまひき。また來る日の夜は、吳公と蜂との室に入れたまひしを、吳公蜂のひれを授けて、先のごと教へたまひし故に、平く出でたまひき。また鳴鶴を大野の中に射入れて、その矢を探らしめたまふ。かれその野に入ります時

に、即ち火もてその野を燒き廻らしつ。ここに出でむ所を知らざる間に、風來ていひけるは内はほらほら、外はすぶすぶ。かく言ふ故に、其處を踏みしかば、落ち入り隠りし間に、火は燒け過ぎぬ。ここにその鼠かの鳴鶴を咋ひ持ち出で來て奉りき。その矢の羽はその鼠の子ども皆喫ひたりき。ここにその妻須世理毘賣は、喪具を持ちて哭きつつ來まし、その父の大神は、已に死せぬと思はして、その野に出でたせば、すなはちかの矢を持ちて奉る時に、家に率て入りて、八田間の大室に喚び入れて、その頭の虱を取らせたまひき。かれその頭を見れば、吳公多かり、ここにその妻標の木實と赤土とをその夫に授けたまへば、その木實を咋ひ破り、赤土を含みて唾出だしたまへば、その大神吳公を咋ひ破りて唾出だすとおもほして、心に愛しく思ほして寝ましき。ここにその大神の髪を掘りて、その室の椽毎に結び著けて、五百引石をその室の戸に取り塞へて、その妻須世理毘賣を負ひて、その大神の生大刀生弓矢またその天沼琴を取り持たして、逃げ出でます時に、その天沼琴樹に拂れて地動鳴きき。かれその寢ませる大神聞き驚かして、その室を引き出したまひき。然れども椽に結へる髪を解かする間に、遠く逃げたまひき。かれここに黄泉比良坂まで追ひいでまして、遙に望けて、大穴牟遲神を呼びひてのりたまはく、その汝が持たる生大刀生弓矢をもちて、汝が庶兄弟をば、坂の御尾に追ひ伏せ、河の瀬に追ひ撥ひて、おれ大國主神となり、また宇都志國玉神となりて、その我が女須世理毘賣を嫡妻として、宇迦能山の山本に、底津石根に宮柱太しり、高天原に冰椽高しりて居れ、是奴よとのりたまひき。かれその大刀弓を持ちて、かの八十神を追ひ避くる時に、坂の御尾毎に追ひ伏せ、河の瀬毎に追ひ撥ひて、國作り

始めたまひき。

かれその八上比賣は先の期のごとみとあたはしつ。かれその八上比賣は、率て來ましつれども、かの嫡妻須世理毘賣を畏みて、その生みませる子をば、木の俣に刺し挟みて返りましき。かれその子の名を木俣神とまをす、またの名は御井神ともまをす。この八千矛神、高志國の沼河比賣を婚ひに幸でましし時、その沼河比賣の家に到りて歌ひたまはく、

□ □ □

八千矛の、神の命は、八鳥國、妻求ぎかねて、遠  
遠し、高志の國に、賢女を、有りと聞かして、醜  
女を、有りと聞こして、さ婚ひに、在り立たし、  
婚ひに、在り逆はせ、大刀が緒も、未だ解かずて、  
おすひをも、未だ解かねば、處女の、鳴すや板戸  
を、押そふらひ、吾立たせれば、引こづらひ、吾  
立たせれば、青山に、鸚は鳴き、眞野鳥、雉は響  
む、庭鳥、雞は鳴く、慨たくも、鳴くなる鳥か、  
この鳥も、打ち病めこせね、いしたふや、天馳使、  
事の、語り言も、こをば。

ここにその沼河日賣未だ戸を開かずて、内より歌ひたまはく、

□

八千矛の、神の命、ぬえくさの、女にしあれば、  
吾が心、浦渚の鳥ぞ、今こそは、千鳥にあらめ、一  
後は、平和にあらむを、命は、な死せたまひそ、一  
いしたふや、天馳使、事の、語り言も、こを  
ば、  
青山に日が隠らば、野羽玉の、夜は出でなむ、朝  
日の、咲み榮え來て、椋綱の、白き腕、沫雪の、  
弱る胸を、そ叩き、叩きまなかり、眞玉手、玉手  
差し纏ぎ、股長に、寐は宿さむを、あやに、な戀  
ひきこし、八千矛の、神の命、事の、語り言も、  
こをば。

かれその夜は合はさずて、明日の夜御合したまひき。  
又その神の嫡后須勢理毘賣命、甚く嫉り妬みしたまひき。かれその日子遲神作ひて、出雲より  
倭國に上りまさむとして、裝束し立たす時に、片御手は御馬の鞍に繫け、片御足はその御鏡に  
踏み入れて、歌ひたまはく、  
野羽玉の、黒き御衣を、眞具に、取り裝ひ、奥鳥、  
胸見る時、鱗揚ぎも、これは宜はず、邊浪、磯に

脱ぎ棄て、鷓鴣の、青き御衣を、眞具に、取り装ひ、奥鳥、胸見る時、鱧揚ぎも、こも宜はず、浪磯に脱ぎ棄て、山縣に、求ぎし、茜有き、染木が汁に、染衣を、眞具に、取り装ひ、奥鳥、胸見る時、鱧揚ぎも、此し宜し、いとこやの、妹、命、群鳥の、吾が群れ往なば、引け鳥の、吾が引け往なば、泣かじとは、汝は言ふとも、山處の、一本薄、項傾し、汝が泣かさまく、朝雨の、狭霧に、起たむぞ、若草の、妻の命、事の、語り言も、こをば。

ここにその后大御酒杯を取らして、立ち依り指擧げて、歌ひたまはく、八千矛の、神の命や、吾が大國主、汝こそは、男にいませば、打ち見る、鳥の崎崎、掻き見る、磯の崎落ちず、若草の、妻持たせらめ、吾はもよ、女にしあれば、汝除きて、夫は無し、汝除きて、夫は無し、文垣の、ふはやが下に、蒸被、柔が下に、檜被、さやぐが下に、沫雪の、蕨る胸を、檜

綱の、白き腕、そ叩き、叩きまながり、眞玉手、玉手差し纏き、股長に、寐をしなせ、豊御酒、獻らせ。

かく歌ひて、即ち蕪結ひして、項懸けりて、今に至るまで鎮ります。これを神語と謂ふ。かれこの大國主神、曾形、奥津宮にます神、多紀理毘賣命に娶ひて生みませる子、阿遲鉏高日子根神。次に妹高比賣命。またの名は下光比賣命。この阿遲鉏高日子根神は、今迦毛、大御神とまをす神なり。

大國主神また神屋楯比賣命に娶ひて生みませる子、事代主神。また八島牟遲能神の女鳥耳神に娶ひて生みませる子、鳥鳴海神。この神日名照額田毘道男伊許知邇神に娶ひて生みませる子、國忍富神。この神葦那陀迦神またの名は八河江比賣に娶ひて生みませる子、速穗之多氣佐波夜遲奴美神。この神天之懸主神の女前玉比賣に娶ひて生みませる子、甕主日子神。この神滲加美神の女比那良志毘賣に娶ひて生みませる子、多比理岐志麻流美神。この神比比羅木之其花麻豆美神の女活玉前玉比賣神に娶ひて生みませる子、美呂浪神。この神敷山主神の女青沼馬沼押比賣に娶ひて生みませる子、布忍富鳥鳴海神。この神若畫女神に娶ひて生みませる子、天日腹大科度美神。この神天狹霧神の女遠津待根神に娶ひて生みませる子、遠津山岬多良斯神。

右の件、八島士奴美神より下、遠津山岬帶神まで十七世神といふ。



かれ大國主、神出雲の御大之御前にます時に、波の穂より、天之羅摩、船に乗りて、蛾の皮を内剝に剥ぎて衣服にして、歸り來る神あり。かれその名を問はずれども、答へず、また所從の神たちに問はずれども、皆知らずとまをしき。ここに多邇具久白さく、こは久延毘古ぞ必ず知りたむとまをせば、即ち久延毘古を召して問はず時に、こは神産巢日、神の御子少名毘古那と白しき。かれここに神産巢日御祖、命に白し上げしかば、こは實に我が子なり。子の中に、我が手候より漏きし子なり。かれ汝葦原色許男、命と兄弟となりて、その國作り堅めよとのりたまひき。かれそれより、大穴牟遲と少名毘古那と二柱の神相並はして、この國作り堅めたまひき。さて後には、その少名毘古那、神は、常世、國に度りましき。かれその少名毘古那、神を顯し白せりし、所謂久延毘古は、今に山田之曾富騰といふものなり。この神は、足は行かねども、天下の事を盡に知れる神になもありける。

古

ここに大國主、神愁ひまして、吾獨りして如何でかも、この國を得作らむ。孰の神ともた、吾はこの國を相作らましとのたまひき。この時に海を光して依り來る神あり。その神の言りたまはく、我が前を能く治めてば、吾とどもに相作り成してむ。若然あらずば、國成り難てましとのりたまひき。かれ大國主、神まをしたまはく、然らば治めまつらむ狀は奈何にぞとまをしたまへば、吾をばも、倭の青垣東の山の上に齋きまつれとのりたまひき。こは御諸、山上にます神なり。かれその子、神、神活須毘、神の女伊怒比賣に娶ひて生みませる子、大國御魂、神。次に韓神、次に曾富理、神。次に向日、神。次に聖神、「五神」。又亦用比賣に娶ひて生みませる子、大香山戸

古

古

臣、神。次に御年、神、「二柱」。又天知迦流美豆比賣に娶ひて生みませる子、奥津日子、神。次に奥津比賣、命、またの名は大戸比賣、神。こは諸人のもち拜く籠、神なり。次に大山咋、神、またの名は山末之天主、神。この神は近淡海、國の日枝山にます、また葛野の松尾にます。鳴鶴になりませる神なり。次に庭津日、神。次に阿須波、神。次に波比岐、神。次に香山戸臣、神。次に羽山戸、神。次に庭高津日、神。次に大土、神、またの名は土之御祖、神、「九神」。

上

上の件、大年、神の子、大國魂、神より下、大土、神まで、并せて十六神。羽山戸、神、大氣都比賣、神に娶ひて生みませる子、若山咋、神。次に若年、神。次に妹若沙比賣、神。次に彌豆麻岐、神。次に夏高津日、神、またの名は夏之賣、神。次に秋比賣、神。次に久久年、神。次に久久紀若室葛根、神。

上

上の件、羽山戸、神の子、若山咋、神より下、若室葛根、神まで、并せて八神。天照大御神の命もちて、豐葦原之千秋、長五百秋之水穗、國は、我が御子正勝吾勝勝速日天、忍穂耳、命の知らさむ國と、ことよさし賜ひて、天降したまひき。ここに天、忍穂耳、命、天、浮橋に立たして詔りたまはく、豐葦原之千秋、長五百秋之水穗、國は、甚くさやぎて有りけりと告りたまひて、更に還り上らして、天照大御神にまをしたまひき。かれ高御産巢日、神、天照大御神の命もちて、天、安、河の河原に、八百萬の神を神集に集へて、思金、神に思はしめて詔りたまはく、この葦原、中、國は、我が御子の知らさむ國と、ことよさし賜へる國なり。かれこの國に追速振荒振國、神どもの多なると思ほすは、何れの神を使はしてか言趣けましとのりたまひき。ここに思金、神ま

た八百萬の神等議りて、天、菩比神、これ遣はしてむとまをしき。かれ天、菩比神を遣はしつれば、やがて大國主神に媚ひ附きて、三年になるまで復奏まをさざりき。是を以て高御産巢日神、天照大御神、また諸の神たちに問ひたまはく、葦原中國に遣はせる天、菩比神、久しく復奏まをささず、また何れの神を使はしては吉けむ。ここに思金神白しけらく、天津國玉神の子天若日子を遣はしてむとまをしき。かれここに天之麻迦古弓天之波波矢を天若日子に賜ひて遣はしき。ここに天若日子かの國に降り到きて、即ち大國主神の女下照比賣を妻とし、またその國を獲むと慮りて、八年になるまで復奏まをさざりき。

古

かれここに天照大御神高御産巢日神、また諸の神たちに問ひたまはく、天若日子久しく復奏まをささず、又曷の神を遣はしてか、天若日子が久しく留まる故を問はしめむと問ひたまひき。ここに諸の神たちまた思金神白さく、雉名鳴女を遣はしてむとまをす時に、詔りたまはく、汝行き

事

て天若日子に問はむ状は、汝を葦原中國に遣はせる所以は、その國の荒振る神どもを言趣け平せとなり。何ぞ八年になるまで、復奏まをさざると問へとのりたまひき。

記

かれここに名鳴女天より降り到きて、天若日子が門なる湯津楓の上に居て、委曲に天の神の詔命のごとのりき。ここに天、佐具賣この鳥の言ふことを聞きて、天若日子に、この鳥は鳴く音甚悪し、かれ射殺したまひねといひ進むれば、即ち天若日子天の神の賜へる天之波士弓天之加久矢をもちて、この雉を射殺しつ。ここにその矢雉の胸より通りて逆に、射上げられて、天安河の河原にまします天照大御神高木神の御所に逮りき。この高木神は高御産巢日神の別名なり。かれ高

木神その矢を取らして見そなはずれば、その矢の羽に血著きたりき。ここに高木神、この矢は天若日子に賜へりし矢ぞかしと告りたまひて、諸の神たちに示せて詔りたまへらくは、或天若日子命を誤へず、惡神を射たりし矢の來つるならば、天若日子に中らざれ、或邪き心しあらば、天若日子この矢にまがれとのりたまひて、その矢を取らして、その矢の穴より衝き返へしたまひしかば、天若日子が、胡床に寝たる高胸坂に中りて死にき。「これ還矢恐るべしといふ本なり」。またかの雉還へらず、かれ今に諺に雉の頼使といふ本是なり。

上

かれ天若日子が妻下照比賣の哭せる聲、風のむだ響きて天に到りき。ここに天なる天若日子が父天津國玉神、またその妻子ども聞きて、降り來て哭き悲みて、乃ち其處に喪屋を作りて、河鴈を岐佐理持とし、鷺を掃持とし、翠鳥を御食人とし、雀を確女とし、雉を哭女とし、かく行ひ定めて、日八日夜八夜を遊びたりき。

中

この時阿遲志貴高日子根神到まして、天若日子が喪を弔ひたまふ時に、天より降りきつる天若日子が父、またその妻皆哭きて、我が子は死なずて有りけり、我が君は死なずてましけりといひて、手足に取り懸りて、哭き悲みき。その過てる故は、この二柱の神の容姿いと能く似たり。かれ是を以て過てるなりけり。ここに阿遲志貴高日子根神大く怒りていひけらく、我は愛しき友なれこそ弔ひ來つれ。何とも吾を穢き死人に比ふるといひて、御佩かせる十掬劍を抜きて、その喪屋を切り伏せ、足もて躡る離ち遣りき。こは美濃國の藍見河の河上なる喪山といふ山なり。その持ちて切れる大刀の名は大量と謂ふ。またの名は神度劍とも謂ふ。かれ阿治志貴高日

34 子根神は、恐りて飛び去りたまふ時に、その同母妹高比賣命、その御名を顯さむと思ひて歌ひ  
けらく、

天なるや、弟榊機の、嬰せる、玉の御統、御統に、一  
穴玉はや、眞谷、二互らす、阿遲志貴、高日子根  
の、神ぞや。

この歌は夷振なり。

古 ここに天照大御神の詔りたまはく、また曷の神を遣はしては吉けむ。かれ思金神また諸の神た  
ち白しけらく、天安河の河上の天石屋にます、名は伊都之尾羽張神、これ遣はすべし。若し  
またこの神ならずば、その神の子建御雷之男神、これ遣はすべし。まづその天尾羽張神は、天  
安河の水を逆に塞ぎあげて、道を塞ぎ居れば、他神は得行かじ。かれ別に天迦久神を遣はし  
て問ふべしとまをしき。

記 かれここに天迦久神を使はして、天尾羽張神に問ふ時に、恐し、仕へまつらん。然れどもこ  
の道には、僕が子建御雷神を遣はすべしとまをして、乃ち貢進りき。かれ天鳥船神を建御雷  
神に副へて遣はしき。

是を以てこの二神、出雲國の伊那佐之小濱に降りつきて、十掬劍を抜きて、浪の穂に逆に刺  
し立てて、その劍の前に踏み坐て、その大國主神に問ひたまはく、天照大御神高木神の命もち  
て問ひに使はせり。汝が主はける葦原中國は、我が御子の知らさむ國と言よさしたまへり。か

れ汝が心奈何にぞと問ひたまふときに、答へまつらく、僕は得白さじ、我が子八重言代主神こ  
れ白すべきを。鳥の遊漁しに、御大之前に往きて、未だ還り來すとまをしき。故ここに天鳥船  
神を遣はして、八重事代主神を徵し來て、問ひたまふ時に、その父の大神に、恐し、この國は  
天神の子に獻りたまへといひて、即ちその船を踏み傾けて、天逆手を青柴垣に打ち成して、隠  
りましき。

上 かれここにその大國主神に問ひたまはく、今汝が子事代主神かく白しぬ。また白す可き子あり  
やととひたまひき。ここにまた白しつらく、また我が子建御名方神あり。これを除きては無し。  
かく白したまふをりしも、その建御名方神、千引石を手末に擧げて來て、誰ぞ、我が國に來て、  
忍び忍びかく物言ふ。然らば力競べせむ。かれ我先づその御手を取らむといふ。かれその御手を  
取らしむれば、即ち立冰に取り成し、また劍刃に取り成しつ、かれ懼れて退き居り。ここにその  
建御名方神の手を取らむと乞ひ歸へして取れば、若葦を取るがごと、搦み拵ぎて、投げ離れた  
まへば、即ち逃げ去にき。かれ追ひ往きて、科野國の洲羽海に迫め到りて、殺さむとしたまふ  
時に、建御名方神白しつらく、恐し、我をな殺したまひそ。この地を除きては、他處に行かじ。  
また我が父大國主神の命に違はじ。八重事代主神の言に違はじ。この葦原中國は、天神の  
御子の命のまに、獻らむとまをしたまひき。

35 かれ更にまた還り來て、その大國主神に問ひたまはく、汝が子ども事代主神建御名方神二神  
は、天神の御子の命のまに、獻らむと白しぬ。かれ汝が心奈何にぞと問ひたまひき。ここに

答へまつらく、僕が子ども二神の白せるまに、僕も違はじ。この葦原、中、國は命のまに、既に獻らむ。唯僕が住所をば、天の神の御子の天津日繼知ろしめさむ。富足る天の御巢なして、底津石根に宮柱太しり、高天原に冰木高しりて治めたまはば、僕は百足らず八十桐手に降りて侍ひなむ。又僕が子ども百八十神は、八重事代主、神の御尾前となりて仕へまつらば、運ぶ神はあらじ。かく白して、乃ち隠りましき。かれ白したまひしまに、出雲、國の多藝志之小濱に、天之御舍を造りて、水戸、神の孫、櫛八玉、神を膳夫として、天、御饗獻る時に、禱ぎ白して、櫛八玉、神鶴に化りて、海の底に入りて、底の埴を咋ひ出でて、天、八十平瓮を作りて、海布の柄を織りて、燧白を作り、海尊の柄を燧杵に作りて、火を鑽り出でてまをしけらく、この我が燧れる火は、高天原には、神産巢日御祖、命の富足る天の新巢の凝烟の八拳垂るまで、焼き擧げ、地の下は、底津石根に焼き焚して、椶繩の千尋繩打ち延へ、釣らせる海人が大口の尾翼、さわくくに控きよせ騰げて、拆竹のとををををに、天之眞魚、咋獻らむとまをしき。かれ建御雷、神返りまる上りて、葦原、中、國言向け平しぬる状をまをしたまひき。

ここに天照大御神、高木、神の命もちて、太子正勝、吾勝速日天、忍穗耳、命に詔りたまはく、今葦原、中、國平け訖へぬと白す。かれことよさし賜へりしまに、降りまして知ろしめせとのりたまひき。ここにその太子正勝、吾勝速日天、忍穗耳、命の白したまはく、僕は降りなむ裝束せし間に、子生れました。名は天邊岐志、國邊岐志、天津日高日子番能、速速命、この子を降すべしとまをしたまひき。この御子は、高木、神の女、萬羅、豐秋津師比賣、命に娶ひまして生みませる子、天、

火明命、次に日子番能、速速命、二柱にます。是を以て白したまふまに、日子番能、速速命に詔科せて、この豐葦原、水穗、國は、汝知らさむ國なりとことよさしたまふ。かれ命のまに、天降ります可しとのりたまひき。

上

かれ日子番能、速速命、天降りまさむとする時に、天の八衢に居て、上は高天原を光らし、下は葦原、中、國を光らす神ここに有り。かれここに天照大御神、高木、神の命もちて、天、宇受賣、神に詔りたまはく、汝は手弱女人なれども、射向ふ神と面勝つ神なり。かれ専ら汝往きて問はむは、吾が御子の天降りまさむとする道を、誰ぞかくて居ると問へとのりたまひき。かれ問はせ賜ふ時に、答へ白さく、僕は國の神、名は狹田毘古、神なり。出で居る所以は、天の神の御子天降りますと聞きつる故に、御前に仕へまつらむとして、まる向ひ侍ふとまをしたまひき。

卷

ここに天、兒屋、命、布刀玉、命、天、宇受賣、命、伊斯許理度賣、命、玉祖、命、并せて五伴、緒を支り加へて、天降りまさしめたまひき。

ここにかの招禱し八尺の勾璣、鏡、また草薙、劔、また常世、思金、神、手力男、神、天、石門別、神を副へ賜ひて詔りたまひつらく、これの鏡は、専ら我が御魂として、吾が御前を拜くがごと、齋きまつれ。次に思金、神は、前、事を取り持ちて、まをしたまへとのりたまひき。

この二柱の神は、拆劍五十鈴、宮に拜き祭る。次に登由、宇氣、神。こは外宮の度相にます神なり。次に天、石戸別、神、またの名は櫛石窓、神とまをし、またの名は豐石窓、神ともまをす。この神は御門の神なり。次に手力男、神は、佐那縣にませり。

かれその天ノ兒屋命は〔中臣連等が祖〕。布刀玉命は〔忌部首等が祖〕。天ノ宇受賣命は〔猿女君等が祖〕。伊斯許理度賣命は〔鏡作連等が祖〕。玉祖命は〔玉祖連等が祖なり〕。かれここに天津日子番能邇邇藝命、天之石位を離れ、天之八重多那雲を押し分けて、稜威の道別き道別きて、天ノ浮橋に、浮きしまり、そりたたして、竺紫の日向の高千穂の靈異ふる峰に天降りましき。

かれここに天ノ忍日命天津久米命二人、天之石鞍を取り負ひ、頭椎の大刀を取り佩き、天之波士弓を取り持ち、天之眞鹿兒矢を手挟み、御前に立たして仕へまつりき。かれその天ノ忍日命、〔こは大伴連等が祖〕。天津久米命、〔こは久米直等が祖なり〕。

ここに齋肉、韓國を笠沙之前に求ぎ通りて詔りたまはく、此地は朝日の直刺す國、夕日の日照る國なり、かれ此地ぞ甚と吉き地と詔りたまひて、底津石根に宮柱太しり、高天原に冰楲高しりてまし／＼き。

かれここに天ノ宇受賣命に詔りたまはく、この御前に立ちて仕へまつれりし、猿田毘古大神をば、専ら顯し申せる汝送りまつれ、またその神の御名は、汝負ひて仕へまつれとのりたまひき。是を以て猿女君等、その猿田毘古の男神の名を負ひて、女を猿女君と呼ぶ事是なり。

かれその猿田毘古神、阿邪訶に坐しける時に、漁して、比良夫貝にその手を咋ひ合はさえて海水に溺れたまひき。かれその底に沈み居たまふ時の名を、底度久御魂とまをし、その海水のつぶたつ時の名を、都夫多都御魂とまをし、その沫吹く時の名を、阿和佐久御魂とまをし。

ここに猿田毘古神を送りて、還り到りて、乃ち悉に鱈、廣物鱈、狹物を追ひ聚めて、汝は天ノ神の御子に仕へまつらむやと問ふ時に、諸の魚ども皆仕へまつらむとまをす中に、鼠海白さず、かれ天ノ宇受賣命、海鼠に謂ひけらく、この口や答へせぬ口といひて、紐小刀以ちてその口を拆さき。かれ今に海鼠の口拆けたり。是を以て、御世、島の速賣獻る時に、猿女君等に給ふなり。

ここに天津日高日子番能邇邇藝命、竺沙御前に顔麗き美人の遇へるに、誰が女ぞと問ひたまひき。答へまをしたまはく、大山津見神の女、名は神阿多都比賣、またの名は木花之佐久夜毘賣とまをしたまひき。又汝が兄弟ありやと問ひたまへば、我が姉石長比賣ありと白したまひき。

かれ詔りたまはく、吾汝に目合せむと思ふは奈何とのりたまへば、僕は得白さじ、僕が父大山津見神ぞ白さむとまをしたまひき。かれその父大山津見神に乞ひに遣はしける時に、大く歡喜ひて、その姉石長比賣を副へて、百取の机代の物を持たしめてたてま出しき。かれここにその姉は、甚と醜きに因りて、見畏みて、返し送りたまひて、唯その弟木花之佐久夜毘賣のみ留めて、一宿婚しつ。ここに大山津見神、石長比賣を返したまへるに因りて、大く恥ぢて、白し送りた

まひける言は、我が女二人並べてたてまつれる故は、石長比賣を使はしては、天ノ神の御子の命は、一雨降り風吹けども、恒なる石の如く、常磐に堅磐にまします。また木之花之佐久夜毘賣を使はしては、木花の榮ゆるがごと榮えませと、誓ひて貢進りき。かかるに今石長比賣を返して、木花之佐久夜毘賣獨り留めたまひつれば、天ノ神の御子の御壽は、木花の移落ましなむとすとまをしたまひき。かれ是を以て今に至るまで、天皇たちの御命長くはまさざるなり。

41  
かれ後に木之花之佐久夜毘賣、まゐり出て白したまはく、妾は妊めるを。今子産むべき時になりぬ。是の天神の御子、私に産みまつるべきにあらず。かれ請すとまをしたまひき。ここに詔りたまはく、佐久夜毘賣、一宿にや妊める。そは我が子にあらず。必ず國神の子にこそあらめとのりたまへば、吾が妊める子、若し國神の子ならむには、産むこと幸からし。若し天神の御子にまさば、幸からむとまをして、即ち戸無き八尋殿を作りて、その殿内に入りまして、土もて塗り塞ぎて、産ます時にあたりて、其の殿に火を著けてなも産ましける。かれその火の眞盛りに燃ゆる時に、生れませる子の名は、火照命（こはてるみこと）。次は隼人阿多君の祖。次に生れませる子の名は火須勢理命（ひすせりみこと）。次に生れませる子の名は火遠理命（ひのほりみこと）。またの名は天津日高日子德穗出見命（あまつひたかひことくほいづみみこと）（三柱）。かれ火照命は、海佐知毘古として、鱈、廣物鱈、狭物を取りたまひ、火遠理命は山佐知毘古として、毛、麿物毛、柔物を取りたまひき。ここに火遠理命その兄火照命に、互に幸を易へて用ひてむと謂ひて、三度乞はししかども、許さざりき。然れども遂に纒に得易へたまひき。かれ火遠理命、海幸をもちて魚釣らすに、都て一つも得たまはず、またその釣をさへ海に失ひたまひき。ここにその兄火照命その釣を乞ひて、山幸も己が幸、幸。海幸も己が幸、幸。今は各幸返さむと謂ふ時に、その弟火遠理命のりたまはく、汝の釣は、魚釣りしに一つも得ずて、遂に海に失ひてきたのりたまへども、その兄強に乞ひ微りき。かれその弟、御佩の十拳劔を破りて、五百釣を作りて、償ひたまへども、取らず。また一千釣を作りて、償ひたまへども、受けずて、猶かの本の釣を得むとそいひける。

42  
ここにその弟、海邊に泣き思ひて居ます時に、鹽椎神來て問ひけらく、何にぞ虚空津日高の泣き思ひたまふ故はと問へば、答へたまはく、我兄と釣を易へて、その釣を失ひてき。かくてその釣を乞ふ故に、多の釣を償ひしかども、受けずて、猶その本の釣を得むといふなり。かれ泣き思ふとのりたまひき。ここに鹽椎神、我汝が命の爲に、善き議さむといひて、即ち无間勝間の小船を造りて、その船に載せまつりて、教へけらく、我この船押し流さば、やや暫往でませ。味し路あらむ。乃ちその道に乗りて往ましなば、魚鱗のごと造れる宮、それ綿津見神の宮なり。その神の御門に到りましなば、傍の井の上に湯津香木あらむ。かれその木の上にはまはさば、その海神の女、見て議らむものぞと教へまつりき。  
上  
かれ教へしまに、少し行でましけるに、備にその言の如くなりしかば、即ちその香木に登りてましくき。ここに海神の女豊玉毘賣の從婢、玉器を持ちて、水酌まむとする時に、井に光あり、仰ぎて見れば、麗しき壯夫あり、甚と奇しとおもひき。かれ火遠理命、その婢を見たまひて、水を得しめよと乞ひたまふ。婢乃ち水を酌みて、玉器に入れて貢進りき。ここに水をば飲みたまはずして、御頸の璽を解かして、口に含みて、その玉器に唾入れたまひき。ここにその璽に著きて、婢璽を得離たず、かれ璽著けながら、豊玉毘賣命に進りき。かれその璽を見て、婢に、若し門外に人有りやと問ひたまへば、我が井の上の香木の上に人います。甚と麗しき壯夫にます。我が王にも益りて甚と貴し。かれその人水を乞はせる故に、奉りしかば、水をば飲まざずて、この璽をなも唾入れたまへる。これ得離たぬ故に、入れながら將ちまゐり來て獻りぬとまを

しき。かれ豊玉毘賣命奇しと思はして、出で見て、乃ち見感でて、目合して、その父に、吾が門に麗しき人いますとまをたまひき。ここに海神自ら出で見て、この人は、天津日高の御子、虚空津日高にませりといひて、即ち内に率て入れまつりて、美智の皮の疊八重を敷き、また絶疊八重をその上に敷きて、その上に坐せまつりて、百取の机代の物を具へて、御装して、即ちその女豊玉毘賣を婚せまつりき。かれ三年といふまで、その國に住みたまひき。

ここに火遠理命、その初の事を思はして、大きな歎一つしたまひき。かれ豊玉毘賣命その歎を聞かして、その父に白したまはく、三年住みたまへども、恒は歎かすことも無かりしに、今夜大きな歎一つしたまひつるは、若し何の故あるにかとまをしたまへば、その父の大神、その聲の夫に問ひまつらく、今且我が女の語を聞けば、三年坐しませども、恒は歎かすことも無かりしに、今夜大きな歎したまひつとまをせり。若し故ありや。また此間に來ませる故は奈何にぞと問ひまつりき。かれその大神に、備にその兄の失せにし鉤を罰れる状を語りたまひき。

ここを以て海神、悉に鱈廣物鱈狭物を召ひ集めて、若しこの鉤を取れる魚ありやと問ひたまふ。かれ諸の魚ども白さく、このころ赤海鯉魚なも、喉に鱈ありて、物得食はずと愁ふなれば、必ず是れ取りつらむとまをしき。ここに赤海鯉魚の喉を探りしかば、鉤あり。即ち取り出でて清洗して、火遠理命に奉る時に、その綿津見大神諺へまつりけらく、この鉤をその兄に給はむ時に、のりたまはむ状は、この鉤は、湊須鉤。須須鉤。須須鉤。宇流鉤といひて、後手に賜へ。然してその兄高田を作らば、汝が命は下田を營りたまへ。その兄下田を作らば、汝が命は高田を營り

たまへ。然したまはば、吾水を掌れば、三年の間、必ずその兄貧しくなりなむ。若しそれ然したまふ事を恨みて、攻めなば、鹽盈珠を出して溺し、若しそれ愁ひまをさば、鹽乾珠を出して活しかくして、窹めたまへとまをして、鹽盈珠鹽乾珠并せて兩箇を授けまつりて、即ち悉に鰐どもをよび集めて、問ひたまはく、今天津日高の御子虚空津日高、上國に幸でまさむとす。誰は幾日に送りまつりて、覆奏まをさむと問ひたまひき。かれ各身の長のまに、目を限りて白す中に、一尋鰐、僕は一日に送りまつりて、還り來なむとまをす。かれその一尋鰐に、然らば汝送りまつりてよ。若し海中を渡る時に、な惶畏せまつりそとのりて、即ちその鰐の頸に載せまつりて、送り出しまつりき。かれいひしがごと、一日の内に送りまつりき。その鰐返りなむとせし時に、佩かせる紐小刀を解かして、その頸に著けてなも返したまひける。かれその一尋鰐をば、今に佐比持神とぞいふなる。

ここを以て備に海神の教へし言の如くして、かの鉤を與へたまひき。かれそれより後稍愈貧しくなりて、更に荒き心を起して迫め來。攻めなむとする時は、鹽盈珠を出して溺し、それ愁ひまをせば、鹽乾珠を出して救ひ、かくして窹めたまふ時に、稽首白さく、僕は今より以後、汝が命の晝夜の守護人となりてぞ仕へまつらむとまをしき。かれ今に至るまで、その溺れし時の種種の態、絶えず仕へまつるなり。

ここに海神の女豊玉毘賣命、自らまる出で白したまはく、妾はやくより妊めるを。今御子産むべき時になりぬ。こを念ふに、天神の御子を海原に生みまつる可きにあらず、かれまる出きつ

とまをしまひき。かれ即ちその海邊の波限に、鵜の羽を葺草にして、産殿を造りき。ここにその産殿、未だ葺き合へぬに、御腹忍へがたくなりたまひければ、産殿に入りましき。ここに御子産みまさむとする時に、その日子に白したまはく、凡て佗國人は、子産むをりになれば、本國の形になりても生むなる。かれ、妾も今本の身になりて産みなむとす。妾をな見たまひそとまをしまひき。ここにその言を奇しと思はして、そのまさかりに御子産みたまふを伺見たまへば八尋鰐になりて、匍匐ひもこよひき。かれ見驚き畏みて、遁げ退きたまひき。ここに豐玉毘賣命、その伺見たまひし事を知らして、うら恥しとおもほして、その御子を生み置きて、妾恒は海道を通して、通はむとこそ思ひしを。吾が形を伺見たまひしが、甚と作しきこととまをして、即ち海原を塞きて、返り入りましき。是を以てその産れませる御子の名を、天津日高日子波限建鷦鷯草葺不合命とまをす。

然れども後は、その伺見たまひし御心を恨みつつも、戀しきにあ忍へたまはずて、その御子を養しまつる縁に因りて、その弟玉依毘賣に附けて、歌をなも獻りたまひける。その歌、

赤玉は、緒さへ光れど、白玉の、君が儀し、貴く有りけり。

かれその日子答へたまひける歌、

奥つ鳥、鴨着く島に、我が率疑し、妹は忘れじ、世の盡に。

かれ日子穗穗出見命は高千穂宮に伍百捌拾歳ましくき。御陵はやがてその高千穂山の西の方にあり。

是の天津日高日子波限建鷦鷯草葺不合命、姨玉依毘賣命に娶ひまして、生みませる御子の名は、五瀬命。次に稻冰命。次に御毛沼命。次に若御毛沼命、またの名は豐御毛沼命、またの名は神倭伊波禮毘古命、四柱。かれ御毛沼命は、波の穂を眺みて、常世國に渡りまし、稻冰命は、此國として、海原に入りましき。



古事記中卷

中

神倭伊波禮毘古命、その同母兄五瀬命と二柱、高千穂宮にましくて譏りたまはく、何れの地にまさばか、天下の政をば平けく聞しめさむ、猶東のかたにこそ、行でまさめとのりたまひて、即ち日向より發して、筑紫に幸でましき。かれ豊國の宇沙に到りませる時に、その土人名は宇沙都比古宇沙都比賣二人、足一、隣宮を作りて、大御齋獻りき。其地より遷らして、筑紫の岡田宮に一年ましくき。またその國より上り幸でまして、阿岐國の多祁理宮に七年ましくき。またその國より遷り上り幸でまして、吉備の高島宮に八年ましくき。

卷

かれその國より上り幸でます時に、龜の甲に乗りて、釣しつち打ち羽振り來る人、速吸門に遇ひき。かれ喚ひよせて、汝は誰ぞと問はしければ、僕は國之神（名は宇豆毘古とまをしき）。また汝は海道を知れりやと問はしければ、能く知れりとまをしき。また從に仕へまつらむやと問はしければ、仕へまつらむとまをしき。かれすなはち橋を指し度して、その御船に引き入れて、橋根津日子といふ名を賜ひき。（こは倭國造等が祖なり。）

47

かれその國より上り行でます時に、浪速之渡を経て、青雲の白肩津に泊てたまひき。この時登美能那賀須泥毘古軍を興して、待ち向ひて戦ひしかば、御船に入れたる楯を取りて、下り立ちたま

ひき。かれその地の名を楯津とつけつるを、今に日下之藝津となもいふ。ここに登美毘古と戦ひたまふ時に、五瀬命御手に登美毘古が痛矢串を負はしき。かれここに詔りたまはく、吾は日神の御子として、日に向ひて戦ふことふさはず。かれ賤奴が痛手をなも負ひつる。今よりはも行き廻りて、日を背負ひてこそ撃ちてめと、期りたまひて、南の方より廻り幸でます時に、血沼海に到りて、その御手の血を洗ひたまひき。かれ血沼海とはいふなり。其地より廻り幸でまして、紀國の男之水門に到りまして、詔りたまはく、賤奴が手を負ひてや、命すぎなむと、男健して崩りましぬ。かれその水門を男水門とぞいふ。陵はやがて紀國の籠山にあり。

かれ神倭伊波禮毘古命、その地より廻り幸でまして、熊野村にいでませる時に、大きな熊、山より出でて、即ち失せぬ。ここに神倭伊波禮毘古命倏忽にをえまし、また御軍も皆をえて伏しき。この時に熊野の高倉下一横刀をもちて、天神の御子の伏せる地にまゐ來て獻る時に、天神の御子即ち寤めまして、長寝しつるかもと詔りたまひき。かれその横刀を受け取りたまふ時に、その熊野の山の荒ふる神自ら皆切り付ふさえて、かのをえ伏せる御軍悉に寤めたりき。かれ天神の御子その横刀を獲つるゆゑを問ひたまへば、高倉下答へまをさく、己夢に、天照大神高木神二柱の神の命もちて、建御雷神を召して詔りたまはく、葦原中國は、甚く騒ぎてありけり。我が御子たち不平みますらし。かの葦原中國は、専汝が言向けつる國なり。かれ汝建御雷神降りてよとのりたまひき。ここに答へまをさく、僕降らずとも、専かの國平けし横刀あれば、降してむ。「この刀の名は佐士布都神といふ、またの名は斐布都神といふ、またの名は布都御魂。この刀

は石上神宮に坐す。この刀を降さむ状は、高倉下が倉の頂を穿ちて、そこより墮し入れむとまをしたまひき。(かれ建御雷神教へたまはく、汝が倉の頂を穿ちて、この刀を墮し入れむ)。かれ朝目吉く汝取り持ちて、天神の御子に獻れと、教へたまひき。かれ夢の教のままに、且己が倉を見しかば、信に横刀ありき。かれこの横刀は獻るにこそとまをしき。

ここにまた高木大神の命もちて、覺し白したまはく、天神の御子、ここより奥つ方にな入りまして。荒ふる神いと多かり。今天より八咫鳥を遣さむ。かれその八咫鳥導きてむ。その立たむ後より幸でますべしと、覺しまをしたまひき。かれその御覺のまに、その八咫鳥の後より幸でまししかば、吉野河の河尻に到りましき。時に笠をうちて魚取る人ありき。ここに天神の御子汝は誰ぞと問はしければ、僕は國神名は鸞持の子とまをしき(こは阿陀之鸞養の祖)。其地より幸でませば、尾ある人井より出で來、その井光れり。汝は誰ぞと問はせば、僕は國神名は井冰鹿とまをしき(こは吉野首等が祖なり)。かくてその山に入りまししかば、また尾ある人遇へり。この人巖を押し分けて出で來。汝は誰ぞと問はせば、僕は國神名は石押分の子、今天神の御子幸でますと聞ける故に、まる迎へまつるにこそとまをしき(こは吉野國巢の祖)。其地より踏み穿ち越えて、宇陀に幸でましき。かれ宇陀の穿といふ。

かれここに宇陀に、兄宇迦斯弟宇迦斯と二人ありけり。かれ先づ八咫鳥を遣はして、二人に問はしめたまはく、今天神の御子幸でませり。汝ども仕へまつらむや。ここに兄宇迦斯鳴鶴をもちて、その使を待ち射返へしき。かれその鳴鶴の落ちたりし地を、訶夫羅前と謂ふ。待ち撃たむといひ

て、軍人を聚めしかども、え聚めざりしかば、仕へまつらむと欺りて、大殿を作りて、その殿内に押機を張りて待ちける時に、弟宇迦斯先づまる迎へて、拜みてまをさく、僕が兄宇迦斯天神の御子の使を射返へし、待ち攻めむとして軍を聚むれども、え聚めざれば、大殿を作り、その内に押機を張りて、待ち取らむとす、かれまる迎へて顯はしませんとまをしき。ここに大伴連等が祖道臣命、久米直等が祖大久米命二人、兄宇迦斯を召して、罵りていひけらく、儼か作り仕へまつれる大殿の内には、おれ先づ入りて、その仕へまつらむとする状を明し白せといひて、横刀の手上握り、槍ゆけ矢刺して、追ひ入るる時に、己が張り置ける押機に打たれて死にき。即ち控き出して斬り散りき。かれ其地を宇陀の血原となしふ。

然してその弟宇迦斯が獻つれる大饗をば、悉にその御軍人どもに賜ひき。この時に御歌よみしたまはく、

古

宇陀の、高城に、鳴鶴張る、我が待つや、鳴は障

らず、勇細し、鯨障る、前妻が、魚乞はさば、立

楓稜の實の、長けくを、幾許轟えね、後妻が、魚

乞はさば、冷實の、大けくを、幾許轟えね。

ええ、しやこしや。こはいこのふぞ。ああ、しやこしや。こは嘲咲ふぞ。かれその弟宇迦斯「こは宇陀、水取等が祖なり」。其地より幸でまして、忍坂、大室に到りませる時に、尾ある土雲八十建、その室にありて待ちい

なる。かれここに天神の御子の命もちて、八十建に御饗を賜ひき。ここに八十建に宛てて、八十膳夫を設けて、人毎に刀佩けてその膳夫どもに、歌を聞かば、一時に斬れと誨へたまひき。かれその土雲を打たむとすることを明せる歌、

中

忍坂の、大室屋に、人多に、來入り居り、人多に、

入り居りとも、みつ／＼し、久米の子が、頭椎石

椎もち、撃ちてしやまむ、みつ／＼し、久米の子

等が、頭椎石椎もち、今撃たば善らし、

かく歌ひて、刀を抜きて、もろともに打ち殺しつ。

その後登美昆古を撃ちたまはむとせし時の大御歌、

みつ／＼し、久米の子等が、粟生には、臭韭一

莖、其根が莖、其根芽繁きて、撃ちてしやまむ。

また

みつ／＼し、久米の子等が、垣下に、植多し置、口

響く、吾は忘れじ、撃ちてしやまむ。

また

神風の、伊勢の海の、大石に、はひもとほろふ、細

蝶の、いはひもとほり、撃ちてしやまむ。

また

また

また

また

また

また

また

また

62 また兄師木弟師木を撃ちたまへる時に、御軍暫は疲れたりき。そのときの大御歌、

櫛並めて、伊那佐の山の、樹の間よも、い行きま  
もらひ、戦へば、吾はや飢ぬ、鳥つ鳥、鶺鴒が徒、

今助に来ね。

吉 かれここに通靈速日命まる来て、天ノ神の御子にまをさく、天ノ神の御子天降りましぬとききつる  
故に、追ひてまの降り来つとまをして、即ち天ノ瑞を獻りて仕へまつりき。かれ通靈速日命、登  
美毘古が妹登美夜毘賣に娶ひて生める子、宇摩志麻遲命。「こは物部連、穂積臣、探臣の祖な  
り」。

事 かれかくのごと、荒ふる神等を言向けやはし、伏はぬ人どもを掃ひ平げたまひて、畝火之白檮原、  
宮にましくて、天ノ下治しめしき。

節 かれ日向にましくし時、阿多之小櫛君の妹、名は阿比良比賣を娶して、生みませる子、多藝心  
美美命、次に岐須美美命、二柱ませり。

然れども更に、大后とせむ美人を求めたまふ時に、大久米命のまをさく、ここに神の御子なりと  
まをす媛女あり。そを神の御子なりとまをす所以は、三島、湊咋の女、名は勢夜陀多良比賣、それ  
容姿麗かりければ、美和の大物主、神見感でて、その美人の胸に入れる時に、丹塗矢になりて、そ  
の胸の下より、その美人の富登を突きたまひき。かれその美人驚きて、立ち走りいすすきき。か  
くてその矢を持ち来て、床の邊に置きしかば、忽に麗しき壯夫に成りて、即ちその美人に娶ひて

生みませる子、名は富登多良伊須岐比賣命、またの名は比賣多良伊須氣余理比賣とまをす。  
〔是はその富登といふ事を悪みて、後に改つる名なり〕。かれここを以て神の御子とまをすなり  
とまをしき。

ここに七媛女、高佐士野に遊べるに、伊須氣余理比賣その中に在りき。大久米命その伊須氣余  
理比賣を見て、歌もて天皇にまをしけらく、

中 倭の、高佐士野を、七行く、媛女ども、誰をしま  
かむ。

ここに伊須氣余理比賣は、その媛女どもの前に立てりき。天皇その媛女どもを見そなはして、御  
心に伊須氣余理比賣の最前に立てることを知りたまひて、御歌もて答へたまはく、

かつがつも、最先立てる、愛をしまかむ。

巻 ここに大久米命、天皇の命を、その伊須氣余理比賣に詔れる時に、その大久米命の裂ける利目  
を見て、奇しと思ひて、

胡鷲子鶴鶴、千鳥眞鷗、など裂ける利目。  
と歌ひければ、大久米命、

媛女に、直に逢はむと、吾が裂ける利目。

63 と歌ひてぞ答へける。かれその媛子仕へまつらむとまをしき。ここにその伊須氣余理比賣命の家、  
狭井河の上にありき。天皇その伊須氣余理比賣がり幸でまして、一夜御寝ましき。〔その河を佐

葦河といふ由は、その河の邊に、山百合草多かりき。かれその山百合草の名を取りて、佐葦河と名けき。山百合草の本の名佐葦といひき。後にその伊須氣余理比賣宮内にまゐれる時に、天皇御歌よみしたまはく、

葦原の醜き小屋に、菅疊、彌漉敷きて、朕二人寝し。

然して生れませる御子の名は、日子八井命。次に神八井耳命。次に神沼河耳命（三柱）。かれ天皇崩りまして後に、その庶兄當藝志美美命、その嫡后伊須氣余理比賣に、淫くる時に、その三柱の弟たちを殺せむとして、謀りこつほどに、その御祖伊須氣余理比賣患ひまして、歌よみしてその御子たちに知らしめたまへりし、その御歌、

狭井河よ、雲起ち互り、畝火山、木の葉喧擾ぎぬ、

畝火山、晝は雲と居、夕されば、風吹かむとぞ、木の葉喧擾げる。

ここにその御子たち聞き知りまして、驚きて乃ち當藝志美美を殺せむとしたまふ時に、神沼河耳命、その兄神八井耳命にまをしたまはく、なね汝が命、兵を取りて入りて、當藝志美美を殺せたまへとまをしたまひき。かれ兵を取りて、入りて殺せむとしたまふ時に、手足わななきて、得殺

せたまはざりき。かれここにその弟神沼河耳命、その兄の持たせる兵を乞ひ取りて、入りて當藝志美美を殺せたまひき。かれまたその御名をたたへて、建沼河耳命ともまをしき。ここに神八井耳命、弟建沼河耳命に譲りてまをしたまはく、吾は仇を得殺せず、汝が命既に得殺せたまひぬ。かれ吾は兄なれども、上とあるべからず、是を以て汝が命上とまして、天、下治しめせ、僕は汝が命を扶けて、忌人となりて仕へまつらむとまをしたまひき。かれその日子八井命は、(茨田連、手島連の祖)。

神八井耳命は、(意富、臣、小子部連、坂合部連、火君、大分君、阿蘇君、筑紫、三家連、雀部、臣、雀部造小長谷造、都祁直、伊余國造、科野國造、道奥、石城國造、常道、伴國造、長狭國造、伊勢、船木直、尾張、丹羽、臣、島田、臣等が祖なり)。

すべてこの神倭伊波禮毘古天皇、御年壹百參拾七歳、御陵は畝火山の北、方白檮尾の上にある。神沼河耳命、葛城高岡宮にましくて、天、下治しめしき。この天皇、師木、縣主の祖、河俣毘賣を娶して、生みませる御子、師木津日子玉手見命(一柱)。この天皇御年四拾五歳、御陵は御山岡にあり。

師木津日子玉手見命、片鹽六宮にましくて、天、下治しめしき。この天皇、河俣毘賣の兄、縣主殿延の女、阿久斗比賣を娶して、生みませる御子、常根津日子伊呂泥命、次に大佐日子鉏友命、次に師木津日子命。

この天皇の御子等、并せて三柱の中、大倭日子鈕友命は、天下治しめしき。次に師木津日子命の御子二柱ませる。一柱の子孫は、伊賀須知稻置、那婆理之稻置、三野之稻置の祖。一柱の御子知都美命は、淡道之御井宮にましき。かれこの王女二柱ましき。兄の名は蠅伊呂杵、またの名は意富夜麻登久邇阿禮比賣命、弟の名は蠅伊呂杵。この天皇御年四拾九歳、御陵は畝火山の美富登にあり。

大倭日子鈕友命、輕之境岡宮にましく、天下治しめしき。この天皇、師木縣主の祖、賦登麻和訶比賣命、またの名は飯日比賣命を娶して、生みませる御子、御眞津日子訶惠志泥命、次に多藝志比古命(二柱)。

この天皇御年四拾五歳、御陵は畝火山の眞名子谷の上にあり。御眞津日子訶惠志泥命、葛城掖上宮にましく、天下治しめしき。この天皇、尾張連の祖、奥津余曾の妹、名は余曾多本毘賣命を娶して、生みませる御子、天押帶日子命、次に大倭帶日子國押人命(二柱)。

かれ弟帶日子國押人命は、天下治しめしき。兄天押帶日子命は、春日臣、大宅臣、栗田臣、小野臣、村本臣、壹比草臣、大坂臣、阿那臣、多紀臣、羽栗臣、知多臣、牟邪臣、都怒山臣、伊勢飯高君、壹師君、近淡海國造の祖なり。

この天皇御年九拾參歳、御陵は掖上博多山の上にあり。大倭帶日子國押人命、葛城室之秋津島宮にましく、天下治しめしき。この天皇、御姪忍鹿比賣命に娶ひまして、生みませる御子、大吉備諸進命、次に大倭根子日子賦斗邇命(二柱)。

この天皇、御年壹百貳拾參歳、御陵は玉手岡の上にあり。大倭根子日子賦斗邇命、黒田鷹戸宮にましく、天下治しめしき。この天皇、十市縣主の祖、大目の女、名は細比賣命を娶して、生みませる御子、大倭根子日子國玖琉命(一柱)。

また春日之千速眞若比賣を娶して、生みませる御子、千速比賣命(一柱)。また意富夜麻登玖邇阿禮比賣命に娶ひまして、生みませる御子、夜麻登登母曾毘賣命、次に日子刺肩別命、次に比古伊佐勢理比古命、またの名は大倭津日子命、次に倭飛羽矢若屋比賣(四柱)。

またその阿禮比賣命の弟、蠅伊呂杵に娶ひまして、生みませる御子、日子窟間命、次に若日子建吉備津日子命(二柱)。この天皇の御子たち、并せて八柱ませり(男五柱、女王三柱)。

かれ大倭根子日子國玖琉命は、天下治しめしき。大吉備津日子命と若建吉備津日子命とは二柱相副はして、針間の氷河の前に、忌登を居て、針間を道の口として、吉備國を言向け和したまひき。

かれこの大吉備津日子命は、吉備上道臣の祖なり。次に若日子建吉備津日子命は、吉備下道臣、笠臣の祖なり。次に日子窟間命は、針間牛鹿臣の祖なり。次に日子刺肩別命

は、「高志之利波、臣、豊國之國前、臣、五百原、君、角鹿、海、直の祖なり。」  
 この天皇、御年壹百六歳、御陵は片岡、馬坂の上にあリ。  
 大倭根子日子國玖琉、命、輕之塚原、宮にましめて、天下治しめしき。この天皇、穗積、臣等が  
 祖、内色許男、命の妹、内色許賣、命を娶して、生みませる御子、大毘古、命、次に少名日子建  
 心、命、次に若倭根子日子大毘古、命「三柱」。また内色許男、命の女、伊賀迦色許賣、命を娶して、  
 生みませる御子、比古布都押之信、命「一柱」。また河内、青玉が女、名は波瀨夜須毘賣を娶して、  
 生みませる御子、建波瀨夜須毘古、命「一柱」。この天皇の御子たち、并せて五柱ませり。  
 かれ若倭根子日子大毘古、命は、天下治しめしき。その兄大毘古、命の子、建沼河別、命は、「阿部、  
 臣等が祖」。次に比古伊那許志別、命、「こは膳、臣の祖なり」。比古布都押之信、命、尾張、連等が祖、  
 意富那毘が妹、葛城之高千那毘賣に娶ひて、生みませる子、味師内、宿禰、「こは山代、内、臣の祖  
 なり」。また木、國造の祖、宇豆比古が妹、山下影、日賣に娶ひて、生みませる御子、建内、宿禰。  
 この建内、宿禰の子、并せて九人「男七人女二人」。波多、八代、宿禰は、「波多、臣、林、臣、波美、  
 臣、星川、臣、淡海、臣、長谷部、君の祖なり」。次に許勢、小柄、宿禰は、「許勢、臣、雀部、臣、輕  
 部、臣の祖なり」。次に蘇賀、石河、宿禰は、「蘇我、臣、川邊、臣、田中、臣、高向、臣、小治田、臣、  
 櫻井、臣、岸田、臣等の祖なり」。次に平群、都久、宿禰は、「平群、臣、佐和良、臣、馬御、連等の  
 祖なり」。次に木、角、宿禰は、「木、臣、都奴、臣、坂本、臣の祖」。次に久米能摩伊刀比賣、次に怒  
 能伊召比賣、次に葛城、長江、曾都毘古は、「玉手、臣、的、臣、生江、臣、阿蘇那、臣等の祖なり」。

また若子、宿禰は、「江沼財、臣の祖」。  
 この天皇、御年五拾七歳、御陵は劔、池之中、岡の上にあリ。  
 若倭根子日子大毘古、命、春日之伊邪河、宮にましめて、天下治しめしき。この天皇、且波、  
 大縣主、名は由基理が女、竹野比賣を娶して、生みませる御子、比古由牟須美、命「一柱」。また  
 庶母伊賀迦色許賣、命に娶ひまして、生みませる御子、御眞木入日子印惠、命、次に御眞津比賣、  
 命「二柱」。また丸邇、臣の祖、日子國意都、命の妹、意都都比賣、命を娶して、生みませる御子、  
 日子坐、王「一柱」。また葛城之垂見、宿禰の女、鸕比賣を娶して、生みませる御子、建豐波豆羅和  
 氣、王「一柱」。この天皇の御子たち、并せて五柱「男王四、女王一」。  
 かれ御眞木入日子印惠、命は、天下治しめしき。その兄比古由牟須美、王の御子、大筒木垂根、  
 王、次に諡岐垂根、王「二柱」。この二柱の王の女、五柱ませしき。  
 次に日子坐、王、山代の存名津比賣、またの名は斯幡戸辨に娶ひて、生みませる子、大俣、王、次  
 に小俣、王、次に志夫美、宿禰、王「三柱」。また春日、建國勝戸賣が女、名は沙本之天間見戸賣に娶  
 ひて、生みませる子、沙本毘古、王、次に袁邪本、王、次に沙本毘賣、命、またの名は佐波連比賣、  
 「この沙本毘賣、命は伊久米、天皇の后とませり」。次に室毘古、王「四柱」。また近、淡海の御上、祝  
 がもちいつく、天之御影、神の女、息長、水依比賣に娶ひて、生みませる子、丹波、比古多須美  
 知能宇斯、王、次に水穗、眞若、王、次に神大根、王、またの名は八瓜入日子、王、次に水穗、五百依  
 比賣、次に御井津比賣「五柱」。また御母の弟袁都都比賣、命に娶ひて、生みませる子、山代之大

筒木眞若王、次に比古意須王、次に伊理泥王(三柱)。すべて日子坐王の子、并せて十五王。かれ兄大俣王の子、曙立王、次に莠上王(二柱)。この曙立王は、伊勢の品運部君、伊勢の佐那造の祖。莠上王は、(比賣陀、君の祖)。次に小俣王は、(當麻、勾、君の祖)。次に志夫美、宿禰王は、(佐佐、君の祖なり)。次に沙本毘古王は、(日下部、連、甲斐、國、造の祖)。次に貴邪本王は、(葛野之別、近、淡海、蚊野之別の祖なり)。次に室毘古王は、(若狭之耳、別の祖)。その美知能宇志王、丹波の河上の麻須、郎女に娶ひて、生みませる子、比婆須比賣命、次に眞砥野比賣命、次に弟比賣命、次に朝廷別王(四柱)。この朝廷別王は、(三川之穂、別の祖)。この美知能宇志王の弟、水穂、眞若王は、(近、淡海之安、直の祖)。次に神大根王は、(三野、國之造、本巢、國、造、長幡部、連の祖)。次に山代之大筒木、眞若王、同母弟伊理泥王の女、母泥之阿治佐波毘賣に娶ひて、生みませる子、迦邇米雷王。この王丹波之遠津、臣の女、名は高材比賣に娶ひて、生みませる子、息長宿禰王。この王葛城之高額比賣に娶ひて、生みませる子、息長帶比賣命、次に虚空津比賣命、次に息長日子王(三柱)。この王は吉備、品運、君、針間、阿宗、君の祖。また息長、宿禰王、河俣、稻依毘賣に娶ひて、生みませる子、大多牟坂王。「こは多遲摩、國、造の祖なり」。上に謂へる建豐波豆羅和氣王は(道守、臣、忍海部、造、御名部、造、稻羽、忍海部、丹波之竹野、別、依網之阿毘古等が祖なり)。この天皇、御年六拾參歲、御陵は伊邪河の坂、上にあり。

古 事 記

御眞木入日子印惠命、師木、水垣、宮にましくて、天、下治しめしき。この天皇、木、國、造、名は荒河戸辨が女、遠津、年魚目、微比賣を娶して、生みませる御子、豐木入日子命、次に豐組入日賣命(二柱)。また尾張、連の祖意富阿麻比賣を娶して、生みませる御子、大入杵命、次に八坂之入日子命、次に沼名木之入日賣命、次に十市之入日賣命(四柱)。また大毘古命の女、御眞津比賣命に娶ひまして、生みませる御子、伊玖米入日子伊沙知命、次に伊邪之眞若命、次に國片比賣命、次に千千都久和比賣命、次に伊賀比賣命、次に倭日子命(六柱)。この天皇の御子たち、并せて十二柱(男王七女王五なり)。かれ伊久米伊理毘古伊佐知命は、天、下治しめしき。次に豐木入日子命は、(上毛野、君、下毛野、君等が祖なり)。妹豐組比賣命は(伊勢の大神の宮を拜き祭りたまひき)。次に大入杵命は、(能登、臣の祖なり)。次は倭日子命。「この王の時に始めて陵に人垣を立てたりき」。この天皇の御世に、役病多に起り、人、民死せて盡きなむとす。ここに天皇愁ひたまひて、神、牀にまします夜、大物主、大神、御夢に顯はれてのりたまはく、こは我が御心ぞ。故意富多多泥古をもて、我が御前を祭らしめたまはば、神、氣起らず、國平ぎなむとのりたまひき。是を以て、驛使を四方に班ちて、意富多多泥古といふ人を求むる時に、河内の美努、村に、その人を見得て、貢りき。ここに天皇、汝は誰が子ぞと問ひたまひき。僕は大物主、大神、陶津耳命の女、活玉依毘賣に娶ひて生みませる子、名は櫛御方命の子、飯肩巢見命の子、建斐根命の子、僕意富多多泥古とまをしき。



ここに天皇大く歡びたまひて、天、下平ぎ、人、民榮えなむと詔りたまひて、即ちこの意富多  
 泥古ノ命を、神主として、御諸山に、意富美和之大神の御前を齋き祭りたまひき。また伊迦賀色  
 許男ノ命に仰せて、天の八十平登を作り、天ノ神地ノ祖の社を定めまつりたまひき。また宇陀ノ墨坂  
 ノ神に、赤色の楯矛を祭り、また大坂ノ神に、黒色の楯矛を祭り、また坂之御尾ノ神、河ノ瀬ノ神ま  
 で、悉に遺ることなく、幣帛たてまつりたまひき。これに因りて、氣悉に息みて、天、下平ぎき。  
 この意富多泥古と謂ふ人を、神の子と知れる故は、上にいへる活玉依毘賣、それ顔好かりき。  
 ここに神壯夫ありて、その顔姿世に比無きが、夜半に忽ち來つ。かれ相感でて、住めるほどに、  
 幾だもあらねば、その美人妊みぬ。ここに父母その妊める事を怪みて、その女に、汝は自ら妊め  
 り。夫無きに如何にしてかも妊めると問へば、答へけらく、麗しき壯夫の、その名も知らぬが、  
 夕毎に來て、住めるほどに、自ら妊みぬといふ。是を以てその父母、その人を知らまくほりて、  
 女に誨へつらくは、赤土を床の邊に散らし、卷子紡麻を針に貫きて、その衣の欄に刺せと誨ふ。  
 かれ教へし如して、且に見れば、針つたりし麻は、戸の鉤穴より控き通り出て、唯遺れる麻は、  
 三勾のみなりき。かれここに鉤穴より出でし狀を知りて、絲のまに／＼尋ね行きしかば、美和山  
 に至りて、神の社に留りにき。かれその神の御子なりとは知りぬ。かれその麻の三勾の遺れるに  
 よりてなも、其地を美和とは謂ひける。この意富多泥古ノ命は、神ノ君、鴨ノ君の祖なり。  
 またこの御世に、大毘古ノ命をば、高志ノ道に遣はし、その子建沼河別ノ命をば、東の方十、二道  
 に遣はして、その伏はぬ人どもを言向け和さしめ、また日子坐ノ王をば、且波ノ國に遣はして、玖

古 事 記

賀耳之御笠を殺らしめたまひき。(こは人の名なり)。  
 かれ大毘古ノ命、高志ノ國に罷り往ります時に、腰袋服せる少女、山代の幣羅坂に立てりて、歌ひけ  
 らく、  
 こはや、御眞木、入日子はや、御眞木、入日子は  
 や、己が命を、竊み弑せむと、後、戸よ、い行き違  
 ひ、前、戸よ、い行き違ひ、窺はく、知らにと、御  
 眞木、入日子はや。  
 ここに大毘古ノ命怪しと思ひて、馬を返して、その少女に、汝が謂へる言、如何に言ふことぞと問  
 ひたまへば、少女、吾物言はず、唯歌をこそ詠ひつれと答へて、行く方も見えず、忽に失せにき。  
 かれ大毘古ノ命、更に還りまゐりて、天皇にまをす時に、天皇詔りたまはく、こは思ふに、山代ノ  
 國なる汝が庶兄、建波邇安ノ王の、邪心を起せる表にこそあらめ。伯父軍を興して、行かせと詔  
 りたまひて、即ち丸邇臣の祖、日子國夫玖ノ命を誦へて、遣はす時に、丸邇坂に忌齋を居ゑて、  
 罷り往らしき。  
 ここに山代の和訶羅河に到れる時に、その建波邇安ノ王、軍を興して、待ち遮り、各河を中には  
 さみて、對立ちて相挑みき。かれ其地の名を、伊、杵美と謂ひしを、今は伊豆美とぞ謂ふ。ここに  
 日子國夫玖ノ命、其方の人先づ忌矢を放てと乞ふままに、建波爾安ノ王射つれども得中てざりき。  
 ここに國夫玖ノ命の放てる矢は、建波邇安ノ王に射中てて死にき。かれその軍悉に破れて逃げ散け

中

古

ぬ。ここにその逃ぐる軍を追ひ追めて、久願婆之液に到る時に、皆迫めらえ窺みて、屎出でて、  
禪に懸りき。かれ其地の名を、屎禪と謂ひしを、今は久須婆と謂ふ。またその逃ぐる軍を遮りて  
斬れば、鵜のごと河に浮きたりき。かれその河を、鵜河と謂ふ。またその軍士を斬り屠りし故に、  
其地の名を、波布理會能とも謂ふ。かく平け訖へて、まる上りて覆奏まをしき。  
かれ大毘古命は、先の命のまに、高志國に罷り行ましき。ここに東の方より罷けし、建沼  
河別、その父大毘古と共に、相津に往き遇ひたまひき。かれ其地を相津と謂ふ。ここを以て、各  
罷けつる國の政言向けて、覆奏まをしき。

古

事

記

かれ天下平ぎ、人、民富み榮えき。ここに初めて男の弓端の調、女の手末の調を貫らしめたま  
ひき。かれその御世を稱へて、礼國知らしし、御眞木天皇とまをす。  
またこの御世に、依經池を作り、また輕之酒折池を作らしき。  
この天皇、御歳壹百六十八歳、御陵は山邊道、勾之岡、上にあり。  
伊久米伊理毘古伊佐知命、師木玉垣宮にましくて、天下治しめしき。この天皇、沙本毘古、  
命の妹、佐波遲比賣命に娶ひまして、生みませる御子、品牟都和氣命(一柱)。また且波比古  
多多須美知能宇斯、王の女、冰羽州比賣命に娶ひまして、生みませる御子、印色之入日子命、次  
に大帶日子滂斯呂和氣命、次に大中津日子命、次に倭比賣命、次に若木入日子命(五柱)。ま  
たその冰羽州比賣命の弟、沼羽田入毘賣命に娶ひまして、生みませる御子、沼羽別命、次に  
伊賀帶日子命(二柱)。またその沼羽田之入日賣命の弟、阿邪美能伊理毘賣命に娶ひまして、生

中

卷

みませる御子、伊許婆夜和氣命、次に、阿邪美都比賣命(二柱)。また大筒木垂根、王の女、迦  
具夜比賣命を娶して、生みませる御子、袁邪辨、王(一柱)。また山代の大國之淵が女、弟羽田刀  
辨を娶して、生みませる御子、落別、王、次に五十日帶日子、王、次に伊登志別、王(三柱)。また  
その大國之淵が女、弟弟羽田刀辨を娶して、生みませる御子、石衝別、王、次に石衝毘賣命、ま  
たの名は布多遲能伊理毘賣命(二柱)。すべてこの天皇の御子等、十六王(男王十三、女王三)。  
かれ大帶日子滂斯呂和氣命は、天下治しめしき。「御身の長一丈二寸、御脛の長さ四尺一寸ま  
しき」。次に印色入日子命は、血沼池を作り、また狭山池を作り、また日下之高津池を作り  
たまひき。また鳥取之河上宮にましくて、横刀壹仟口を作らしめたまひき。こを石上神宮  
に納めまつりき。即ちその宮にましくて、河上部を定めたまひき。  
次に大中津日子命は、「山邊之別、三枝之別、稻木之別、阿太之別、尾張國之三野別、吉備  
之石无別、許呂母之別、高巢鹿之別、飛鳥君、牟禮之別等の祖なり」。次に倭比賣命は、「伊  
勢の大神の宮を拜き祭りたまふ」。次に伊許婆夜和氣、王は、「沙本、穴本部之別の祖なり」。次に  
阿邪美都比賣命は、「稻瀬毘古、王に嫁ひましき」。次に落別、王は、「小月之山君、三川之衣、君  
の祖なり」。次に五十日帶日子、王は、「春日山君、高志池君、春日部君の祖」。次に伊登志  
和氣、王は、「子まさざるに因りて、子代として、伊登志部を定む」。次は石衝別、王は、「羽咋君、  
三尾君の祖」。次に布多遲能伊理毘賣命は、「倭建命の后となりたまひき」。  
この天皇、沙本毘賣を后としたまへる時に、沙本毘賣命の兄、沙本毘古、王、その同母妹に、夫

と兄とは孰れか愛しきと問へば、兄ぞ愛しきと答へたまひき。ここに沙本毘古王謀りけらく、汝寔に我を愛しく思ほさば、吾と汝と天下を治りてむとすといひて、即ち八鹽折の紐小刀を作りて、その妹に授けて、この小刀もて、天皇の寢ませらむを刺し殺しまつれといふ。かれ天皇その謀を知ろしめさずて、その後の御蔭を枕きて、御寢ましき。ここにその後、紐小刀もて、その御頸を刺しまつらむとして、三度まで擧りたまひしかども、忍へがてに哀しく思ほして、得刺しまつらずて、泣きたまふ御涙、御面に落ち溢れき。かれ天皇驚きまして、その後、問ひたまはく、吾は異しき夢を見たり、沙本の方より、暴雨の零り来て、急に吾が御面を治しつ。また錦色なる小蛇、我が頸になも纏へりし。かくの夢は何の表にかあらましと問ひたまひき。ここにその後、争はえじとおもほして、白したまはく、妻が兄沙本毘古王、妾に、夫と兄とは孰れか愛しきと問ひたりき。かく問ふには、え面勝たずてなも、兄ぞ愛しきと答へつれば、妾に誂へけらく、吾と汝と天下を治らさむ。かれ天皇を殺せまつれといひて、八鹽折の紐小刀を作りて、妾に授けつ。是を以て御頸を刺しまつらむとして、三度擧りしかども、忽に哀しくなりて、得刺しまつらずて、泣きつる涙の落ちて、御面を治しつる。必ずこの表にこそあらめとまをたまひき。ここに天皇、吾は殆に欺えつるかもと詔りたまひて、乃ち軍を興して、沙本毘古王を撃りにつかはす時に、その王稻城を作りて、待ち戦ふ。この時沙本毘賣命、その兄を思ほしかねて、後門より逃げ出でて、その稻城に納りましき。このをりしもその後妊ましたりき。ここに天皇、その後の、愛しみ重みしたまふことも、三年に

なりぬるに、妊ましてさへあることを、いと哀しと思ほしき。かれその軍を休はしめつつ、急やけくも攻めたまはざりき。かく逗留れる間に、その妊ませりし御子産れましぬ。かれその御子を出して、稻城の外に置きまつりて、天皇に白さしめたまはく、若この御子をば、天皇の御子と思ほしめさば、治めたまへとまをさしめたまひき。ここに天皇、その兄をこそ怨ひたまへれ。猶后をばいと愛しとおもほせりければ、それ得たまはむの心ましき。是を以て軍士の中に力士の捷きを選り聚へて、宣りたまひつらくは、かの御子を取らむ時、その母王をも掠ひ取りてよ。御髪にまれ、御手にまれ、取り獲むまに、探みて控き出でまつれとのりたまひき。ここにその後豫めその御心を知りたまひて、悉にその髪を剃りて、その御髪もて御頭を覆ひ、また玉緒を腐して、御手に三重纏かし、また酒もて御衣を腐して、全き衣のごと服せり。かく設け備へて、その御子を抱きて、城の外に刺し出でたまひき。かれその力士ども、その御子を取りまつりて、即ちその御神を握りまつらむと、その御髪を握れば、御髪自ら落ち、その御手を握れば、玉緒また絶え、その御衣を握れば、御衣便ち破れつ。是を以てその御子を取り獲まつりて、その御神をば得とりまつらざりき。かれその軍士ども、還りまゐ来て、奏しつらく、御髪自ら落ち、御衣また破れ、御手に纏かせる玉緒も絶えにしかば、御神をば獲まつらず、御子を取り得まつりつとまをす。ここに天皇悔い恨みたまひて、玉作りし人どもを悪まして、その地を皆奪りたまひき。かれ諺に、地得ぬ玉作とぞいふなる。

また天皇、その後に詔らしめたまはく、すべて子の名は、必ず母なもつくるを。この御子の御名をば、何とかつけむと詔らしめたまひき。かれ御答白したまはく、今稚城を焼くをりしも、火中に生れませれば、その御名は、本牟智和氣御子とぞつけまつるべきとまをさしめたまひき。また如何にして養しまつらむと詔らしめたまへるに、御母を取り、大湯坐若湯坐を定めて、養しまつるべしとまをされたまひき。かれその後のまをしたまひのまに、養しまつりき。またその後に、汝の堅めし美豆の小佩は、誰かも解かむと問はしめたまへば、且波比古多須美智能宇斯王の女、名は兄比賣弟比賣、この二柱の女王ぞ、淨き公民にませば、使ひたまふべしとまをさしめたまひき。然ありて遂にその沙本比古王を殺りたまへるに、その同母妹も從ひたまひき。かれその御子を率て遊べる状、尾張の相津なる二俣櫓を二俣小舟に作りて、持ち上り來て、倭の市師池輕池に浮べて、その御子を率て遊ひき。然るにこの御子、八等齋心前に至るまで御言とはず。かれここに高往く鶴が音を聞かして、始めて吾君問したまひき。かれ山邊之大鶴を遣はして、その鳥を取らしめき。かれこの人その鶴を追ひ尋ねて木國より針間國に到り、また追ひて稻羽國に越え、即ち且波國多遲麻國に到り、東の方に追ひ廻りて、近淡海國に到り、乃ち三野國に越え、尾張國より傳ひて科野國に追ひ、遂に高志國に追ひ到りて、和那美之水門に網を張り、その鳥を取りて、持ち上りて獻りき。かれその水門を和那美之水門とは謂ふなり。またその鳥を見たまへば、物言はむと思ほして、思はずがごと言ひたまふ事なかりき。ここに天皇患ひたまひて、御寢ませる時に、御夢に覺したまはく、我が宮を天皇の御舎のごと造

りたまはば、御子必ず御言とはむ。かく覺したまふ時に、太卜に占相て、何れの神の御心ぞと求むるに、その祟は、出雲大神の御心なりき。かれその御子をして、その大神の宮を拜ましめに遣りたまはむとする時に、誰を副はしめば吉けむと卜ふに、曙立王卜に食へり。かれ曙立王に科せて、うけひ白さしむらく、この大神を拜むによりて、誠驗あらば、この鷲巢池の樹に住める鷲や、うけひ落ちよ、かく詔りたまふ時に、その鷲地に墮ちて死にき。又うけひ活きよと詔りたまへば、更に活きぬ。また甜白鶴の前なる葉廣熊白鶴をうけひ枯らし、またうけひ生かしき。かれその曙立王に、倭老師木登美豐朝倉曙立王と謂ふ名を賜ひき。即ち曙立王薨上王二王をその御子に副へて遣はす時に、那良戸よりは跛、盲遇はむ。大坂戸よりは跛、盲遇はむ。唯木戸ぞ掖戸の吉き戸と卜へて、出で行かす時に、到ります地毎に品選部を定めき。かれ出雲に到りまして、大神を拜み訖へて、還り上ります時に、肥河の中に黒櫓橋を作り、假宮を仕へ奉りて、坐しめき。ここに出雲國造の祖、名は岐比佐都美、青葉の山を飭りて、その河下に立てて、大御食獻らむとする時に、その御子詔りたまひつらく、この河下に青葉の山なせるは、山と見えて山にはあらず、若し出雲之石碯之會宮にます、葦原色許男大神をもち齋く祝が大廷かと問ひたまひき。かれ御供に遣はさえたる王たち、聞き歡ひ見喜びて、御子をば檜柳之長總宮にませまつりて、驛使を上りき。ここにその御子一宿肥長比賣に婚ひましき。かれその美人を伺みたまへば、蛇なりき。即ち見畏みて遁げたまひき。ここにその肥長比賣患たみて、海原を光して船より追ひくれば、益見畏みて、山のたわより御船を引き越して、逃げ上りいでましつ。

ここに覆奏まをさく、大神を拜みたまへるに因りて、大御子物詔りたまへる故に、まる上り來つとまをす。かれ天皇歡はして、即ち菟上王を返して、神宮を造らしめたまひき。ここに天皇をの御子に因りて鳥取部、鳥甘部、品連部、大湯坐、若湯坐を定めたまひき。

またかの後の白したまひのまに、美知能宇斯王の女たち、比婆須比賣命、次に弟比賣命、次に歌凝比賣命、次に圓野比賣命、并せて四柱を喚上げたまひき。然るに比婆須比賣命、弟比賣命、二柱を留めて、その弟玉二柱は、いと醜かりしに因りて、木土に返し送りたまひき。

ここに圓野比賣、同じき兄弟の中に、顔醜きによりて、還さゆる事、隣りに聞えむは、いと慚しといひて、山代國の相樂に到りませる時に、樹の枝に取り懸りて、死なむとぞしたまひける。かれ其地の名を、懸木と謂ひしを、今は相樂といふなり。また弟國に到りませる時に、遂に深き淵に墜りてぞ死せたまひぬる。かれ其地の名を、墮國と謂ひしを、今は弟國といふなり。

またこの天皇、三宅連等が祖、名は多遲麻毛理を、常世國に遣はして、非常香菓を求めしめたまひき。かれ多遲麻毛理遂にその國に到りて、その木實を採りて、纒八纒矛八矛を將ちて、まる來つる間に、天皇既く崩りましぬ。ここに多遲麻毛理、纒四纒矛四矛を分けて、大后に獻り、纒四纒矛四矛を、天皇の御陵の戸に獻り置きて、その木實を擧げて、叫び哭びて、常世國の非時香菓を持ちてまる上りて侍ふとまをして遂に哭び死にき。その非時香菓といふは、今の橘なり。

この天皇、御年壹百五拾三歳、御陵は菅原之御立野、中にあり。

またその大后比婆須比賣命の時、石視作を定めたまひ、また十師部を定めたまひき。この後は狹木之寺間、陵に葬しまつりき。

大帶日子、淤斯呂和氣、天皇、總向之日代、宮にましくて、天下治しめしき。この天皇、吉備臣等が祖、若建吉備津日子の女、名は針間之伊那能大郎女に娶ひまして、生みませる御子、櫛角別王、次に大碓命、次に小碓命、またの名は倭男具那命、次に倭根子命、次に神櫛王（五柱）。また八尺、八日子、命の女、八坂之入日賣命に娶ひまして、生みませる御子、若帶日子命、次に五百十之入日子命、次に押別命、次に五百木之入日賣命。又の妾の御子、豐戸別王、次に沼代郎女、又の妾の御子、沼名木郎女、次に香余理比賣命、次に若木之入日子王、次に吉備之兄日子王、次に高木比賣命、次に弟比賣命、また日向之美波迦斯毘賣を娶して、生みませる御子、豐國別王。また伊那能大郎女の弟、伊那能若郎女を娶して、生みませる御子、眞若王、次に日子人之大兄王。また倭建命の曾孫、名は須賣伊呂大中日子王の女、訶具漏比賣を娶して生みませる御子、大枝王。

すべてこの大帶日子、天皇の御子たち、書に録せる廿一王、記さざる五十九王、并せて八十王ませる中に、若帶日子、命と倭建命、また五百木之入日子、命と、この三王ぞ太子とまをす御名を負はして、それより餘七十七王たちは、悉に國國の國、造また別、稚置、縣主に別け賜ひき。かれ若帶日子、命は、天下治しめしき。小碓命は、西東の荒ふる神、伏はぬ人どもを平けたまひき。次に櫛角別王は、「茨田下連等が祖」。次に大碓命は、「守君、太田君、島田君の祖」。

72 次に神櫛王は、「木國之酒部阿比古、宇陀酒部の祖」。次に豐國別王は「日向國造の祖なり」。

ここに天皇、三野國造の祖、神大根王の女、名は兄比賣弟比賣二孃子。それが顔好きをきこしめし定めに、その御子大碓命を遣はして、喚上げたまふ。かれその遣はさえたる大碓命、召上げずて、己れと自らその二孃子に淫けて、更に他女を求めて、その孃子とまをして貢りき。ここに天皇それ他女なることを知らしめして、恒に長眼を經しめ、また婚しもせずて、物思はしめたまひき。かれその大碓命、兄比賣に娶ひて生みませる子、押黒之兄日子王。「こは三野の宇泥須、和氣の祖」。また弟比賣に娶ひて生みませる子、押黒弟日子王。「こは牟宜都君等が祖なり」。

この御世に田部を定めたまひ、また東の淡水門を定めたまひ、また膳之大伴部を定めたまひ、また倭の屯家を定めたまひ、また坂手池を作りて、その堤に竹を植ゑしめたまひき。

天皇小碓命に詔りたまはく、何とかも汝の兄朝夕の大御食にまゐる出來ざる。専ら汝ねぎ教へ覺せと詔りたまひき。かく詔りたまひて後、五日といふまでに、猶まゐ出たまはざりき。かれ天皇小碓命に問ひたまはく、何ぞ汝の兄久しくまゐ出來ざる。若し未だ誨へずありやと問ひたまへば、既にねぎつとまをしたまひき。また如何さまにかねぎつると詔りたまへば、白したまはく、朝暮に剛に入りたりし時、捕へて搦み批きて、その枝を引き闕きて、薦に裏みて投げ棄てつとぞまをしたまひける。

ここに天皇その御子の建く荒き心を惶みまして、詔りたまはく、西の方に熊曾建二人あり。これ

伏はず、禮无き人等なり。かれその人等を取れと詔りたまひて遣はしき。この時に當りて、その御髮御帯に結はせり。ここに小碓命、その姨倭比賣命の御衣御裳を給はり、劍を御懷に納れて幸でましき。かれ熊曾建が家に到りて見たまへば、その家の邊に軍三重に圍み、室を作りてぞ居りける。ここに新室築せむと言ひ動みて、食物を設け備へたりき。かれその傍を遊行きて、その樂する日を待ちたまひき。ここにその樂の日になりて、その結はせる髪を、童女の髪のごと梳り垂れ、その姨の御衣御裳を服して、既に童女の姿に成りて、女人どもの中に交り立ちて、その室内に入りましき。ここに熊曾建兄弟二人、その孃子を見感でて、己が中に坐せて、盛に樂げたり。かれその耐なる時になりて、御懷より劍を出だし、熊曾が衣の衿を取りて、劍もてその胸より刺し通したまふ時に、その弟建見畏みて逃げ出でき。乃ちその室の椅の本に追ひ至りて、その背を取へ、劍もて尻より刺し通したまひき。ここにその熊曾建白しつらく、その御刀をな動したまひそ。僕白すべきことありとまをす。かれ暫許して押し伏せたまふ。ここに白しつらく、汝が命は誰にますぞ。吾は纏向之日代宮にましまして、大八島國知ろしめす、大帶日子淤斯呂和氣、天皇の御子、名は倭男具那王にます。おれ熊曾建二人、伏はず、禮なしと聞こしめして、おれを殺れと詔りたまひて、遣はせりとりのりたまひき。ここにその熊曾建、信に然かまざる。西の方に吾二人を除きて、建く強き人無し。然るに大倭國に吾二人にましまして建き男は坐しけり。是を以て吾御名を獻らむ。今より後倭建御子と稱へまをすべしとまをしき。この事白し訖へつれば、即ち熟茂のごと、振り拆きて殺したまひき。かれその時よりぞ御名を稱へて、倭建命とはまをしけ

る。然して還り上ります時に、山、神河、神また穴戸、神を皆言向け和してまゐりまじき。即ち出雲國に入りまして、その出雲建を殺らむとおもほして、到りまして即ち結友したまひき。かれ竊に赤檮もて、刀に作りなして、御佩かして、共に肥河に沐したまひき。ここに倭建命河より先づ上りまして、出雲建が解き置ける横刀を取り佩かして、易刀せむと詔りたまふ。かれ後に出雲建河より上りて、倭建命の詐刀を佩きき。ここに倭建命いざ刀合はさむと誂へたまふ。かれ各その刀を抜く時に、出雲建詐刀を得抜かず、即ち倭建命、その刀を抜かして、出雲建を打ち殺したまひき。かれ御歌よみしたまはく、

古  
八雲刺す、出雲建が、佩ける劍、黒葛多纏き、眞身無しにあはれ。

□  
かれかく撥ひ平げて、まゐり上りて、覆奏まをしたまひき。ここに天皇、また頻て倭建命に、東の方十二道の荒ぶる神、また伏はぬ人どもを、言向け和せと詔りたまひて、吉備臣等が祖、名は御鉏友耳建日子を副へて遣はす時に、比比羅木之八尋矛を給ひき。かれ命を受けたまはりて、罷り行でます時に、伊勢大御神の宮に参りまして、神の朝廷を拜みたまひて、その姨倭比賣命に白したまへらくは、天皇はやく吾を死ねとや思ほすらむ。如何なれか、西の方の惡人どもを撃りに遣はして、返りまゐり來し間、幾時もあらねば、軍衆をも賜はずて、今更に東の方の十二道の惡人どもを平けに遣はすらむ。これに因りて思へば、猶吾早く死ねと思ほしめすなりけりとまをして、思ひ泣きて罷ります時に、倭比賣命草

難、劍を賜ひ、また御囊を賜ひて、若し急の事あらば、この囊の口を解きたまへとなも詔りたまひける。

中  
かれ尾張國に到りまして、尾張國造の祖、美夜受比賣の家に入りまじき。乃ち婚さむと思ほししかども、また還り上りたらむ時にこそ、婚さむと思ほして、契り置きて、東の國に幸でまして、山河の荒ぶる神又は伏はぬ人どもを、悉に平け和したまひき。かれここに相武國に到りませる時に、その國造詐り白さく、この野の中に大沼あり、この沼の中に住める神、甚く道速振る神なりとまをす。ここにその神を看そなはしに、その野に入りましつれば、その國造その野に火をなも著けたりける。かれ欺かえぬと知るしめして、かの姨倭比賣命の給へる御囊の口を解き開けて見たまへば、その裏に火打ぞありける。ここに先づその御刀もて、草を刈り撥ひ、その火打をもちて、火を打ち出で、向火を著けて焼き退けて、還り出でまして、その國造どもを皆切り滅し、即ち火を著けて焼きたまひき。かれ(其地をば)今に燒遣とぞ謂ふ。

巻  
それより入り幸まして、走水海を渡ります時に、その渡の神浪を興て、御船廻ひて、得進み渡りまじき。ここにその后名は弟橘比賣命の白したまはく、妾御子に易りて海に入りなむ。御子はまけの政送けて、覆奏まをしたまふべしとまをして、海に入りまじきとす時に、菅疊八重、片疊八重、籠疊八重を波の上に敷きて、その下に下りまじき。ここにその暴浪自ら伏きて、御船得進みき。かれその後の歌はせる御歌、

75  
さねさし、相模の小野に、燃る火の、火中に立ち

て、問ひし君はも、  
かれ七日ありて後に、その後の御櫛海邊に依りたりき。乃ちその御櫛を取りて、御陵を作りて治め置きき。

古  
それより入り幸まして、悉に荒ふる蝦夷どもを言向け、また山河の荒ふる神どもを和して、還り上ります時に、足柄の坂下に到りまして、御糧聞し食す處に、その坂の神白き鹿になりて來立ちき。かれその咋し遣りの蒜の片端もて、待ち打ちたまひしかば、その目に中りて、打ち殺さえたりき。かれその坂に登り立ちて、ねもころに歎かして、吾媼はやと詔りたまひき。かれその國を阿豆麻とはいふなり。

事  
即ちその國より越えて、甲斐に出でて、酒折宮にましくける時に歌ひたまはく、

新治、筑波を過ぎて、幾夜か宿つる。

記  
ここにその御火燒の老人御歌を續きて、

かかなべて、夜には九夜、日には十日を。

とぞ歌ひける。ここを以てその老人を譽めて、東國造にぞなしたまひける。

その國より科野國に越えまして、科野の坂神を言向け、尾張國に還り來まして、先に期りおかしし美夜受比賣の許に入りましつ。ここに大御食獻る時に、その美夜受比賣大御酒盞を捧げて獻る。ここに美夜受比賣それ襲の欄に、月經著るたり。かれそを見そなはして、御歌よみたまはく、

久方の、天の香山、利鎌に、眞渡る杖、弱細、手弱が腕を、枕かむとは、吾はすれど、眞寂むとは、  
吾は思へど、汝が著せる、襲の欄に、月立ちにけり。

かれ美夜受比賣御歌に答へて歌ひけらく、

高光る、日の御子、安見しし、吾大君、新玉の、

年が來經れば、新玉の、月は來經往く、諾な諾な、

君待ち難に、吾著せる、襲の欄に、月立たなむよ。

甲  
かれここに御合ひまして、その御刀の草薙、劍を、その美夜受比賣の許に置きて、伊服岐能山の神を取りに幸でましき。

巻  
ここに詔りたまはく、この山神は徒手に直に取りてむとのりたまひて、その山に騰ります時に、山の邊に白猪逢へり。その大さ牛の如くなりき。かれ言擧して詔りたまはく、この白猪になれるものは、その神の使者にこそあらめ。今殺らずとも、還らむ時に殺りてむとのりたまひて騰りましき。ここに大冰雨を零らして、倭建、命を打ち惑はしまつりき。「この白猪に化れる者は、その神の使者にはあらずて、その神の正身にぞありけむを、言擧したまへるによりて、惑さえたまへるなり。かれ還り下りまして、玉倉部の清泉に到りて、息ひませる時に、御心稍寤めましき。かれその清泉を居寤、清泉とぞ謂ふ。



其處より發して、當處野の上に到りましし時に、詔りたまへるは、吾心恒は虚よりも有り行かむと念ひつるを、今吾足得歩まず、航の形に成れりとぞ詔りたまひける。かれ其地を當處と謂ふ。其地より差少し幸でますに、甚く疲れませるに因りて、御杖を衝かして、稍に歩みましき。かれ其地を杖衝坂と謂ふ。尾津前の一ツ松の許に到りませるに、先に、御食せし時、其地に忘らしたりし御刀、失せずて猶有りき。かれ御歌よみたまはく、

尾張に、直に向へる、尾津の崎なる、一つ松、吾兄を、一つ松、人にありせば、大刀佩けましを、衣着せましを、一つ松、吾兄を。

其地より幸でまして、三重村に到りませる時に、また吾が足三重の勾なして、甚く疲れたりとのりたまひき。かれ其地を三重と謂ふ。

そこより幸でまして、能煩野に到りませる時に、國思ばして歌ひたまはく、  
倭は、國のまほろば、たたなづく、青垣山、隠れる、倭し、美し。

また、

命の、全けむ人は、疊坂、平群の山の、隠白樹が葉を、鬢華に挿せ、その子。

この歌は思感歌なり。また歌ひたまはく、

はしけやし、吾家の方よ、雲居起ち來も。

こは片歌なり。この時御病急になりぬ。ここに御歌を、

鑿女の、床の邊に、吾置きし、つるぎの大刀、その大刀はや。

と歌ひ竟へて、即ち崩りましぬ。かれ驛使を上りき。

ここに倭にます后たちまた御子たち、諸下りきまして、御陵を作りて、其地の廢附き田に御爲ひ廻りて、哭しつづ歌ひたまはく、

廢附きの、田の稻幹に、稻幹に、蔓延廻ろふ、藤葛。

ここに八尋白智鳥になりて、天に翔りて、濱に向きて飛び行ましぬ。かれその後たち御子たち其地なる小竹の荻杖に、御足切り破るれども、その痛きをも忘れて、哭くく追ひいでましき。この時の御歌、

淺小竹原、腰煩む、虚空は行かず、足よ行くな。

またその海鹽に入りて、煩み行きましし時の御歌、

海が行けば、腰煩む、大河原の、植草、海がは、いさよふ。

また飛びて其地の磯に居たまへる時の御歌、

濱つ千鳥、濱よは行かず、磯傳ふ。

この四歌は、皆その御葬に歌ひたりき。かれ今にその歌は天皇の大御葬に歌ふなり。

かれその國より飛び翔り行まして、河内國の志幾に留まりましき。かれ其地に御陵を作りて、鎮りまさしめき。その御陵を白鳥御陵とぞ謂ふ。然れどもまた其地より更に天翔りて飛び行ましぬ。

すべてこの倭建命、國平けに廻りましし時、久米直の祖、名は七拳懸、いつも膳夫として、御伴仕へまつりき。

この倭建命、伊玖米天皇の女、布多遲能伊理毘賣命に娶ひまして、御子帶中津日子命(一柱)を生みましき。またかの海に入りましし弟橋比賣命に娶ひまして、生みませる御子、若建王

(二柱)。また近淡海の安國造の祖、意富多牟和氣が女、布多遲比賣を娶して、生みませる御子、稻依別王(一柱)。また吉備臣建日子の妹、大吉備建比賣を娶して、生みませる御子、建貝兒王(一柱)。また山代の玖玖麻毛理比賣を娶して、生みませる御子、足鏡別王(一柱)。またある

妻の生める子、息長田別王。すべてこの倭建命の御子たち、并せて六柱ませり。

かれ帶中津日子命は、天下治しめしき。次に稻依別王は、(犬上君、建部君等が祖)。次に建貝兒王は、(讃岐、綾君、伊豫之別君、登袁之別、麻佐首、宮首之別等が祖)。足鏡別王は、(鎌倉之別、小津、石代之別、漁田之別の祖なり)。

次に息長田別王の子、代俣長日子王。この王の子、飯野眞黒比賣命、次に息長眞若中比賣、

次に弟比賣(三柱)。

かれ上にいへる若建王、飯野眞黒比賣に娶ひて、生みませる子、須賣伊呂大中日子王。この王、淡海之柴野入杵が女、柴野比賣に娶ひて、生みませる子、迦具漏比賣王。かれ大帶日子天皇、この迦具漏比賣命を娶して、子大江王を生みましき(一柱)。この王庶妹銀王に娶ひて、生みませる子、大名方王、次に大中比賣命(二柱)。かれこの大中比賣命は、若坂王忍熊王の御祖にます。

この大帶日子天皇の御年、壹百參拾七歳、御陵は山邊之上にあり。

若帶日子天皇、近淡海之志賀高穴徳宮にましめて、天下治しめしき。この天皇、穂積臣等が祖、建忍山垂根の女、名は弟財郎女を娶して、御子和訶奴氣王を生みましき(一柱)。

かれ建内宿禰を大臣としたまひ、大國小國の國造を定めたまひ、又國國の堺、また大縣小縣の縣主を定めたまひき。

この天皇御年九拾五歳、御陵は沙紀之多他那美にあり。

帶中日子天皇、穴門之鰐浦宮また筑紫訶志比宮にましまして、天下治しめしき。この天皇、大江王の女、大中津比賣命に娶ひまして、生みませる御子、香坂王忍熊王(二柱)。また息長比賣命に娶ひましき。この大后の生みませる御子、品夜和氣命、次に大柄和氣命、またの名は品陀和氣命(二柱)。この太子の御名、大柄和氣命と負はせる所以は、初め生れませる時に、御腕に柄せる穴ありし故に、その御名を著けまつりき。是を以て御腹中にましめて、國(定

め)たまへりしと知らえたり。

この御世に、淡道の屯家を定めたまひき。

その大后息長帯日賣命は、當時神歸りたまへりき。かれ天皇筑紫少詞志比宮にましくて、熊

曾國を平けたまはむとせし時に、天皇御琴を控して、建内宿禰大臣沙庭に居て、神の命を請ひ

まつりき。ここに大后神がかりして、言教へ覺したまひつらくは、西の方に國あり。金銀をは

じめて、目の耀く種種の珍寶その國に多なるを。吾今その國を歸せたまはむと詔りたまひき。こ

こに天皇答へ白したまはく、高き地に登りて西の方を見れば、國は見えず、唯大海のみこそあれ

と白して、詐りせず神と思ほして、御琴を押し退けて、控きたまはず、黙いましぬ。かれその神

大く忿らして、おほかた茲の天下は、汝の知らずべき國にあらず、汝は一道に向ひませと詔りた

まひき。ここに建内宿禰大臣白しけらく、恐し、我が天皇。猶その大御琴あそばせとまをしき。

かれ稍その琴を取り依せて、生生に控き坐ましけるに、幾時もあらず、御琴の音聞えずなりぬ。

かれ火を擧げて見まつれば、既崩りましにき。

かれ驚き懼みて、殲宮にませまつりて、更に國の大幣を取りて、生剝逆剝、阿離、溝埋、屎戸、

上通下通婿、馬婿、牛婿、鶏婿、犬婿の罪の類を種種求きて、國の大赦して、また建内宿禰沙庭

に居て、神の命を請ひまつりき。ここに教へ覺したまふ狀、具に先日之の如くにて、おほかたこの

國は、汝が命の御腹にます御子の知らさむ國なりと教へ覺したまひき。

かれ建内宿禰、恐し我が大神、その神の御腹にます御子い、何の御子ぞとまをせば、男子ぞと

詔りたまひき。かれ具に請ひまつりけらく、今かく言教へたまふ大神は、その御名を知らまくほ  
しとまをせば、答へたまひつらく、こは天照大神の御心なり。また底筒男、中筒男、上筒男三  
柱の大神なり。「この時にぞその三柱の大神の御名は顯したまへる」。今寔にその國を求めむと思  
はさば、天神地祇、また山神海河神たちに悉に幣帛奉り、我が御魂を御船の上に乗せて、眞  
木の灰を瓊に納れ、また箸と葉盤を多に作りて、皆皆大海に散らし浮けて、度りますべしとのり  
たまひき。

かれ備に教へ覺したまへる如くして、軍を整へ、御船を變めて、度り幸でます時に、海原の魚  
ども、大きなる小き、悉に御船を負ひて渡りき。ここに順風盛りに吹きて、御船浪のまに／＼ゆ  
きつ。かれその御船の波、新羅の國に押し騰りて、既に國半まで到りき。ここにその國主畏ち惶  
みて奏しけらく、今よりゆくさき、天皇の命のまに／＼、御馬甘として、年の毎に船變めて、船  
腹乾さず、楫機乾さず。天地のむた、とことばに仕へまつらむとまをしき。かれ是を以て、新羅  
國をば、御馬甘と定めたまひ、百濟國をば、渡、屯家と定めたまひき。ここにその御杖を新羅の  
國主の門に衝き立てたまひき。即ち墨江大神の荒御魂を、國守ります神と鎮め祭りて、還り渡り  
ましき。

かれその政未だ竟へたまはざる間に、妊ませる御子、産れまさむとしつ。かれ御腹を鎮ひたまは  
む爲に、石を取らして、御裳の腰に纏かして、筑紫國に渡りきましてぞ、その御子は生れましけ  
る。かれその御子生みたまへる地を、宇美とぞ名づけける。またその御裳に纏かせりし石は、筑

紫國の伊斗村になもある。

また筑紫の末羅縣の玉島里に到りまして、その河の邊に御食せすをりしも、四月の上旬なりしかば、その河中の磯にまして、御裳の絲を抜き取り、飯粒を餌にして、その河の年魚をなも釣らしける。「その河の名を小河といふ。またその磯の名を勝門比賣といふ」。かれ四月の上旬のころ、女とも裳の絲を抜き、飯粒を餌にして、年魚釣ること、今に絶えず。

古

ここに息長帯日賣命倭に上ります時に人の心疑はしきに因りて、喪船を一つ具へて、御子をその喪船に載せまつりて、先づ御子にはやく崩りましぬと言ひ漏らさしめたまひき。かくして上り幸でます時に、香坂王忍熊王聞きて、待ち取らむと思ほして、斗智野に進み出でて、祈符したまひき。ここに香坂王い鷹木に騰りいまして見たまふに、大きな怒り猪出でて、その鷹木を刺りて、即ちその香坂王を咩ひつ。その御弟忍熊王その態をも畏ますて、軍を興し、待ち向へたまふ時に、喪船に赴ひて空船を攻めたまはむとす。かれその喪船より軍を下して戦ひき。

記

この時忍熊王は、難波吉師部の祖、伊佐比宿禰を將軍としたまひ、太子の御方には、丸邇臣の祖、難波根子建振熊命を將軍としたまひける。かれ追ひ退けて山代に到れる時に、還り立ちて各退かすて相戦ひき。ここに建振熊命權りて、息長帯日賣命は、はやく崩りましぬれば、更に戦ふべきことなしといはしめて、弓絃を絶ちて、欺りて歸服ひぬ。ここにその將軍既に詐を信みて、弓を弭し、兵を蔽めてき。ここに頂髪の中より設けたる弦を探り出で、「一にうさゆづるといふ」更に張りて追ひ撃ちき。かれ逢坂に逃げ退きて、對立ちてまた戦ひけるを、追ひ追め敗

りて、沙沙那美に出でてなも、悉にその軍を斬りける。ここにその忍熊王、伊佐比宿禰と共に追ひ追めらえて、船に乗り、海に浮びて、歌ひたまはく、

率吾君、振熊が、痛手負はずば、鷗鷗の、淡海の  
海に、落させな吾。

中

と歌ひて、即ち海に入りて共に死せたまひぬ。かれ建内宿禰命その太子を率てまつりて、御衣せむとして、淡海また若狭國を經し時に、高志前の角鹿に、假宮を造りてませまつりき。かれ其地にます伊奢沙和氣大神之命、夜の夢に見えて、吾が名を御子の御名に易へまく欲しとのりたまひき。かれ言辭きて、恐し、命のまに／＼易へまつらむとまをしき。またその神詔りたまはく、明日の且濱に幸でますべし、易名の幣獻らむとのりたまひき。かれ且濱に幸でます時に、鼻被れたる入鹿魚、既に一浦に依れり。ここに御子神に白さしめたまはく、我に御食の魚給へりとまをさしめたまひき。かれまたその御名をたたへて御食津大神とまをす。かれ今に氣比大神となまをす。またその入鹿魚の鼻の血鼻かりき。かれその浦を血浦といひしを、今は都奴賀とぞいふなる。ここに還り上りませる時に、その御祖息長帯日賣命、待酒を醸みて獻らしき。かれその御祖の御歌。

85

この御酒は、吾が御酒ならず、酒の上、常世に  
ます、石立たす、少名御神の、神壽、壽狂ほし、

豊壽、壽廻し、獻り來し、御酒ぞ、澆ずをせ、さ

かく歌はして、大御酒獻らしき。ここに建内宿禰命、御子の爲に答へまつれる歌。

この御酒を、醸みけむ人は、その鼓、臼に立てて、

歌ひつつ、醸みけれかも、舞ひつつ、醸みけれか

も、この御酒の御酒の、あやに、轉樂し、ささ。

こは酒樂の歌なり。すべてこの帶中津日子、天皇の御年五十貳歳、御陵は河内惠賀之長江にあり。

品陀和氣命、輕島の明宮にましまして、天下治しめしき。この天皇、品陀眞若王の女、三柱の女王に娶ひませる。一柱の御名は、高木之入日賣命、次

に中日賣命、次に弟日賣命。「この女王たちの父、品陀眞若王は、五百木之入日子命、尾張連の祖、建伊那陀宿禰の女、志理都紀斗賣に娶ひて、生みませる子なり。」かれ高木之入日賣

命の御子、額田大中日子命、次に大山守命、次に伊奢之眞若命、次に妹大原郎女、次に高目郎女(五柱)。中中日賣命の御子、木之荒田郎女、次に大雀命、次に根鳥命(三柱)。弟

日賣命の御子、阿部郎女、次に阿具知能三郎女、次に木之墓野郎女、次に三野郎女、次に能和紀郎子、次に妹八田若郎女、次に女鳥王(三柱)。またその矢河枝比賣の弟、袁那辨郎

女を娶して、生みませる御子、宇遲之若郎女(一柱)。また昨侯長日子王の女、息長眞若中比賣を娶して、生みませる御子、若沼毛二俣王(一柱)。また櫻井田部連の祖、島垂根の女、糸井比賣を娶して、生みませる御子、速總別命(一柱)。また日向之泉長比賣を娶して、生みませる御子、大羽江王、次に小羽江王、次に櫛日之若郎女(三柱)。また迦具瀨比賣を娶して、生みませる御子、川原田郎女、次に玉郎女、次に忍坂大中比賣、次に登富志郎女、次に迦多遲王(五柱)。また葛城之野伊呂賣を娶して、生みませる御子、伊奢能麻和迦王(一柱)。この天皇の御子たち、并せて二十六王男五十一、女王十五。この中に大雀命は、天下治しめしき。ここに天皇、大山守命と大雀命とに、汝等は、兄なる子と弟なる子と、孰れか愛しきと問はしたまひき。「天皇のかく問はしける故は、宇遲能和紀郎子に、天下治しめさしめむの御心まじつればなり」。ここに大山守命、兄なる子ぞ愛しきと白したまひき。次に大雀命は、天皇の問はし賜ふ大御心を知らして、白したまはく、兄なる子は、既に人と成りつれば、愠きこと無きを。弟なる子は、未だ若ければ、愛しきとまをしたまひき。ここに天皇詔りたまはく、雀、吾君の言ぞ、我が思はずが如くなるのとりのりたまひて、即ち詔り別けたまへらくは、大山守命は、山海の政をまをしたまへ。大雀命は、食國の政執りもちて白したまへ。宇遲能和紀郎子は、天津日繼知らせと詔り別けたまひき。かれ大雀命は、大君の命に違ひまつらざりき。

或時天皇、近淡海國に越え幸でます時、宇遲野の上に御立たして、葛野を見放けまして、歌はしけらく、

千葉の、葛野を見れば、百千足る、家庭も見ゆ、  
國の富も見ゆ。

かれ木幡村に到りませる時に、その欄に顔好き乙女遇へり。ここに天皇その乙女に、汝は誰が子ぞと問はしければ、答へ白さく、丸邇之比布禮能意富美が女、名は宮主矢河枝比賣とまをしき。天皇その乙女に吾明日還りまさむ時、汝の家に入りまさむと詔りたまひき。かれ矢河枝比賣その父に具に語りき。ここに父が曰ひけらく、こは夫君にましけり。恐し、我が子仕へまつれといひて、その家を厳しく飾りて、候ひ待てば、明日入りましぬ。かれ大御饗を獻る時に、その女矢河枝比賣に大御酒盞を取らしめて獻りき。ここに天皇その大御酒盞を取らしめながら、御歌よみしたまはく、

この蟹や、何處の蟹、百傳ふ、角鹿の蟹、横去ふ、  
何處に到る、伊知遅島、美島にとき、鷗鷗の、潜  
き息衝き、坂路だゆふ、佐佐那美道を、すくく  
と、吾が行ませばや、木幡の道に遇はしし乙女、  
後方は、小瀬ろかも、齒並啄、菱なす、櫻井の、  
丸邇坂の土を、初土は、膚赤らけみ、底土は、鈍  
黒き故、三粟の、その中土を、頭衝く、眞日には  
當てず、眉畫き濃に、書垂れ、遇はしし女、かも

かと、吾が見し見等、かくもがと、吾が見し見に、  
轉変に、向ひ居るかも、い副ひ居るかも、

かくて娶ひまして、生みませる御子ぞ、宇遲能和紀郎子にましける。

天皇日向國の諸縣、君の女、名は髮長比賣、それ顔美しと聞こしめして、使ひたまはむとして、  
喚上げたまふ時に、その太子大雀命、その乙女の難波津に泊てたるを見たまひて、その顔美き  
に愛でたまひて、即ち建内宿禰大臣に誂へたまはく、この日向より喚上げたまへる髮長比賣を  
ば、天皇の大御所に請ひ白して、吾に賜はしめよとのりたまひき。かれ建内宿禰大臣大命を請  
ひしかば、天皇即ち髮長比賣をその御子に賜ひき。賜へる状は、天皇の豊明聞こしめす日、髮  
長比賣に大御酒の柏を取らしめて、その太子に賜ひき。ここに御歌よみしたまはく、

いざ子ども、野蒜摘みに、蒜摘みに、わか行く道  
の、香ぐはし、花橘は、上枝は、鳥居枯らし、  
下枝は、人取り枯らし、三粟の中枝の、ほつも  
り、赤ら乙女を、いざささば、好らしな。

また、  
水淳る、依網の池の、堰代打ち、菱敷の、刺しけ  
るしらに、尊繰り、延へけくしらに、吾が心し、  
いやをこにして、今ぞ悔しき。

かく歌はして賜ひき。かれその乙女を賜はりて後に、太子の詠みたまへる。一  
道の後、古波陀乙女を、神のごと、聞こえしかども、相枕繼ぐ。

また、

道の後、古波陀乙女は、争はず、寝しくをしども、  
愛しみ思ふ。

古

また吉野の國主ども、大雀、命の佩かせる御大刀を見て、歌ひけらく、  
品陀の、日の御子、大雀、大雀、佩かせる大刀、  
本劔、末振ゆ。冬木のす、枯らが下樹の、さやさ

事

また吉野の白檮生に横白を作りて、その横白に大御酒を醸みて、その大御酒を醸る時に、口鼓を

記

撃ち、伎を爲して、歌ひけらく、  
白檮の生に、横白を作り、横白に、醸みし大御酒、  
甘らに、聞こしもちをせ、我がち。

この歌は、國主ども大饗獻る時恒に、今に至るまで歌ふ歌なり。  
この御世に、海部、山部、山守部、伊勢部を定めたまふ。また劔池を作る。また新羅人まる渡り  
來つ。是を以て建内宿禰、命引き率て、堤池に役だたせて、百濟池を作る。

また百濟、國主照古王、牡馬壹疋、牝馬壹疋を阿知吉師に付けて貢りき。「この阿知吉師は阿直、  
史等が祖」。また大刀と大鏡とを貢りき。また百濟、國に、若し賢人あらば貢れと仰せたまふ。か  
れ命を受けて貢れる人、名は和邇吉師、即ち論語十卷、千字文一卷、并せて十一卷を、この人に  
付けて貢りき。「この和邇吉師は文、首等が祖」。また手人韓鍛名は卓素、また吳服西素二人を貢  
りき。

中

また秦造の祖漢直の祖、また酒を醸むことを知れる人、名は仁番、またの名は須須許理等、ま  
る渡り來つ。  
かれこの須須許理大御酒を醸みて獻りき。ここに天皇この獻れる大御酒に浮立けて、御歌にしけ  
らく。

卷

須須許理が、醸みし御酒に、われ酔ひにけり、事  
慰く酒、吹く酒に、われ酔ひにけり。

かく歌はしつ幸でませる時に、御杖もちて、大坂の道中なる大石を打ちたまひしかば、その石  
走り避りぬ。かれ諺に堅石も醉人を避るとぞいふなる。  
かれ天皇崩りまして後に、大雀、命はさきの大命のまに、天下を宇遲能和紀郎子に譲りた  
まひき。ここに大山守、命は、大命に違ひて、猶ほ天下を獲むとして、その弟王を殺さむの心あ  
りて、竊に兵士を設けて攻めむとしたまひき。ここに大雀、命、その兄王の軍を備へたまふこと  
を聞かして、即ち使を遣りて、宇遲能和紀郎子に告げしめたまひき。かれ聞き驚かして、兵士を

註

河の邊に隠くし、又その山の上に、絶垣を張り、帷幕を立てて、詐りて、舍人を王になして、露に吳床にませて、百官、敬び往き來ふ狀、既に王のます所の如して、更にその兄王の河を渡りま  
 さむ時の爲に、船楫を具へ飾り、また佐那葛の根を白に搦き、その汁の滑を取りて、その船の中  
 の簀に塗りて、蹈みて仆るべく設けて、その御子は、布の衣褲を服て、既に奴の形になりて、  
 楫を取りて船に立ちませり。ここにその兄王、兵士を隠し、鎧を衣の中に服せて、河の邊に到り  
 て、船に乗りまさむとする時に、かの嚴しく飾れる處を見遣りて、弟王をその吳床に居ますと思  
 ほして、楫を執りて船に立ちませることをば、都て知らずて、即ちその楫執れる者に問ひたまは  
 く、この山に怒れる大猪ありと傳に聞けり。吾その猪を取らむと思ふを。若しその猪獲てむやと  
 問ひたまへば、楫執れる者、え獲たまはじといへば、また如何なればと問ひたまへば、時時往往  
 にして、取らむとすれどもえ得ず、是を以てえ獲たまはじと白すなりといひき。渡りて河中に到  
 れる時に、その船を傾けしめて、水の中に墮し入れき。ここに乃ち浮き出でて、水のまに流  
 れ下りたまひき。即ち流れつつ歌ひたまはく、

古

千早振る、宇治の渡に、棹取りに、速けむ人し、  
 わが許に來む。

事

ここに河の邊に隠れたる兵士、彼方此方、一時に興りて、乍刺して流しき。かれ訶和羅前に到  
 りて沈みたまひぬ。かれ鉤を以ちて、その沈みたまひし處を探りしかば、その衣の中なる甲に繋  
 りて、訶和羅と鳴りき。かれ其所の名を訶和羅前とは謂ふなり。ここにその骨を掛き出だせる

時に、弟王の御歌、

千早人、宇治の渡に、渡瀬に立てる、梓弓擅、射  
 伐らむと、心は思へど、射取らむと、心は思へど、  
 本方は、君を思ひで、末方は、妹を思ひで、苛無  
 けく、そこに思ひで、悲しけく、ここに思ひで、  
 射伐らずぞ來る、梓弓擅。

申

かれその大山守、命の御骨をば、那良山に葬しき。この大山守、命は〔土形〕君、幣岐、君、榛原君  
 等が祖なり。

要

ここに大雀、命と宇遲能和紀郎子と二柱、天下を相譲りたまふ程に、海人い大費を賣りき。かれ  
 兄王は辭みて、弟王に貢らしめたまひ、弟王はまた兄王に貢らしめて、相譲りたまふ間に、既に  
 許多日經ぬ。かく相譲りたまふこと一度二度にあらざりければ、海人は既に往還に疲れて泣きけ  
 り。かれ諺に、海人なれや、己が物から音泣くぞといふ。然るに宇遲能和紀郎子は早く崩りまし  
 ぬ。かれ大雀、命ぞ天下治しめしける。

また昔新羅國主の子、名は天之日矛と謂ふあり、この人まる渡りけり。まる渡りける故は、新  
 羅國に一の沼あり、名を阿具沼といふ。この沼の邊に、ある賤の女晝寝したりき。ここに日の  
 光虹のごと、その陰を指したるを、またある賤の男、その狀を異しと思ひて、恒にその女の行を  
 伺ひけり。かれこの女、その晝寝したりし時より、姪みて、赤玉をなも生みける。ここにその伺



へる賤の男、その玉を乞ひ取りて、恒は褰みて腰に著けたりき。この人谷邊に田を作れりければ、田人どもの食物を牛に負ほせて、谷の中に入りけるに、その國主の子天之日矛遇へり。かれその人にいひけらく、何ぞ汝食物を牛に負ほせて、谷へは入るぞ。汝必ずこの牛を殺して食ふならむといひて、即ちその人を捕へて、獄内に入れむとすれば、その人答へけらく、吾れ牛を殺さむとはならず、唯田人の食物を送るにこそあれといふ。然れども猶赦さざりければ、その腰なる玉を解きて、その國主の子に幣ひしつ。かれその賤の男を赦して、その玉を持ち來て、床の邊に置きけりしかば、即ち顔美き乙女になりぬ。かれ婚して嫡妻としたりき。ここにその乙女常に種種の珍味を設けて、いつもくその夫に進めき。かれその國主の子心奢りて、妻を言れば、その女、おほかた吾は、汝の妻に爲るべき女にあらず、吾が祖の國に行なむといひて、竊びて小船に乗りて、逃げ渡り來て、難波になも留りける。「こは難波の比賣基曾社にます、阿加流比賣とまをす神なり」。

古

事

記

ここに天之日矛、その妻の通れしことを聞きて、乃ち追ひ渡り來て、難波に到らむとする程に、その渡の神塞へて入れざりき。かれ更に還りて、多遲摩の國に泊つ。即ちその國に留りて、多遲摩の俣尾が女、名は前津見に娶ひて生める子、多遲摩母呂須玖。これが子多遲摩斐泥。これが子多遲摩比那良岐。これが子多遲摩毛理、次に多遲摩比多訶、次に清日子(三柱)。この清日子、當摩之咩斐に娶ひて生める子、酢鹿之諸男、次に妹背籠由良度美。かれ上にいへる多遲摩比多訶、その姪由良度美に娶ひて生める子、葛城之高額比賣、命(こは息長帶比賣、命の御祖)。

中

卷

かれその天之日矛の持ち渡り來つる物は、玉津寶といひて、珠二貫、また振浪比禮、切浪比禮、振風比禮、切風比禮、また奥津鏡、邊津鏡、并せて八種なり。「こは伊豆志の八前の大神なり」。かれこの神の女、名は伊豆志袁登賣、神ませり。かれ八十神この伊豆志袁登賣を得むとすれども、皆え得ず。是に二人の神あり。兄を秋山之下冰壯夫といひ、弟を春山之霞壯夫とそいひける。かれその兄その弟に謂ひけらくは、吾伊豆志袁登賣を乞へども、え得ず、汝この乙女を得てむやといへば、易く得てむといふ。ここにその兄の曰く、若し汝この乙女を得てあらば、上下の衣服を避り、身の高を量りて麴に酒を醸み、また山河の物を悉に備へ設けて、うれづくをこそせめといふ。ここにその弟、兄のいへる如、具にその母に白せば、即ちその母、布運長を取りて、一夜の間、衣、襪、襪沓まで織り縫ひ、また弓矢を作りて、その衣禪等を服せ、その弓矢を取らせて、その乙女の家遣りしかば、その衣服も弓矢も、悉に藤花とぞ成れりける。ここにその春山之霞壯夫、その弓矢を乙女の圃に繫けたるを、伊豆志袁登賣その花を異しと思ひて、持ち來る時に、その乙女の後に立ちて、その屋に入りて、則ち婚しつ。かれ子一人生みたりき。ここにその兄に、吾は伊豆志袁登賣を得たりといふ。ここにその兄い、弟のえつることを悔みて、かのうれづくの物を償はず、かれその母に愁ひ白す時に、御祖のいへらく、我が御世の事、能くこそ神習はめ。またうつしき青人草習へや。その物償はぬといひて、その兄なる子を恨みて、乃ちその伊豆志河の河島の節竹を取りて、八ッ目の荒籠を作り、その河の石を取り、鹽に合へて、その竹葉に褰み、詛言は一めけらく、この竹葉の青むがごと、この竹葉の萎むがごと、青み萎め。

またこの鹽の盈ち乾るがごと、盈ち乾よ。またこの石の沈むがごと、沈み臥せや。かく詛ひて、  
隨の上に置かしめき。ここを以てその兄八年の間干き萎み病み枯しき。かれその兄思ひ泣きて、  
その御祖に請へば、即ちその詛戸を返さしめき。ここにその身本の如くに平ぎき。「こは神うれ  
づくといふ言の本なり」。

またこの品陀、天皇の御子、若野毛二侯王、その御母の弟、百師木伊呂辨、またの名は弟日賣眞若  
比賣命に娶ひて生みませる子、大郎子、またの名は意富富杵王、次に忍坂之大中津比賣命、  
次に田井之中比賣、次に田宮之中比賣、次に藤原之琴節郎女、次に取賣王、次に沙彌王、七  
柱。かれ意富富杵王は、三國君、波多君、息長君、坂田酒人君、山道君、筑紫之采多君、  
布勢君等の祖なり。また根島王、庶妹三腹郎女に娶ひて生みませる子、中日子王、次に  
伊和島王二柱。また堅石王の子は、久奴王なり。  
記すべてこの品陀、天皇。御年壹百參拾歳。御陵は川内、惠賀之裳伏岡にあり。

### 古事記 下卷

大雀命、高津宮にましくて、天、下治しめしき。この天皇、葛城之曾都皇古の女、石之  
日賣命(大后)に娶ひまして、生みませる御子、大江之伊邪本和氣命、次に墨江之中津王、次  
に瓊之水齒別命、次に男淺津間若子、宿禰命(四柱)。また上にいへる日向の諸縣、君牛諸が女、  
髮長比賣を娶して、生みませる御子、波多毘能大郎子、またの名は大日下王、次に波多毘能若  
郎女、またの名は長日比賣命、またの名は若日下部命(二柱)。また庶妹、八田若郎女に娶  
ひまし、また庶妹宇遲能若郎女に娶ひましき。この二柱は、御子まさざりき。すべてこの大雀  
天皇の御子たち并せて六柱ましき(男王五柱、女王一柱)。かれ伊邪本和氣命は、天、下治しめし、  
次に瓊之水齒別命も天、下治しめし、次に男淺津間若子、宿禰命も天、下治しめし。  
この天皇の御世に、大后石之比賣命の御名代として、葛城部を定めたまひ、また太子伊邪本  
和氣命の御名代として、壬生部を定めたまひ、また水齒別命の御名代として、瓊部を定めたま  
ひ、また大日下王の御名代として、大日下部を定めたまひ、若日下部王の御名代として、若日  
下部を定めたまひき。  
また奏人を役てて、茨田堤、茨田三宅を作りたまひ、また丸邊池、依網池を作りたまひ、ま

細

た難波の瀬江を廻りて、海に通し、また小櫛江を廻り、また墨江の津を定めたまひき。

古

世を稱へて聖の御世とまをす。

事

その大后石之日賣命、甚だ嫉り妬みしたまひき。かれ天皇の使はす妾たちは、宮の中をもえ臨み、事立てば、足も足掻かに妬みたまひき。ここに天皇、吉備海部直が女、名は黒日賣、それ顔美しと聞こしめして、喚上げて使ひたまひき。然れどもその大后の嫉ますを畏みて、本國に逃げ下りにき。天皇高臺にまして、その黒日賣の船出するを望けまして、歌ひたまはく、

詞

沖方には、小舟連らく、黒崎の、まさづこ吾妹、

國へ下らす。

かれ大后この御歌を聞かして、いたく怒りまして、大浦に人を遣はして、追ひ下して、歩より追ひたまひき。

ここに天皇その黒日賣を戀ひたまひて、大后を欺かして、淡道島見たまはむとのりたまひて、幸でませる時に、淡道島にまして、遙に望けまして、歌ひたまはく、

おしてるや、難波の崎よ、出で立ちて、朕が國見れば、淡島、淤能碁呂島、檳榔の、島も見ゆ、佐氣都島見ゆ。

乃ちその島より傳ひて、吉備の國に幸でましき。かれ黒日賣、その國の山形の地におほましまさしめて、大御飯獻りき。ここに大御羹を煮むとして、其地の菘菜を摘める時に、天皇その饅子菘摘む處に到りまして、歌ひたまはく、

下

山縣に、蒔ける菘も、吉備人と、共にし摘めば、

楽しくもあるか。

巻

天皇上り幸でます時に、黒日賣の獻れる御歌、

また、

倭方に、往くは誰が夫、隠水の、下よ延へつつ、

往くは誰が夫。

これより後、大后豊樂したまはむとして、御綱栢を採りに、木國に幸でませる間に、天皇、八田若郎女に婚ひましつ。ここに大后は、御綱栢を御船に積み盈てて還ります時に、水取司に使はゆる、吉備國の兒島の仕了、これ己が國に退るに、難波の大渡に、後れたる倉人女の船遇へ

り。乃ち語りけらくは、天皇は、このころ八田若郎女に娶ひまして晝夜戯れますを。若し太后はこの事聞こしめさねかも。静に遊び幸でますとぞかたりける。かれその倉人女、この言を聞き、即ち御船に追ひ近きて、仕丁が言ひつること、状具にまをしき。ここに太后いたく恨み怒りまして、その御船に載せたる御綱柁をば、悉に海に投げ棄てたまひき。かれ其地を御津前とは謂ふなり。

古

即ち宮に入りまさずて、その御船を引き避きて、堀江に浜らして、河のまに／＼、山代に上り幸でましき。この時に歌ひたまはく、

事

繼苗生や、山代河を、川上り、吾が上れば、河の邊に、生ひ立てる、烏草樹を、烏草の樹、其が下に、生ひ立てる、葉廣、五百箇眞棒、其が花の、照り坐し、其が葉の、廣り坐すは、大君ろかも。

記

即ち山代より廻りて、那良の山、口に到りまして、山代「たたまはく、」  
繼苗生や、山代河を、宮上り、吾が上れば、青土よし、那良を過ぎ、小楯、倭を過ぎ、吾が見が欲し國に、葛城、高宮、吾家のあたり。  
かく歌ひ還らして、暫し筒木の韓人、名は奴理能美が家に入りましき。  
天皇、太后山代より上り幸でましぬと聞こしめして、舍人名は鳥山と謂ふ人を使はしけるととき、

送りたまへる御歌、

山城に、いしけ鳥山、いしけいしけ、吾が愛妻に、いしき遇はむかも。

また續きて丸遷、臣口子を遣はして、歌ひたまはく、

御室の、その高城なる、大猪子が腹、大猪子が、腹にある、肝向ふ、心をだにか、相思はずあらむ。」

下  
また、

繼苗生、山代女の、木鐸持、打ちし大根、根白の、白腕、纏かずけばこそ、知らずとも言はめ。

かれこの口子、臣、この御歌を白すをりしも、雨いたく降りき。ここにその雨をも避けず、前殿戸にまゐ伏せば、違ひて後戸に出でたまひ、後殿戸にまゐ伏せば、違ひて前戸に出でたまふ。かれ御進まひて、庭中に跪きをる時に、水潦腰につけり。その臣、紅紐著けたる青摺の衣を服たりければ、水潦紅紐に觸れて、青皆な紅になりぬ。ここに口子、臣の妹口日賣、太后に仕へまつれり。かれこの口日賣歌ひけらく、

山代の、筒木の宮に、物申す、吾が兄の君は、涙ぐましも。

ここに太后その故を問ひたまふ時に、僕が兄口子、臣なりとまをしき。

是に口子、臣またその妹口比賣また奴理能美、三人して譲りて、天皇に奏さしめけらくは、大后の幸でませる故は、奴理能美が飼ふ蟲、二度は匍ふ蟲になり、一度は殻になり、一度は飛ぶ鳥になりて、三色に變る奇しき蟲あり。この蟲を看そなはしに入りませるにこそあれ。更に異しき心はまさず。かく奏す時に、天皇、然らば吾も奇しと思へば、見に行かなと詔りたまひて、大宮より上り幸でまして、奴理能美が家に入りませる時に、その奴理能美己が飼へる三種の蟲を、大后に獻りき。かれ天皇、その大后のませる殿戸に御立たして、歌はしけらく、

古

繼苗生、山代女の、木邊持、打ちし大根、清清に、  
汝が言へせこそ、打渡す、彌木榮なす、來入り參  
る來れ。

事

記

この天皇と大后と御歌はしたる六歌は、響歌の返歌なり。天皇八田若郎女を戀ひたまひて、御歌を送りたまへる。その御歌、

八田の、一ト本音は、子持たず、立ちか荒れなむ、  
あたら菅原、言をこそ、菅原と言はめ、あたら清  
し女。

かれ八田若郎女の答の歌、

八田の、一ト本音は、獨居りとも、天皇し、縦と  
聞こさば、獨居りとも。

下  
かれ八田若郎女の御名代として、八田部を定めたまひき。ここに女鳥王、速總別、また天皇、その弟速總別王を媒として、庶妹女鳥王を乞ひたまひき。ここに女鳥王、速總別王に語りたまはく、大后の強に因りて、八田若郎女をも治めたまはず、かれ仕へまつらじ。吾は汝が命の妻になりなむと思ふといひて、即ち婚ひましき。是を以て速總別王復奏まをしたまはざりき。ここに天皇、直に女鳥王の坐す所に幸でまして、その殿戸の闕の上にしき。是に女鳥王機にまして、服織らせり。かれ天皇、歌よみしたまはく、  
女鳥の、吾が王の、織ろす服、誰が料ろかも。」

女鳥王答の歌、  
高行くや、速總別の、御おすひ料。

卷

かれ天皇、その心を知らして、宮に還りましき。この後、その夫速總別王の來ませる時に、その妻女鳥王歌ひたまはく、

雲雀は、天に翔る、高行くや、速總別、鶴鶴取ら  
さね。

天皇この歌を聞かして、即ち軍を興して、殺りたまはむとす。かれ速總別王女鳥王、共に逃去りて、倉椅山に騰りましき。是に速總別王歌ひたまはく、  
梯立ての、倉椅山を、峻しみると、岩掻きかねて、  
吾が手取らすも。」

また、

梯立ての、倉椅山は、峻しけど、妹と登れば、峻しくもあらず。

かれそれより逃げて、宇陀の蘇邇に到りませる時に、御軍追ひ到りて、殺せまつりき。

その將軍山部大楯連、その女鳥王の、御手に纏かせる玉釧を取りて、己が妻に與へたりき。

古

この後、豊樂したまはむとする時に、氏氏の女ども皆朝参りす。ここに大楯連が妻、かの王の玉釧を、己が手に纏きて参れり。是に大后石之日賣命、自ら大御酒の栢を取らして、諸氏氏の女どもに賜ひき。かれ大后その玉釧を見知りたまひて、御酒の栢を賜はずて、乃ち引き退けたまひて、その夫大楯連を召し出で、詔りたまはく、かの王たち禮なきに因りて退ひたまへる、こは異なる事無くこそ。夫の奴や、己が君の御手に纏かせる玉釧を、膚も焼けきに刺ぎ持ち來て、己が妻に與へたることと詔りたまひて、乃ち死刑に行ひたまひき。

事

また或時、天皇豊樂したまはむとして、日女島に幸でませる時に、その島に雁卵生みたりき、かれ建内宿禰命を召して、歌以て、雁の卵生める状を問はしたまへる、その歌、

記

玉來經る、内の朝臣、汝こそは、世の長人、空見つ、日本の國に、雁子産と、聞くや。

是に建内宿禰、歌もて語りまをさく、

高光る、日の御子、諾しこそ、問ひ賜へ、眞こそ

に、問ひ賜へ、吾こそは、世の長人、空見つ、日本國に、雁子産と、未だ聞かず。

かく白して、御琴を賜はりて、歌ひけらく、汝が王や、終に知らむと、雁は子産らし。

こは祝壽歌の片歌なり。

下

この御世に、免寸河の西の方に、高樹ありけり。その樹の影、朝日に當れば、淡道島に逮ひ、夕日に當れば、高安山を越えき。かれこの樹を切りて、船に作れるに、いと捷く行く船にぞありける。時にその船の名を枯野とぞ謂ひける。かれこの船を以て、且夕に淡道島の清水を酌みて、大御水獻りき。茲の船の壞れたるもて、鹽を焼き、その焼け遺れる木を取りて、琴に作りたりしに、その音七里に聞えたりき。かれ歌に、

卷

枯野を、鹽に焼き、其が餘、琴に造り、掻き弾くや、由良の門の、門中の、海石に、振れ立つ、葦漬の木の、さやく。

こは靜歌の返歌なり。

この天皇御年八拾參歲。御陵は毛受之耳原にあり。

伊邪本和氣命、伊波禮之若櫻宮にましまして、天下治しめしき。この天皇、葛城之曾都毘古の子、葦田宿禰の女、名は黒比賣命に娶ひまして、生みませる御子、市邊之忍齒王、次に御馬、

王、次に妹青海郎女、またの名は飯豊郎女(三柱)。

もと難波宮にましましし時、大嘗にまして、豊明せず時に、大御酒にうらげて、大御寝ましき。ここにその弟墨江中王、天皇を取りまつらむとして、大殿に火を著けたりき。是に倭漢直の祖、阿知直、盗み出でて、御馬に乗せまつりて、倭に幸でまさしめき。かれ多遅比野に到りまして、寤めまして、此處は何處ぞと詔りたまひき。かれ阿知直白さく、墨江中王、大殿に火を著けたまへり。かれ率てまつりて、倭に逃げゆくなりとまをしき。ここに天皇歌はしけらく、

丹比野に、寝むと知りせば、防壁も、持ちて來ま

しもの、寝むと知りせば。

波邇坂に到りまして、難波宮を見遣りたまへば、その火猶炳く見えたり。かれまた歌はしけらく、

波邇坂、吾が立ち見れば、烽火の、燃る家群、

妻が家のあたり。

かれ大坂の山ノ口に到りませる時に、女人遇へり。その女人の白さく、兵器を持たる人ども、許多の山を塞きをり、當岐麻道より廻りて、越え幸でますべしとまをしき。かれ天皇歌はしけらく、

大坂に、遇ふや乙女を、道問へば、直には告らず、

當岐麻路を告る。

かれ上り幸でまして、石上神宮にましましき。

是にその同母弟水齒別命、まる來ましてまをさしめたまふ。かれ天皇詔らしめたまはく、吾汝が命、若し墨江中王と同じ心ならむかと思ほせば、相言はじとのらしめたまへば、僕は穢き心なし、墨江中王と同じ心にもあらずと、答へ白したまひき。また詔らしめたまはく、然らば、今還り下りて、墨江中王を殺して、上り來ませ。その時にこそ、吾必ず相言はめとのらしめたまひき。かれ即ち難波に還り下りまして、墨江中王に近く事へまつる隼人、名は曾婆加里を欺きて、若し汝吾が言ふことをきかば、吾天皇となり、汝を大臣になして、天下治らさむとす。如何にとのりたまひき。曾婆加里命のまにまと白しき。かれその隼人に物多に賜ひて、然らば汝の王を殺りまつれとのりたまひき。是に曾婆加里己が王の剛に入りませるを伺ひて、矛もちて刺して殺せまつりき。かれ曾婆加里を率て、倭に上り幸でます時に、大坂の山ノ口に到りまして、思ほさくは、曾婆加里吾が爲に大功あれども、既に己が君を殺せまつれるは、不義なり。然れどもその功を報いずば、偽せしになりぬべし。既に契りしごと行はば、かへりてその心こそ恐れけれ。かれその功は報ゆとも、その正身をば滅してむとぞ思ほしける。是をもて曾婆加里に詔りたまはく、今日は此處に留りて、先づ大臣の位を賜ひて、明日上りまさむとのりたまひて、その山ノ口に留りまして、即ち假宮を造りて、俄に豊樂せして、乃ちその隼人に大臣の位を賜ひて、百官をして拜ましめたまふに、隼人歡ひて、志遂げぬとぞ思ひける。ここにその隼人に、今日大臣と同じ酒を飲みてむとすと詔りたまひて、共に飲ます時に、面を隠す大鏡に、その進む酒を盛りたり。ここに御子先づ飲みたまひて、隼人後に飲む。かれその隼人の飲む時に、大鏡面を覆ひ

たりき。かれ席の下に置かせる劔を取り出でて、その隼人が首を斬りたまひき。かくして明日ぞ上り幸でましける。かれ其地を近飛鳥と名づく。倭に上り到りまして詔りたまはく、今日は此處に留りて、祓禊して、明日まゝ出でて、神宮を拜まむとのりたまひき。かれ其地を遠飛鳥と名づけき。かれ石上神宮にまゝ出でて、天皇に政既に平け訖へてまゝ上りて侍ふとまをさしめたまひき。かれ召し入れて語らひたまひき。

天皇是に阿知直を、始めて藏官にめしたまひ、また糧地をも賜ひき。またこの御世に、若櫻部、臣等に、若櫻部といふ名を賜ひ、また比賣陀、君等に、比賣陀之君といふ姓を賜ひき。また伊波禮部を定めたまひき。

古

この天皇の御年六拾四歳。御陵は毛受にあり。

事

水齒別命、多治比之柴垣宮にましくて、天下治しめしき。上下等しく齊ひて、既に珠を貫けるが如くなりき。

紀

天皇、丸邇之許登、臣の女、都怒郎女を娶して、生みませる御子、甲斐郎女、次に都夫良郎女、「二柱」。また同じ臣の女、弟比賣を娶して、生みませる御子、財王、次に多訶辨郎女、并せて四柱ましき。

この天皇御年六拾歳。御陵は毛受野にあり。

男

男淺津間、若子、宿禰命、遠飛鳥宮にましくて、天下治しめしき。この天皇、意富本村王の

下

妹、忍坂之大中津比賣命に娶ひまして、生みませる御子、木梨之輕王、次に長田、大郎女、次に境之黒日子王、次に穴穂命、次に輕大郎女、またの御名は衣通郎女、「御名を衣通王と負はせる所以は、その御身の光衣より通り出でつればなり」。次に八爪之白日子王、次に大長谷命、次に橋大郎女、次に酒見郎女、「九柱」。すべてこの天皇の御子たち、九柱「男王五、女王四」。この九柱の中に、穴穂命は、天下治しめしき。次に大長谷命も、天下治しめしき。

天皇初め天津日繼知らしめさむとせし時に、爾びまして、我は打延へたる病し有れば、日繼え知らさじと詔りたまひき。然れども大后を始めて、諸卿たち堅くまをしたまへるに因りてぞ、天下治しめしける。この時新良國主、御調物八十一艘獻りき。ここに御調の大使、名は金波鏡漢紀武とぞいひける。この人薬の方を深く知りき。かれ天皇が御病を治めまつりき。

是に天皇、天下の氏氏、名名の人どもの、氏姓の竹ひ過ることを愁ひまして、味白禰の言八十

綱津日前に、玖訶瓮を据ゑて、天下の八十友緒の氏姓を定めたまひき。また木梨之輕太子の御名代として、輕部を定めたまひ、大后の御名代として、刑部を定めたまひ、大后の弟田井中

比賣の御名代として、河部を定めたまひき。

この天皇御年七拾八歳。御陵は河内之惠賀長枝にあり。

天皇崩りまして後、木梨之輕太子、日繼知らしめすに定まれるを、未だ位に即きたまはざりし

ほどに、その同母妹輕大郎女に「けて、歌よみしたまはく、

足曳の、山田をつくり、山高み、下樋をわしせ、



下聘ひに、吾が聘ふ妹を、下泣きに、吾が泣く妻  
を、今日こそは、休く肌觸れ。  
こは後舉歌なり。また、

笹葉に、打つや霰の、たしだしに、率寝てむ後は、  
人談ゆとも、愛しと、眞寢し眞寢てば、刈薦の、  
亂れば亂れ、眞寢し眞寢てば。

古

こは夷振の上歌なり。

古

是を以て百官をはじめて、天下の人も、輕太子に背きて、穴穗御子に歸りぬ。かれ輕太子畏みて、大前小前宿禰大臣の家に逃げ入りて、兵器を備へ作りたまひき。その時に作れる矢は、その箭の前を銅にしたり。かれその矢を輕箭といふ。穴穗御子も兵器を作りたまふ。「この王の作らせる矢は、即ち今時の矢なり。それを穴穗箭といふ。是に穴穗御子軍を興して、大前小前宿禰の家を圍みたまふ。かれその金門に到りませる時に、大冰雨降りき。かれ歌ひたまはく。

大前小前宿禰が、金門陰、かく倚り來ぬ、雨立ち  
止めむ。

ここにその大前小前宿禰、手を擧げ、膝を打ち、舞ひかなで、歌ひまゐく。その歌は、

宮人の、足結の小鈴、落ちにきと、宮人動揺む、  
里人もゆめ。

この歌は、宮人振なり。かく歌ひつつまゐきて、白しけらく、我が天皇の御子、同母兄の御子を攻めたまふな。若し攻めたまはば、必ず人咲はむ。僕捕へて獻らむとまをしき。かれ軍を罷めて去りましき。かれ大前小前宿禰、その輕太子を捕へて、率てまゐり出て獻りき。その太子、捕へらえて歌ひたまはく、

天飛む、輕の乙女、甚泣かば、人知りぬべし、波  
佐の山の、鳩の、下泣きに泣く。

下  
また、

天飛む、輕乙女、したたにも、倚り偃てとほれ、  
輕乙女ども。

かれその輕太子をば、伊余湯に放ちまつりき。また放たえたまはむとせし時に、歌ひたまはく、

天飛ぶ、鳥も使ぞ、鶴が音の、聞えむ時は、吾が  
名問はさね。

この三歌は、天田振なり。また歌ひたまはく、

大君を、鳥に放らば、船餘り、い歸りこむぞ、吾  
が疊ゆめ、言をこそ、疊と言はめ、吾が妻はゆめ。

この歌は、夷振の片下なり。その衣通王歌を獻る。その歌、  
夏草の、あひねの濱の、蠣貝に、足踏ますな、明

天皇の御首を打ち斬りまつりて、都夫良意富美が家に逃げ入りましき。

この天皇御年五拾六歳。御陵は菅原之伏見岡にあり。

ここに大長谷王、その時童男にましける。この事を聞かして、悔み怒りまして、乃ちその兄黒日子王の許にしまして、人天皇を取りまつれり。如何にせましとまをしたまひき。然るにその黒日子王、打ちも驚かすて、意緩におもほせり。是に大長谷王その兄を罵りて、一つには天皇にまし、一つには兄弟にますを。何ぞも恃もしげなく、人のその兄を殺りまつれることを聞きつつ、驚きもせずて、意に思ほせるといひて、即ちその衣の衿を取りて控き出でて、刀を抜きて打ち殺したまひき。またその兄白日子王にしまして、前のごとく状告げましたまふに、この王も、また黒日子王のごとく、緩に思ほせりしかば、即ちその衣の衿を取りて、引き率て来て、小治田に到りて、穴を掘りて、立ちながらに埋みしかば、腰を埋む時に至りて、二つの目、走り抜けてぞ失せたまひぬる。

また軍を興して、都夫良意富美の家を圍みたまひき。かれ軍を興して待ち戦ひて、射出づる矢葦の盛りに散るが如くなりき。是に大長谷王、矛を御杖につかして、その内を臨みまして詔りたまはく、我が相言へる乙女は、若しこの家に有りやとのりたまひき。ここに都夫良意富美この大命を聞きて、自らまゐり出て、佩ける兵器を解きて、八度拜みて、白しけるは、先に問ひたまへる女子、詞良比賣は、侍はむ。また五處の屯倉を副へて獻らむ(所謂五處の屯倉は、今の葛城の五村の苑人なり)。然るにその正身まゐる來ざる故は、古より今に至るまで、臣連の王の宮に隠ることは聞

けど、王子の臣の家に隠りませることは未だ聞かず。是を以て思ふに、賤奴意富美は、力を竭して戦ふとも、更にあ勝ちまつらじ。然れども己を恃みて、奴の家に入りませる王子は、命死ぬとも棄てまつらじ。かく白して、またその兵器を取りて、還り入りて戦ひき。かれ力竭き、矢も盡きぬれば、その王子に白しけらく、僕は痛手負ひぬ。矢も盡きぬ。今は得戦はじ。如何にせむとまをしければ、その王子、然らば更にせむ術なし。今は吾を殺せよとのりたまひき。かれ刀もてその王子を刺し殺せまつりて、乃ち己が頸を切りて失せにき。

これより後、淡海の佐佐紀山君の祖、名は韓倍白さく、淡海の久多綿之蚊屋野に、猪鹿多かり。その立てる足は、荻原の如く、指擧げたる角は、枯樹の如しとまをしき。この時市邊之忍齒王を、相誘ひて、淡海に幸でまして、その野に到りませば、各異に假宮を作りて、宿りましき。かれ明旦、未だ日も出でぬ時に、忍齒王、何の御心も無く、御馬に乗らしながら、大長谷王の假宮の傍に行き立たして、その大長谷王の御伴人に詔りたまはく、未だ寤めまさぬにこそ。早く白すべし。夜は既に曙けぬ。獵庭に幸でますべしとのりたまひて、乃ち馬を進めて出で行ましぬ。ここに大長谷王の御所に侍ふ人ども、うたて物いふ御子なれば、御心したまへ。御身をも堅めたまふべしとまをしき。かれ衣の中に甲を服まし、弓矢を取り佩かして、馬に乗らして出で行まし。忽に馬より行き變はして、矢を抜きて、その忍齒王を射落して、乃ちまたその身を切りて、馬楯に入れて、土と等しく埋みき。

是に市邊王の王子たち、意富美王、袁那王(二柱)、この亂を聞かして、逃げ去りましき。かれ

して通れ。

かれ後にまた思ひかねて、追ひ往ます時に、歌ひたまはく、  
君が行き、け長くなりぬ、山鉾の、迎へを行かむ、  
待つには待たじ。「ここに山鉾といへるは、今の  
建木なり」。

かれ追ひ到りませる時に、待ち懐ひて、歌ひたまはく、

隱國の、泊瀬の山の、大峽には、幡張りだて、眞  
小峽には、幡張りだて、大峽にし、なかさだめる、  
思ひ妻あはれ、櫂弓の、伏る伏りも、梓弓、立て  
り立てりも、後も取り見る、思ひ妻あはれ。

古  
また、

隱國の、泊瀬の川の、上瀬に、齋杖を打ち、下  
瀬に、眞杖を打ち、齋杖には、鏡を掛け、眞杖に  
は、眞玉を掛け、眞玉なす、吾が思ふ妹、鏡なす、  
吾が思ふ妻、在りと、いはばこそ、家にも行か  
め、國をも促ばめ。

かく歌ひて、即ち共に自ら死せたまひき。かれこの二歌は讀歌なり。

卷

穴穂御子、石上之穴穂宮にましくて、天下治しめしき。  
天皇同母弟大長谷王の爲に、坂本臣等が祖根臣を、大日下王の許に遣はして、詔らしめたま  
へらくは、汝が命の妹若日下王を、大長谷王に合はせむとす。かれ獻るべしとのらしめたまひ  
き。ここに大日下王四び拜みて白したまはく、若しかかる大命もあらむかと思へる故に、外に  
も出さずて置きつ。これ恐し。大命のまに、獻らむとまをしたまひき。然れども言もて白す事  
は、禮なしと思ほして、即ちその妹の禮物として、押木の玉纒を持たしめて、獻りき。根臣即  
ちその禮物の玉纒を盗み取りて、大日下王を讒しまつりけらく、大日下王は、大命を受けたま  
はらずて、己が妹や、等族の下席にならむといひて、大刀の手上取りて、怒りましたとまをし  
き。かれ天皇大く怒りまして、大日下王を殺して、その王の嫡妻長田、大郎女を取り持ち來て、  
皇后としたまひき。

下

これより後に、天皇神床にましくて、晝寢ましき。かれその后と語らひて、汝思はずこと有り  
やとのりたまひければ、吾が天皇の寵の深ければ、何の思ふことか有らむとまをしたまひき。  
是にその大后の先の子目弱王、是年七歳になりたまへり。この王、その折しも、その殿の下に遊  
びませりき。かれ天皇、その少王の殿の下に遊びませることを知ろしめさずて、大后に詔りたま  
はく、吾は恒思はずことあり。何ぞといへば、汝の子目弱王、人と成りたらむ時、吾がその父王  
を殺せしことを知りなば、還して邪心あらむかとのりたまひき。是にその殿の下に遊びませる  
目弱王、この言を聞き取りて、便ち天皇の御寢ませるを伺ひて、その傍なる大刀を取りて、その

天皇の御首を打ち斬りまつりて、都夫良意富美が家に逃げ入りましき。  
この天皇御年五拾六歳。御陵は菅原之伏見岡にあり。

古 驚きもせず、意に思はせるといひて、即ちその衣の衿を取りて控き出でて、刀を抜きて打ち殺したまひき。またその兄白日子王にしまして、前のごとく状告げましたまふに、この王も、また黒日子王のごと、緩に思はせりしかば、即ちその衣の衿を取りて、引き率て来て、小治田に到りて、穴を掘りて、立ちながらに埋みしかば、腰を埋む時に至りて、二つの目、走り抜けてぞ失せたまひぬる。

事 また軍を興して、都夫良意富美の家を圍みたまひき。かれ軍を興して待ち戦ひて、射出づる矢葦の盛りに散るが如くなりき。是に大長谷王、矛を御杖につかして、その内を臨みまして詔りたまはく、我が相言へる乙女は、若しこの家に有りやとのりたまひき。ここに都夫良意富美この大命を聞きて、自ら出る出て、佩ける兵器を解きて、八度拜みて、白しけるは、先に問ひたまへる女子訶良比賣は、侍はむ。また五處の屯倉を副へて獻らむ(所謂五處の屯倉は、今の葛城の五村の苑人なり)。然るにその正身まゝ來ざる故は、古より今に至るまで、臣連の王の宮に隠ることは聞

下

けど、王子の臣の家に隠りませることは未だ聞かず。是を以て思ふに、賤奴意富美は、力を竭して戦ふとも、更にえ勝ちまつらじ。然れども己を待みて、奴の家に入りませる王子は、命死ぬとも棄てまつらじ。かく白して、またその兵器を取りて、還り入りて戦ひき。かれ力竭き、矢も盡きぬれば、その王子に白しけらく、僕は痛手負ひぬ。矢も盡きぬ。今は得戦はじ。如何にせむとまをしければ、その王子、然らば更にせむ術なし。今は吾を殺せよとのりたまひき。かれ刀もてその王子を刺し殺せまつりて、乃ち己が頸を切りて失せにき。

巻

これより後、淡海の佐佐紀山君の祖、名は韓倍白さく、淡海の久多綿之蚊屋野に、猪鹿多かり、その立てる足は、萩原の如く、指擧げたる角は、枯樹の如しとまをしき。この時市邊之忍齒王を、相誘ひて、淡海に幸でまして、その野に到りませば、各異に假宮を作りて、宿りましき。かれ明旦、未だ日も出でぬ時に、忍齒王、何の御心も無く、御馬に乗らしながら、大長谷王の假宮の傍に行き立たして、その大長谷王の御伴人に詔りたまはく、未だ寤めまさぬにこそ。早く白すべし。夜は既に曙けぬ。獵庭に幸でますべしとのりたまひて、乃ち馬を進めて出で行ましぬ。ここに大長谷王の御所に侍ふ人ども、うたて物いふ御子なれば、御心したまへ。御身をも堅めたまふべしとまをしき。かれ衣の中に甲を服まし、弓矢を取り佩かして、馬に乗らして出で行まし、忽に馬より往き變はして、矢を抜きて、その忍齒王を射落して、乃ちまたその身を切りて、馬楯に入れて、土と等しく埋みき。

是に市邊王の王子たち、意富那王、袁那王(二柱)、この亂を聞かして、逃げ去りましき。かれ

山代の菊井に到りまして、御糧きこしめす時に、面鯨ける翁来てその御糧を奪りき。かれその二柱の王、糧は惜まぬを、汝は誰ぞとのりたまへば、我は山代の猪甘なりとまをしき。かれ玖須婆之河を逃げ渡りて、針間國に至りまし、その國人名は志自牟が家に入りまして、身を隠して、馬甘牛甘にぞ役はえいましける。

大長谷若建命、長谷朝倉宮にましくて、天下治しめしき。この天皇、大日下王の妹、若日下部王に娶ひましき(子ましまさず)。また都夫良意富美が女、韓比賣を娶して生みませる御子、白髪命、次に妹若帶比賣命(二柱)。かれ白髪の太子の御名代として、白髪部を定めたまひ、また長谷部舎人を定めたまひ、また河瀬舎人を定めたまひき。

この御世に吳人まの渡り來つ。その吳人を吳原に置きたまひき。かれ其地を吳原といふなり。初め大后日下にましかける時、日下の直越道より、河内に幸でましき。かれ山の上に登りまして、

國見しければ、堅魚を上げて屋を作れる家あり。天皇その家を問はしめたまはく、かの堅魚を上げて作れる屋は、誰が家ぞと問はしめたまひしかば、志幾之大縣主が家なりと白しき。ここに天皇詔りたまへるは、奴や、己が家を、天皇の御舎に似て造れりとのりたまひて、即ち人を遣はして、その家を焼かしたまふ時に、その大縣主懼ち畏みて、積首白さく、奴にあれば、奴ながら覺らずて、過ち作れり。いと畏しとまをしき。かれ積首の御幣物を獻る。白き犬に布を繫けて、命を著けて、己が族、名は腰佩と謂ふ人に、犬の繩を取らしめて獻りき。かれその火著くることを止めしめたまひき。即ちその若日下部王の御許に幸でまして、その犬を賜ひ入れて、詔らしめ

たまはく、この物は、今日道に得つる奇しき物なり。かれ妻間の物といひて、賜ひ入れき。是に若日下部王、天皇に奏さしめたまはく、日に背きて幸でませる事、いと恐し。かれ己れ直にまゐり上りて仕へまつらむとまをしめたまひき。是を以て宮に還り上ります時に、その山の坂の上に行き立たして、歌ひたまはく、

日下部の、此方の山と、疊原、平群の山の、此方

此方の、山の峽に、立ち榮ゆる、葉廣久麻白檜、

本には、いくみ竹生ひ、末には、たしみ竹生ひ、

いくみ竹、入籠は寝ず、たしみ竹、髓には率宿ず、

後も組み寝む、その思妻、あはれ。

即ちこの御歌を持たしめて、返し使はしき。

また或時天皇遊ばしつ、美和河に到りませる時に、河の邊に衣洗ふ乙女あり。それ顔いと好かりき。天皇その乙女に、汝は誰が子ぞと問はしければ、己が名は引田部赤猪子とまをすと白しき。かれ詔らしめたまへらくは、汝嫁がずてあれ。今召してむとのらしめたまひて、宮に還りましき。かれその赤猪子、天皇の命を仰ぎ待ちて、既に八十歳を経たりき。是に赤猪子思ひけるは、命を仰ぎ待ちつる間に、己に幾許の年を経て、顔容瘦み萎けてあれば、更に持みなし。然れども待ちつる心を顯はしませずては、慥くてえあらじと思ひて、百取の机代物を持たしめて、まゐり出で獻りき。然るに天皇、先に詔りたまへりし事をば、早く忘らしてその赤猪子に問はしけらく、汝

は誰やし老女ぞ。何すれぞまる來つると問はしければ、赤猪子白しけらく、その年のその月に、天皇の命を被りて、今日まで大命を仰ぎ待ちて、八十歳を経たり。今は顔既に老いて、更に待みなし。然はあれども、己が志を顯はし白さむとしてこそ、まゐ出つれとまをしき。是に天皇大く驚きまして、吾は早く先の事を忘れたり。然るに汝操に命を待ちて、徒に身の盛を過ぐししこと、いとほしとのりたまひて、召さまく欲しく思はせども、その甚く老いぬるに憚りたまひて、得召さずて、御歌を賜ひき。その御歌、

古  
御室の、嚴白鸚が本、白鸚が本、忌忌しきかも、  
白鸚原媛女。

事  
また、

引田の、若栗栖原、若くへに、率寝てましもの、  
老にけるかも。

記  
かれ赤猪子が泣く涙に、その服せる丹指の袖透りて濡れぬ。その大御歌に答へまつれる歌、  
御室に、築くや玉垣、築き餘し、誰にかも依らむ、  
神の宮人。

また、

日下江の、入江の蓮、花蓮、身の盛人、乏しきろ  
かも。

かれその老女に物多に給ひて、返し遣りたまひき。かれこの四歌は靜歌なり。

天皇吉野宮に幸でませる時、吉野川の邊に、乙女の遇へる、それ顔好かりき。かれこの乙女を召して、宮に還りましき。後に更にまた吉野に幸でませる時に、その乙女の遇へりし所に留りまして、其處に大御吳床を立てて、その御吳床にましくて、御琴を弾かして、その乙女に舞せしめたまひき。かれその乙女好く舞へるに因りて、御歌よみしたまへる、その御歌、

下  
吳床座の、神の御手もち、弾く琴に、舞する女、  
常世にもかも。

即ち阿岐豆野に幸でまして、御獵せす時に、天皇御吳床にましくけるに、虻御腕を咋ひけるを、  
蜻蛉來て、その虻を咋ひて、飛びいにき。是に御歌よみしたまへる、その御歌、

御吉野の、袁牟漏が嶽に、猪鹿伏すと、誰ぞ、大  
前に申す、安見しし、吾が大君の、猪鹿待つと、  
吳床に居まし、白服の、袖著具ふ、手舂に、虻搔  
著き、その虻を、蜻蛉早や咋ひ、かくのごと、名  
に負はむと、空見つ、倭の國を、蜻蛉島とふ。

かれその時よりぞ、その野を阿岐豆野とは謂ひける。

119  
また或時天皇葛城の山の上に登り幸でましき。ここに大猪出でたりき。即ち天皇鳴鏑をもちて、  
その猪を射たまへる時に、その猪怒りて、うたき依りく。かれ天皇そのうたきを畏みて、榛の上

に登りましき。かれ御歌よみしたまはく、  
安見しし、吾が大君の、遊ばしし、猪の、病猪の、  
うたき畏み、朕が逃げ、登りし、荒岳の、榛の木  
の枝。

古 事 記

また或時天皇葛城山に登り幸でませる時、百官人ども、悉に紅紐著ける青摺の衣を給はりて著たりき。彼の時にその向ひの山の尾より、山の上に登る人あり。既に天皇の兩薄に等しく、その装の状、また人どもも、相似て別れず。ここに天皇見遣らして問はしめたまはく、この倭の國に、吾を除きてまた君は無きを。今誰ぞかくて行くと問はしめたまひしかば、答へませる状も、天皇の人命の如くなりき。是に天皇いたく忿らして、矢刺したまひ、百官の人どもも、悉に矢刺しければ、かの人どもも皆矢刺せり。かれ天皇また問はしめたまはく、然らばその名を告らさぬ。各名を告りて、矢放たむとのりたまひき。是に答へませる、吾先づ問へたれば、吾先づ名告りせむ。吾は惡事も一言、善事も一言、言離の神、葛城之一言主、大神なりとまをしたまひき。ここに天皇畏みて白したまはく、恐し、我が大神。現御身まさむとは、覺らざりきと白して、大御刀また弓矢を始めて、百官の人どもの服せる衣服を脱がしめて、拜み獻りき。かれその一言主、大神、手打ちてその捧物を受けたまひき。かれ天皇の還ります時、その大神山を降り來まして、長谷の山の口に送りまつりき。かれこの一言主、大神は、その時にぞ顯れませる。  
また天皇、丸邊之佐都紀、臣が女、袁村比賣を婚ひに、春日に幸でませる時、乙女の道に逢へる、

下

幸行を見て、岡邊に逃げ隠りき。かれ御歌よみしたまへる、その御歌、  
乙女の、い隠る岡を、命組も、五百箇もがも、組  
き撥ぬるもの。  
かれその岡を、金組、岡とそ名づけける。  
また天皇長谷の百枝槻の下にましくて、豊樂きこしめす時に、伊勢國の三重の松、大御蓋を  
捧げて獻りき。ここにその百枝槻の葉落ちて、大御蓋に浮べりき。その松葉の御蓋に浮べるを  
知らずて、猶大御酒獻りけるに、天皇その御蓋に浮べる葉を看せなほして、その松を打ち伏せ、  
御佩刀をその頸に刺し當てて、斬りたまはむとする時に、その探天鳥に白しけらく、吾が身をな  
殺したまひそ。白すべき事ありとまをして、即ち歌ひけらく、

總向の、日代、宮は、朝日の、日照る宮、夕日の、  
日陰る宮、竹の根の、根足る宮、木の根の、根邊  
ふ宮、八百土よし、い杵築の宮、眞木拆く、楡の  
御門、新嘗屋に、生ひ立てる、百足る、樹が枝は、  
上、枝は、天を覆へり、中、枝は、吾妻を覆へり、  
下、枝は、蹄を覆へり、上、枝は、枝の末葉は、  
中、枝は、落ち觸らばへ、中、枝は、枝の末葉は、  
下、枝は、落ち觸らばへ、下、枝は、枝の末葉は、

鮮衣の、三重の子が、指擧せる、瑞玉盃に、浮し  
脂、落ちなづさひ、水こをろ、こをろに、是しも  
あやにかしこし、高光る、日の御子、事の、語り  
ごとも、こをば。

かれこの歌を獻りしかば、その罪赦さえにき。

ここに大后歌はしける、その御歌、

倭の、この高市に、小高る、市の高處、新營屋に、  
生ひ立てる、葉廣、五百箇眞椽、そが葉の、廣り  
坐し、その花の、照り坐す、高光る、日の御子に、  
豐御酒獻らせ、事の、語りごとも、こをば。

即ち天皇歌はしけらく、

百敷の、大宮人は、鶉鳥、領布取り掛けて、鶴鶴、  
尾行き合へ、庭雀、群す統り居て、今日もかも、  
酒みづくらし、高光る、日の宮人、事の、語りご  
とも、こをば。

この三歌は、天語歌なり。かれこの豐樂に、その三重の椽を譽めて、物多に給ひき。  
この豐樂の日、また春日之袁杼比賣が大御酒獻つる時に、天皇の歌ひたまへる、

水瀧く、臣の乙女、秀禰取らすも、秀禰取り、堅  
く取らせ、下堅く、上堅く取らせ、秀禰取らす子。  
こは宇岐歌なり。ここに袁杼比賣歌を獻れる。その歌、  
安見しし、吾が大君の、朝戸には、い倚り立たし、  
夕戸には、い倚り立たす、喘息が、下の、板にも、  
が、吾兄を。

こは志都歌なり。

この天皇、御年、壹百廿四歳。御陵は河内之多治比、高麗にあり。

白髮、大倭根子、命、伊波禮之連、粟宮にましくて、天、下治しめしき。

この天皇、大后まします、御子もまします。かれ御名代として、白髮部を定めたまひき。  
かれ天皇崩りまして後、天、下治らすべき御子まします。ここに日繼知ろしめさむ御子を問  
ふに、市邊、忍齒別、王の妹、忍海、郎女、またの名は飯豐、王、葛城、忍海之高木、角刺、宮にま  
します。

ここに山部、連小楯、針間、國の、宰に罷れる時に、その國の人民名は志目牟が新室に到りて宴す。  
ここに盛りに樂けて、耐なるとき、次第のままに皆舞ひぬ。かれ火燒き童二人、籠の傍に居たる。  
その童どもに舞はしむるに、その一人の童、汝兄先づ舞ひたまへといへば、その兄も、汝弟先づ  
舞ひたまへといふ。かく相譲る時に、その會へる人ども、その譲らふ狀を咲ひき。かれ遂に見先



づ舞ひ、訖りて次に弟儚はむとする時に、詠しつらく、

物部の、わが夫子が、取り佩ける、大刀の手上に、  
丹費き著け、その緒には、赤幡を裁ち、赤幡立て  
て、見ゆればい隠る、山の御尾の、竹を、(本)掻  
き刈り、未押し靡かすなす、八絃の琴を調べたる  
ごと、天、下治めたまひし、伊邪本和氣、天皇の御  
子、市邊之押齒、王の、奴、御末、

とのりたまへば、即ち小楯、連聞き驚きて、床より墮ち轉ひて、その室なる人どもを追ひ出して  
その二柱の御子を、左右の膝の上に坐せまつりて、泣き悲みて、民どもを集へて、假宮を作り  
て、その假宮に坐せまつり置きて、驛使上りき。ここにその御姨飯豊王、聞き歡はして、宮に  
上らしめたまひき。

かれ天、下治しめさむとせしほど、平群、臣の祖、名は志毘、臣、歌垣に立ちて、その袁那、命の婚  
さむとする乙女の手を取れり。その乙女は、菟田、首等が女、名は大魚といへり。かれ袁那、命も  
歌垣に立たしき。ここに志毘、臣、歌ひけらく、

大宮の、彼つ鯨手、隅傾けり。

かく歌ひて、その歌の末を乞ふ時に、袁那、命歌ひたまはく、

大匠、拙劣みこそ、隅傾けれ。

かれ志毘、臣また歌ひけらく、

大君の、心を寛み、臣の子の、八重の柴垣、入り  
立たずあり。

ここに御子また歌ひたまはく、

潮瀬の、波折を見れば、遊び来る、鯨が鯨手に、  
妻立てり見ゆ。

下 かれ志毘、臣、愈怒りて歌ひらく、

大君の、王の柴垣、八箇結り、結り廻し、截れむ  
柴垣、焼けむ柴垣。

ここに王また歌ひたまはく、

大魚よし、鯨衝く海人よ、其が荒れば、心裏戀し  
けむ、鯨、衝く鯨。

かく歌ひて、歸ひ明して、散けましぬ。明且、意富那、命、袁那、命二柱、譲りたまはく、すべて朝  
廷の人どもは、且には朝廷に参り、晝は志毘が門に集ふ。かれ今は志毘必ず寝ねたらむ。その門  
に人も無けむ。かれ今ならずは、謀り難けむとはかりて、即ち軍を興して、志毘、臣が家を圍みて、  
殺りたまひき。

ここに二柱の御子たち、互に天、下を譲りたまひて、意富那、命、その弟袁那、命に譲りたまはく、

針間の志自牟が家に住めりし時に、汝が命を願はしたまはざらましかば、更に天下知らさむ君とはならざらましを。既に汝が命の功にぞありける。かれ吾れ兄にはあれども、猶汝が命先づ天下を治しめしてよといひて、堅く譲りたまひき。かれ得命みたまはずて、袁那命ぞ、先づ天下治しめしける。

袁那之石巢別命、近飛鳥宮にましめて、八歳天下治しめしき。この天皇、石木王の女難波王に娶ひましき。御子はましまさざりき。

古 この天皇、その父王市邊王の御骨を求ぎたまふ時に、淡海國なる賤き老嫗まる出て白しつらく、王の御骨を埋みたりし所は、専ら吾れ能く知れり。またその御齒もて知るべしとまをしき。御齒は三枝なす押齒坐せりき。かれ民を起てて、土を掘りて、その御骨を求ぎて、即ちその御骨を獲たまひて、その蚊屋野の東の山に、御陵作りて葬めまつりて、職俗が子どもに、その御陵を守らしめたまひき。かれ還り上りまして、かの老嫗を召して、その地を忘れず、見當きて知れりしことを譽めて、置目老嫗といふ名を賜ひき。かくて宮の内に召し入れて、敦く廣く惠みたまひき。かれその老嫗の住む屋をば、宮の邊近く作りて、日毎に必ず召しき。かれ大殿の戸に鐺を掛けて、その老嫗を召さむとする時は、必ずその鐺を引き鳴らしたまひき。かれ御歌よみしたまへる、その御歌、

淺茅原、小谷を過ぎて、百傳ふ、鐺揺らくも、置目くらしも。

ここに置目老嫗、僕甚く老にたれば、本國に退らまほしとまをしき。かれ白せるまに／＼遣りたまふ時に、天皇見送らして、歌ひたまはく、

置目もや淡海の置目、明日よりは、御山隠りて、見えずかもあらむ。

初め天皇、難に逢ひて、逃げましし時に、その御類を奪りし猪甘の老人を求ぎたまひき。ここに求ぎ得たるを、喚び上げて、飛鳥河の河原に斬りて、皆その族どもの膝の筋を斷ちたまひき。是を以て今に至るまで、その子孫倭に上る日、必ず自ら跛くなり。かれその老(人)の所在を能く見しめき。かれ其處を志米須といふ。

下 天皇、その父王を殺したまひし大長谷天皇を深く怨みまつりて、その御靈に報いむと思はしき。かれその大長谷天皇の御陵を毀らむと思はして、人を遣はす時に、その同母兄意富那命のまをしたまはく、この御陵を壞らむには、他人を遣はすべからず。専ら僕自ら行きて、大君の御心のごと、壞りてまゐ出むとまをしたまひき。かれ天皇、然らば命のまに／＼幸でませと詔りたまひき。是を以て意富那命、御自ら下り幸でまして、その御陵の傍を少し掘りて還り上らして、既に掘り壞りぬとまをしたまひき。

ここに天皇、その早く還り上りませることを怪みまして、如何に壞りたまひしぞと詔りたまへば、かの御陵の傍の土を少し掘りつとまをしたまひき。天皇詔りたまはく、父王の仇を報いむと思ふなれば、必ずかの御陵を悉に壞りてむを。何ぞ少し掘りたまひしぞと詔りたまへば、まをしたま

はく、然しつる故は、父王の仇を、かの御靈に報いむと思ほすは、誠に理なり。然れどもかの大長谷天皇は、父王の仇にはあれども、還りては我が従父にまれ、また天下治しめしし天皇にますを。今單に父王の仇といふ志をのみ取りて、天下治しめしし天皇の御陵を悉に壞りなば、後の世の人必ず誹りまつりてむ。ただし、父王の仇は、報いずばあるべからず。かれかの御陵の邊を少し掘りつ。既にかく恥みせまつりてあれば、後の世に示すにもあへなむ。かくまをしたまひつれば、天皇、これも亦いと理なり。命の如くて可しとぞ詔りたまひける。

古

かれ天皇崩りまして、即ち意富那命天つ日繼知しめしき。

事

この天皇、御年三拾八歳、八歳天下治しめしき。御陵は片岡之石坏岡、上にあり。意富那命、石上廣高宮にましくて、天下治しめしき。

記

この天皇、大長谷若建天皇の御子、春日大郎女に娶ひまして、生みませる御子、高木郎女、次に財郎女、次に久須毘郎女、次に手白髪郎女、次に小長谷若雀命、次に眞若王。また丸邇日爪臣の女、糠若子郎女を娶して、生みませる御子、春日山田郎女。この天皇の御子たち、并せて、七柱ます。この中に、小長谷若雀命は、天下治しめしき。小長谷若雀命、長谷之列木宮にましまして、八歳天下治しめしき。この天皇太子まします。かれ御子代として、小長谷部を定めたまひき。御陵は片岡之石坏岡にあり。天皇既に崩りまして、日續知ろしめすべき王まします。かれ品太天皇五世の孫、袁本村命を近淡海國より上りまさせしめて、手白髪命に合はせまつりて、天下を授けまつりき。

下

袁本村命、伊波禮之玉穂宮にましくて、天下治しめしき。この天皇、三尾君等が祖、名は若比賣を娶して、生みませる御子、大郎子、次に出雲郎女(二柱)。また尾張連等が祖、凡連が妹、目子郎女を娶して、生みませる御子、廣國押建金日命、次に建小廣國押建命(二柱)。また意富那天皇の御子、手白髪命(こは太后にます)に娶ひまして、生みませる御子、天國押波流岐廣庭命(一柱)。また息長眞手王の御女、麻組郎女を娶して、生みませる御子、佐佐宜郎女(一柱)。また坂田大俣王の御女、黒比賣を娶して、生みませる御子、神前郎女、次に茨田郎女、次に(馬米)田郎女(三柱)。(また茨田連小望が女、關比賣を娶して生みませる御子、茨田大郎女、次に白坂活日郎女、次に小野郎女、またの名は長日比賣(三柱)。また三尾君加多夫が妹、倭比賣を娶して、生みませる御子、大郎女、次に丸高王、次に耳王、次に、赤比賣郎女(四柱)。また阿部之波延比賣を娶して、生みませる御子、若屋郎女、次に都天良郎女、次に阿豆王(三柱)。この天皇の御子たち、并せて十九王(男王七、女王十二)。この中に天國押波流岐廣庭命は、天下治しめしき。次に廣國押建金日命も天下治しめしき。次に建小廣國押建命も天下治しめしき。次に佐佐宜王は、伊勢神宮をいつきまつりたまひき。

この御世に、竺紫君石井、大命に従はずして禮無きこと多かりき。かれ物部、荒甲之大連、大伴之金村連二人を遣はして、石井を殺らしめたまひき。この天皇、御年四拾參歳。御陵は三島之藍にあり。

廣國押建金日命、勾之金箸宮にましくて、天、下治しめしき。この天皇御子ましまさざりき。御陵は河内之古市、高屋村にあり。

建小廣國押楯命、檜桐之櫛入野宮にましくて、天、下治しめしき。この天皇、意富那、天皇の御子、楯之中、比賣命に娶ひまして、生みませる御子、石比賣命、次に小石比賣命、次に倉之若江王。また川内之若子比賣を娶して、生みませる御子、火穗王、次に惠波王。この天皇の御子たち并せて五王(男王三、女王二)。

古

かれ火穗王は、「志比陀、君の祖」。惠波王は、「韋那、君多治比、君の祖なり」。

ひ

天國押波流岐庭、天皇、師木島之大宮にましくて、天、下治しめしき。この天皇、檜桐、天皇の御子、石比賣命に娶ひまして、生みませる御子、八田王、次に沼名倉太玉敷命、次に等繼王(三柱)。またその弟小石比賣命に娶ひまして、生みませる御子、上王(一柱)。また春日之日

四

瓜、臣の女、糠子、郎女を娶して、生みませる御子、春日山田郎女、次に麻呂古王、次に宗賀之倉王(三柱)。また宗賀之稻目、宿禰、大臣の女、岐多斯比賣を娶して、生みませる御子、楯之豐日命、次に妹石桐王、次に足取王、次に豐御毛炊屋比賣命、次にまた麻呂古王、次に大宅王、次に伊美賀古王、次に山代王、次に妹大伴王、次に櫻井之玄王、次に麻奴王、次に橋本之若子王、次に泥杵王(十三柱)。また岐多志比賣命の姨、小兒比賣を娶して、生みませる御子、馬木王、次に葛城王、次に間人穴太郎王、次に三枝部穴太郎王、またの名は須賣伊呂村、次に長谷部若雀命(五柱)。すべてこの天皇の御子たち、并せて廿五王。この中に沼

名倉太玉敷命に、天、下治しめしき。次に橋之豐日命も、天、下治しめしき。次に豐御氣炊屋比賣命も、天、下治しめしき。次に長谷部之若雀命も、天、下治しめしき。并せて四王なも天、下治しめしける。

沼名倉太玉敷命、他田宮にましくて、壹拾四歳、天、下治しめしき。この天皇、庶妹豐御氣炊屋比賣命に娶ひまして、生みませる御子、靜貝王、またの名は貝鋪王、次に竹田王、またの名は小貝王、次に小治田王、次に葛城王、次に宇毛理王、次に小張王、次に多米王、次に櫻井之玄王(八柱)。また伊勢、大鹿首の女、小熊子、郎女を娶して、生みませる御子、布斗比賣命、次に寶王、またの名は糠代比賣王(二柱)。また息長、眞手王の御女、比呂比賣命に娶ひまして、生みませる御子、忍坂日子人太子、またの名は麻呂古王、次に坂、騰王、次に宇遲王(三柱)。また春日、中若子が女、老女子、郎女を娶して、生みませる御子、難波王、次に桑田王、次に春日王、次に大俣王(四柱)。

この天皇の御子たち、并せて十七王ませる中に、日子人太子、庶妹田村王、またの御名は糠代比賣命に娶ひまして、生みませる御子、岡本宮にましくて、天、下治しめしき。天皇、次に中津王、次に多良王(三柱)。また漢王の妹、大俣王に娶ひまして、生みませる御子、智奴王、次に妹桑田王(二柱)。また庶妹玄王に娶ひまして、生みませる御子、山代王、次に等繼王(一柱)。并せて七王。

禰豐日命、池邊宮にましくて、參歲天下治しめしき。

この天皇、稻目宿禰大臣の女、意富藝多志比賣を娶して、生みませる御子、多米王〔一柱〕。また庶妹間人穴太部王に娶ひまして、生みませる御子、上宮之厨戸、豐聰耳命、次に久米王、次に楠栗王、次に茨田王〔四柱〕。また當麻之倉首比呂が女、飯女の子を娶して、生みませる御子、當麻王、次に妹須賀志呂古郎女〔二柱〕。

古

この天皇、御陵は石寸池上にありしを、後に科長中陵に遷しまつりき。御陵は倉椅岡上にある。

古

豐御食炊屋比賣命、小治田宮にましくて、參拾七歲天下治しめしき。御陵は大野岡上にありしを、後に科長大陵に遷しまつりき。

古

古事記は元明天皇の和銅五年に出来た書物で、撰者を太朝臣安萬侶といふ。和銅といへば今を距ること一千二百餘年、日本で著された記録で、現存して居る分では之が最古であるが、古事記以前に於て種々の記録のあつたことは明らかに證據がある。然るに天武天皇はそれらの記録に傳へて居る事實に彼是誤謬があるから、それを改定して後世に傳へようといふ思召で、舍人稗田阿禮なる者に勅して、『帝皇の日繼及び先代の舊辭』を誦み習はしめ給うたとある。帝皇の日繼といふは歴代天皇の御紀又先代の舊辭といふは古來の言傳を指すのであらう。間もなく天武天皇は崩御となり、事業は一時中絶したが、その後二十餘年、和銅四年九月に至り、安萬侶に詔し、阿禮の誦む所の帝紀舊辭を撰録せしめ給ひ、翌年正月を以て出来上つたのが本書である。さすれば本書の撰述は本邦古代の傳説及び史實を正確に傳へるを以て目的としたものである。近時古事記を以て一篇の敘事詩と見做す學者もあるが、それは撰述の目的を度外視し、その結果即ち古事記そのものから歸納した議論に過ぎない。

### 解題

古事記が出来てから九年目に日本書紀が出来て居る。古事記と同じく本邦古代の歴史を書いたものであるが、之は立派な漢文で書いてある。古事記は漢字こそ用ひてあるが、訓を主としたもので、いはば國文である。さうして古事記の撰者たる安萬侶が、書紀の編修者の一人である所から考へると、同人は歴史に通じ且文筆に長じた人と思はれる。阿禮については知る所少いが、人

となり甚だ聰明で、一たび見聞に觸れたことは決して忘却しなかつたとある。

古事記がこの兩名の力によつて成つたことは言ふ迄もないが、その仕事の分擔は、阿禮の誦む所の勅語の舊辭を安萬侶が撰録したと序文にある所から、先輩は阿禮の暗誦する所の帝紀及び舊辭を、安萬侶が筆録したと解釋するのみか、更に一步を進め、阿禮の暗誦する所の帝紀及び舊辭は、天武天皇が口づから阿禮に授け給うたものであるとまで言つて居るが、之は誦字及び勅語の二字に餘りに拘泥した説と考へる。それでは阿禮は一種の謗音機となり、又安萬侶は一の速記者たるに過ぎない。

古事記の本文を熟讀すると、決して一人の語る所を筆記したもの、又は一箇の史料を潤色削減したものでないと思附く。一人の物語や一箇の史料によつたものとすれば、敘述は自ら單純で、衝突矛盾は有るべき筈はない。假令あつても極めて稀なるべきである。日本書紀には本文にあげた記事と多少相違のある説は、「一書に曰」として本文の次ぎに一字下げて列擧してある。書紀の編纂に際して多數の史料を有してゐたことは之で明瞭である。古事記はさういふ書き様ではないが、或事項については、書紀の本文よりも一書のどれよりも委しい記事がある。即ち書紀の本文に用ひられた史料や、之と多少相違のある若干の史料を、湊合して書いたのではないかと思はれる箇條がある。又前後に無關係な記事が中間に介在し、本に接ぐに竹を以てすといふ處の起る場合もある。又一條の物語中、同一であるべき神の名や物の名が前後相違して居る場合もある。是等から考へると古事記は一人の物語を筆録し、一箇の史料を潤色削減したものは何うしても思

はれない。

古事記が出来てから間もなく日本書紀が出来た。短い年月の間に日本の記録が二つまでも引續いて出来た所以は、當時國民の自覺心が大いに高まつた爲であらう。海外諸國に對して日本あることを知り、この光輝ある國家の起原を語り、尊嚴なる皇室の由來を明らかにしようとした結果が、二大記録の編纂となつたのであらう。但し繰返していふ如く、古事記は訓を主とし、書紀は文を主としてゐるため、後世書紀の方が弘く行はれ、宮中で博士を召して日本紀を講ぜしめ、業畢はつて宴を設けられたことも見える。書紀の古寫本は色々残つて居り、中には應神紀の殘缺には、奈良朝時代の筆寫と認められるものさへあるに、古事記の方は最も古いとせられてゐる名古屋の眞福寺本さへ、今を距る五百五十六年、應安四年及び五年に僧賢瑜の書寫したものである。古寫本の少いこともその書の行はれなかつた一證であらう。それを近世本居官長が發憤して古訓を考へ、まづ古訓古事記三卷を出し、次いで古事記傳四十八卷を著し、本書を弘く世に行はれしめたは非常な功績と言はねばならぬ。當文庫本も實に古訓古事記を底本としたのである。

昭和二年九月

幸田成友

版書科教庫文設岩

1

昭和七年四月廿五日印刷  
昭和七年四月廿日發行

發行所

一 東京市神田區  
一ツ橋通町三番地

岩波書店

電話 〇一八七・〇一八八  
九段 〇〇三三番  
振替口座東京二六二四番  
小賣部 〇一八八番  
專用

校訂者

幸田成友

發行者

東京市神田區一ツ橋通町三番地  
岩波茂雄

印刷者

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目  
菊地眞次郎

印刷會英秀社會式株

古事記★  
定價二十錢

# 岩波文庫教科書版目録

裝幀 四六  
表紙フワイパー

第一編	古事記	幸田成友校訂	定價二十錢
第二編	白文萬葉集	佐佐木信綱校訂	定價一圓
第三編	白文萬葉集	佐佐木信綱校訂	定價八十錢
第四編	新訓萬葉集	佐佐木信綱編	定價八十錢
第五編	新訓萬葉集	佐佐木信綱編	定價六十錢
第六編	古今和歌集	尾上八郎校訂	定價四十錢
第七編	源氏物語	島津久基校訂	定價四十錢
第八編	源氏物語	島津久基校訂	定價四十錢
第九編	源氏物語	島津久基校訂	定價四十錢
第十編	源氏物語	島津久基校訂	定價六十錢
第十一編	源氏物語	島津久基校訂	定價六十錢

第十二編	枕草子	池田龜鑑校訂	定價四十錢
第十三編	枕草子	池田龜鑑校訂	定價四十錢
第十四編	枕草子	池田龜鑑校訂	定價四十錢
第十五編	大鏡	和田英松校訂	定價四十錢
第十六編	新古今和歌集	佐佐木信綱校訂	定價六十錢
第十七編	平家物語	山田孝雄校訂	定價四十錢
第十八編	平家物語	山田孝雄校訂	定價六十錢
第十九編	徒然草	西尾實校訂	定價二十錢
第二十編	奥の細道	伊藤松宇校訂	定價二十錢
第二十一編	日本永代藏	和田萬吉校訂	定價二十錢
第二十二編	世間胸算用	和田萬吉校訂	定價二十錢

附記——本書は、高等諸學校教科用に供するを目標として編輯したものであるが、一般國文學研究に於て非常に便利な書入本となり得ると信じます。



讀書子に寄す

岩波文庫發行に際して

岩波 茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。當ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに動員されて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限りなく立たしめ民衆に傾せしめるであらう。近時大量生産預約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽す可き汚穢する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を驚愕して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推挙するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、従來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亘つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を羅めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は預約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の傷きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最良の力を盡し従來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのらるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

國文學	源氏物語 (一) 島津久基校訂	源氏物語 (二) 島津久基校訂	源氏物語 (三) 島津久基校訂	土佐日記 池田龜藏校訂	紫式部日記 池田龜藏校訂	更級日記 西下經一校訂	枕草子(春曙抄) 池田龜藏校訂	枕草子(春曙抄) 池田龜藏校訂	倭漢朗詠集 山田孝雄校訂	古今和歌集 尾上八郎校訂	新古今和歌集 佐佐木信綱校訂	新古今和歌集 佐佐木信綱校訂	新金槐和歌集 豊藤茂吉校訂	藤原定家集(歌) 佐佐木信綱校訂	藤原定家集(年譜) 佐佐木信綱校訂	法華義疏 上卷 花山信勝校訂	法華義疏 下卷 花山信勝校訂	正法眼藏隨聞記 和辻哲郎校訂		
萬葉集 上卷 佐佐木信綱編	萬葉集 下卷 佐佐木信綱編	萬葉集 上卷 佐佐木信綱編	萬葉集 下卷 佐佐木信綱編	萬葉集 上卷 佐佐木信綱編	萬葉集 下卷 佐佐木信綱編	古事記 幸田成友校訂	日本書紀 上卷 藤原美彌編	日本書紀 中卷 藤原美彌編	遺加藤文智校訂	鏡 和田英松校訂	鏡 和田英松校訂	三修西公正校訂	三修西公正校訂	伊勢物語 原代弘賢校訂	竹取物語 並附錄 島津久基校訂	平家物語 上卷 山田孝雄校訂	平家物語 下卷 山田孝雄校訂	平家物語 上卷 山田孝雄校訂	平家物語 下卷 山田孝雄校訂	
日蓮上人抄 崎正治校注	歎異抄 金子大榮校訂	徒然草 西尾實校訂	方丈記 山田孝雄校訂	申樂談 義野上阿彌校訂	花傳書 野上阿彌校訂	奥の細道 伊藤松字校訂	芭蕉七部集 伊藤松字校訂	芭蕉連句集 小宮豊隆編	燕村七部集 伊藤松字校訂	風俗文 選 伊藤松字校訂	鶉衣 石田元季校訂	おらが春 我春集 萩原井水校訂	柳多留 上卷 西原柳雨校訂	柳多留 中卷 西原柳雨校訂	柳多留 下卷 西原柳雨校訂	萬載狂歌集 野崎左文校訂				

德和歌後萬載集	野崎左文校訂	松の葉	藤田徳太郎校註	好色一代男	和田萬吉校訂	好色一代女	和田萬吉校訂	好色五人女	和田萬吉校訂	日本永代藏	和田萬吉校訂	世間胸算用	和田萬吉校訂	西鶴織留	和田萬吉校訂	武家義理物語	和田萬吉校訂	椿説弓張月	上巻 和田萬吉校訂	椿説弓張月	中巻 和田萬吉校訂	椿説弓張月	下巻 和田萬吉校訂	性帯合	和田萬吉校訂	羅の権三重帷子	和田萬吉校訂	心中天の綱	和田萬吉校訂	胡蝶物	和田萬吉校訂	浮世風	呂式亭三馬作	浮世	床 和田萬吉校訂
東海道膝栗毛	十返舎一九作	加賀	河竹雲葉校訂	赤垣源藏・仲光	河竹雲葉校訂	忍ぶの	河竹雲葉校訂	孝子善吉	河竹雲葉校訂	鼠小僧	河竹雲葉校訂	實録先代萩	河竹雲葉校訂	お森	河竹雲葉校訂	お天	河竹雲葉校訂	小説・戯曲・詩歌・隨筆・評論	こゝろ	草夏目漱石著	道	人夏目漱石著	行	集夏目漱石著	深	枕夏目漱石著	草	枕夏目漱石著	坊つちや	人夏目漱石著					
五重塔	幸田露伴著	風流佛・一口劍	幸田露伴著	二人女	房尾綺紅著	觀音岩	前篇 川上眉山著	觀音岩	後篇 川上眉山著	たけくらべ	久米邦武著	うたかたの記	他三篇 久米邦武著	新曲	島野内道徳著	運命論者	他二篇 島野内道徳著	源をぢ	他二篇 島野内道徳著	櫻の實の熟する時	島崎藤村著	千曲川のスケッチ	島崎藤村著	幸福	武者小路實篤著	蒲團・一兵卒	田山花袋著	田舎教	師田山花袋著	小僧の神様	他十篇 武者小路實篤著				

和解の死	男志賀直樹著	陸奥直次郎	長興寺郎著	青銅の基	長興寺郎著	偷	森井川説之介著	厭世家の誕生	日佐藤春夫著	入江のほとり	正宗白鳥著	生まざりしならば	正宗白鳥著	大石良雄	野上彌生子著	海神丸	野上彌生子著	出家とその弟子	食田百三著	布施太子の入山	食田百三著	そ	武者小路實篤著	人間萬歳	武者小路實篤著	波	山本有三著	病牀六尺	正岡子規著	墨汁一滴	正岡子規著	仰臥漫録	正岡子規著		
子規歌集	正岡子規著	左千夫歌集	土田文明著	上田敏詩抄	野野村自選	晚翠詩抄	土井晩翠著	藤村詩抄	島崎藤村自選	有明詩抄	藤原明著	泣華詩抄	藤田泣菫著	歌道遙遺稿	金川松風著	歌舞音楽略史	小中村清著	俗樂旋律考	上原六郎著	蘭學事始	野上彌一校訂	茶の	本岡圓三著	網島梁川集	安倍能成編	清澤文集	清澤能成著	福澤撰集	福澤能成著	北村透谷集	島崎藤村編	海舟座談	本善治編		
外國文學(小説・戯曲・詩)		杜	詩卷之一 渡山又四郎譯註	杜	詩卷之二 渡山又四郎譯註	杜	詩卷之三 渡山又四郎譯註	杜	詩卷之四 渡山又四郎譯註	陶淵明集	渡山又四郎譯註	唐詩選	上巻 渡山又四郎譯註	唐詩選	下巻 渡山又四郎譯註	即興詩人	上巻 森外郎著	即興詩人	下巻 森外郎著	即興詩人	下巻 森外郎著	プラ	ドイブセン著	幽	曲 ストロンベルク作	稲	妻 ストロンベルク作	父	妻 ストロンベルク作	令嬢	ユリ エストリントベルク作	オネーギン	柴川正夫譯	イワーン	ニキフオロ 原久一郎譯





れる様に、小さい形の中に、深山の内  
容を盛る形式を採りました。  
□ 勝求の自由 しかも讀者が全く自由に  
欲しい本を隨時求められる自由選擇の  
方法を採りました。

□ 印刷の鮮明、校正の精確、製本の堅牢  
等の實際的方面に於ても亦最善を期し  
ます。

□ 體裁は菊半裁判、紙裝、平福百穂畫伯  
裝幀

□ 活字は八ポイントを用ひました。

□ 約百頁を單位として星一つを以てそれ  
を現はし、★一つ毎に二十錢の定價で  
す。

□ ★一つを1に算へて此の文庫の番號を  
進めてゆきます。

□ 番號はただ發行順に従つて之を追ふも  
のであります。

□ ★★或は★★★は、それぞれ二百頁或は  
三百頁の本一冊なることを示し、百頁  
づつの分冊ではありません。

□ 送料(及び定價)は左表の通りです。

★ 定價二十錢 送料二錢  
★★ 四十錢 四錢  
★★★ 六十錢 六錢  
★★★★ 八十錢 六錢

御註文は前金で御願ひ致します。小  
さい本で極度の廉價なものですから必ず送  
料はお添へ下さい。切手代用は一切増  
に願ひます。

◆ 岩波文庫新刊書目 ◆

- 源 氏 物 語 四 鳥津久基校訂 ★★★
- 三條西榮花物語中巻 三條西公正校訂 ★★
- 煤 煙 森田 草平作 ★★
- 支那通俗古今奇觀 青木正見校訂 ★
- 小説集
- 獅子座の流星群 ロマン・ロラン作 ★
- 片山敏彦譯
- マルクス神聖家族或は 石堂清倫譯 ★★★
- エンゲルス批判的批判の批判 三木 清譯 ★★★
- 史 科學的に見たる 寺田寅彦譯 ★★
- 科學的宇宙觀の變遷

終

